

Ⅷ 中井丘遺跡の発掘調査

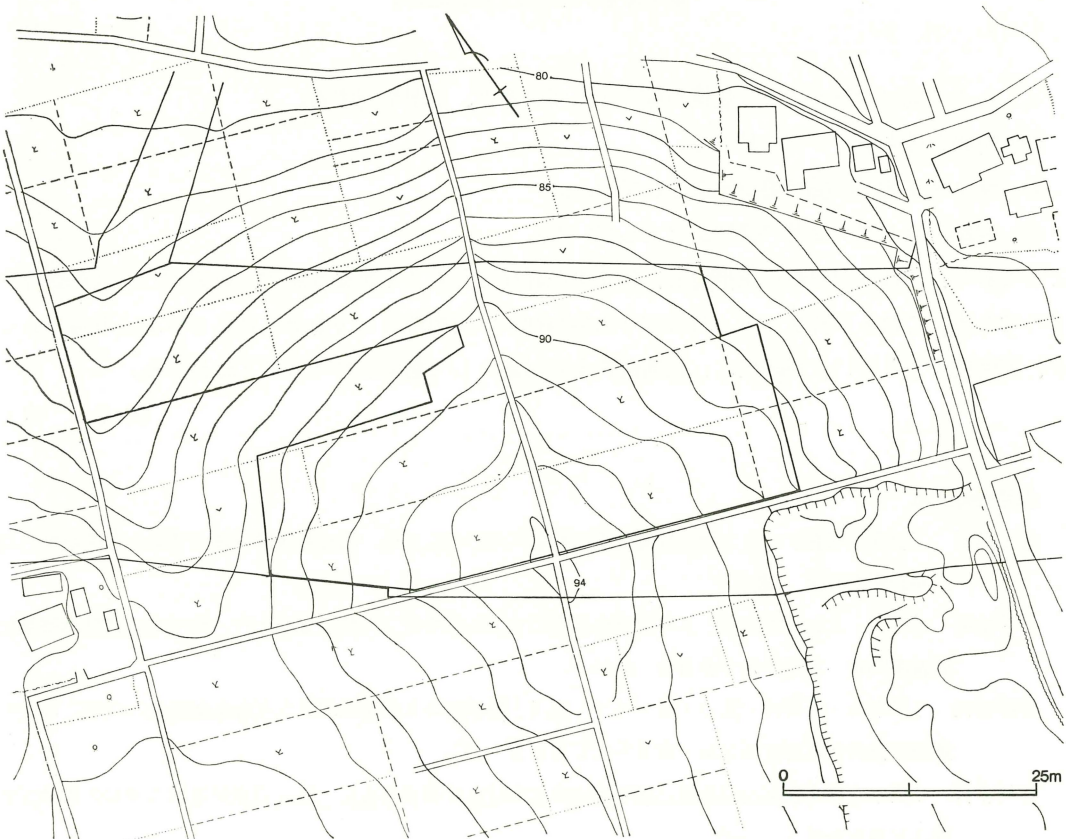
1 遺跡の概観

中井丘遺跡は生野山、大久保山とともに「児玉三山」と通称される諏訪山と上武山地とに挟まれた小独立丘陵より東へ派生した舌状台地上に立地している。この台地の西側には小さな埋没谷があり、谷を挟み中山遺跡が立地する台地と対峙している。台地の標高は94~87mで北へ緩く傾斜し、周囲の水田との比高差は20mを測り、東側には広く水田を臨んでいる。調査対象区は台地の平坦な部分から北側の斜面にかけての部分に相当し、対象面積は3200㎡であった。

発掘調査前の現地調査では、一部荒地を除き全面桑畑として利用され、国分期の土器片が散布していた。基本層序は台地平坦部で上位より、表土（腐植土）10~20cm、茶褐色土20cm、ソフトローム15cmでハードローム層に致り、斜面部では茶褐色土がやや厚く堆積していた。

発掘調査は桑木や表土の一部を重機で排除した後、鋭意遺構検出に務めたが、遺構は何も検出されなかった。遺物は縄文時代早期田戸下層式、茅山上層式、前期諸磯a・b式の土器片と早期から後期にかけての石鏃、削器、礫器、打製石斧等が遺構確認時に散在して出土している。

調査対象区から遺構は確認されなかったが、遺跡の立地からして南側の隣接地に遺跡の中心が存在



第87図 中井丘遺跡全測図

するものと思われる。

2 出土遺物

グリッド出土縄文式土器 (第88図)

本遺跡出土の縄文式土器は、早期沈線文系土器 1 点、条痕文系土器 1 点、前期諸磯 a 式 2 点、諸磯 b 式土器 1 点である。いずれも遺構確認時にグリッドより出土したもので、一括して説明する。

第 1 群土器 (第88図 1)

田戸下層式に比定されるものである。一条の横位の沈線文に斜位の沈線文が施文されている。胎土には微量の砂粒を含むがきめ細かい。焼成も良く、赤褐色である。

第 2 群土器 (第88図 2)

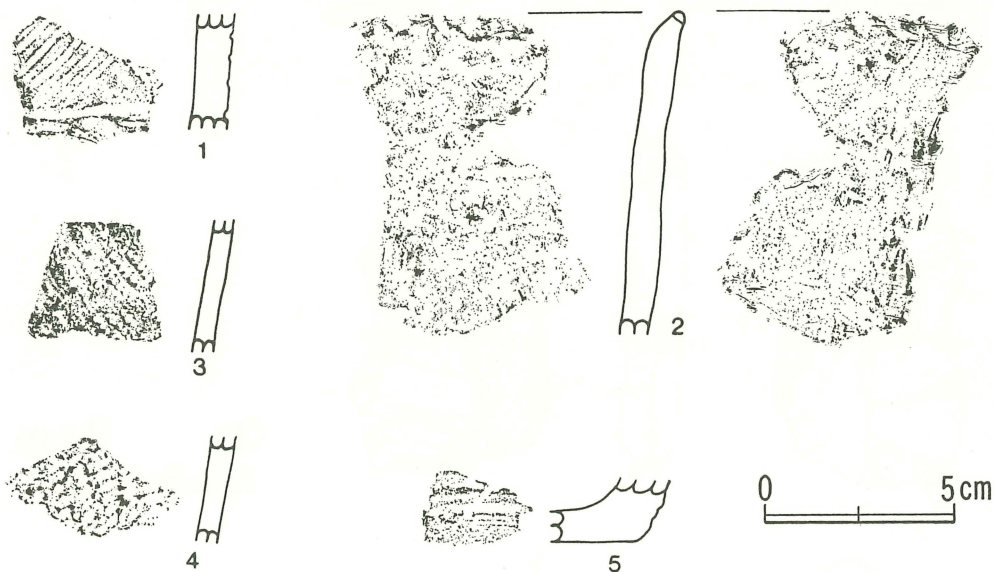
条痕文土器である。口唇部に刻目をもち、口縁内側は内剥ぎ状に削られている。表裏面とも横位の細かな条痕で調整されている。胎土には砂粒と繊維を含む。焼成は良好で茶褐色。茅山上層式に比定される。

第 3 群土器 (第88図 3・4)

諸磯 a 式の縄文だけの土器である。 $R < \frac{L}{2}$ の縄文原体を横位に施文している。胎土は砂粒を含むが焼成は良い。3 赤褐色、4 黒褐色を呈する。

第 4 群土器 (第88図 5)

諸磯 b 式の平行沈線文土器の底部片である。地文に縄文は見られず、太・細の 2 種の竹管で施文されている。胎土は砂粒含みザラついている。焼成は良く、茶褐色を呈する。



第88図 中井丘グリッド出土縄文式土器実測図

グリッド出土石器 (第89~91図)

中井丘遺跡からは、石鏃・打製石斧等総数12点の石器が出土しているが、すべて表採や遺構確認時に散在的に出土したものである。

時期的にかなりの幅をもつと考えられるが、以下一括して説明する。

石鏃 (第89図 1・2)

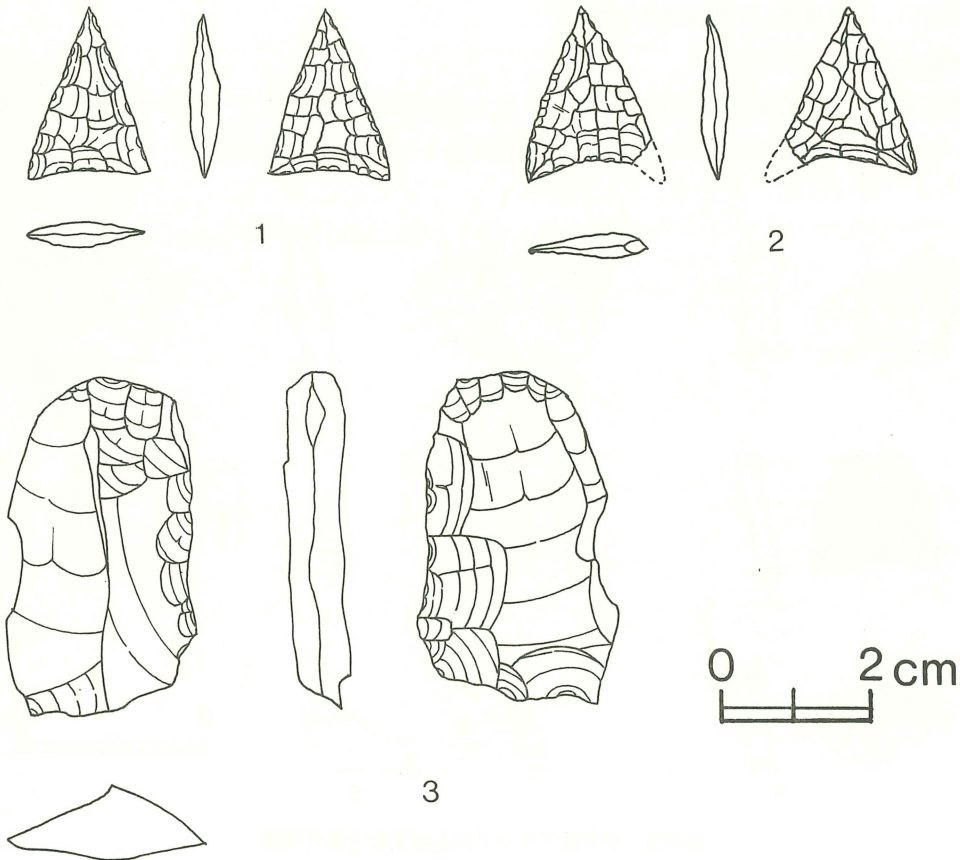
2点とも二等辺三角形に近い形態のもので基部に浅い抉りをもつ。1は両面に施された調整剥離で形と厚さを整え、抉りの調整は主剥離面に施されている。2は先端部、脚部を僅か欠くが、両面に加えられた丁寧な調整剥離で整形されている。側辺部は鋸歯状を呈し、抉りも1よりやや深い。

削器 (第89図 3)

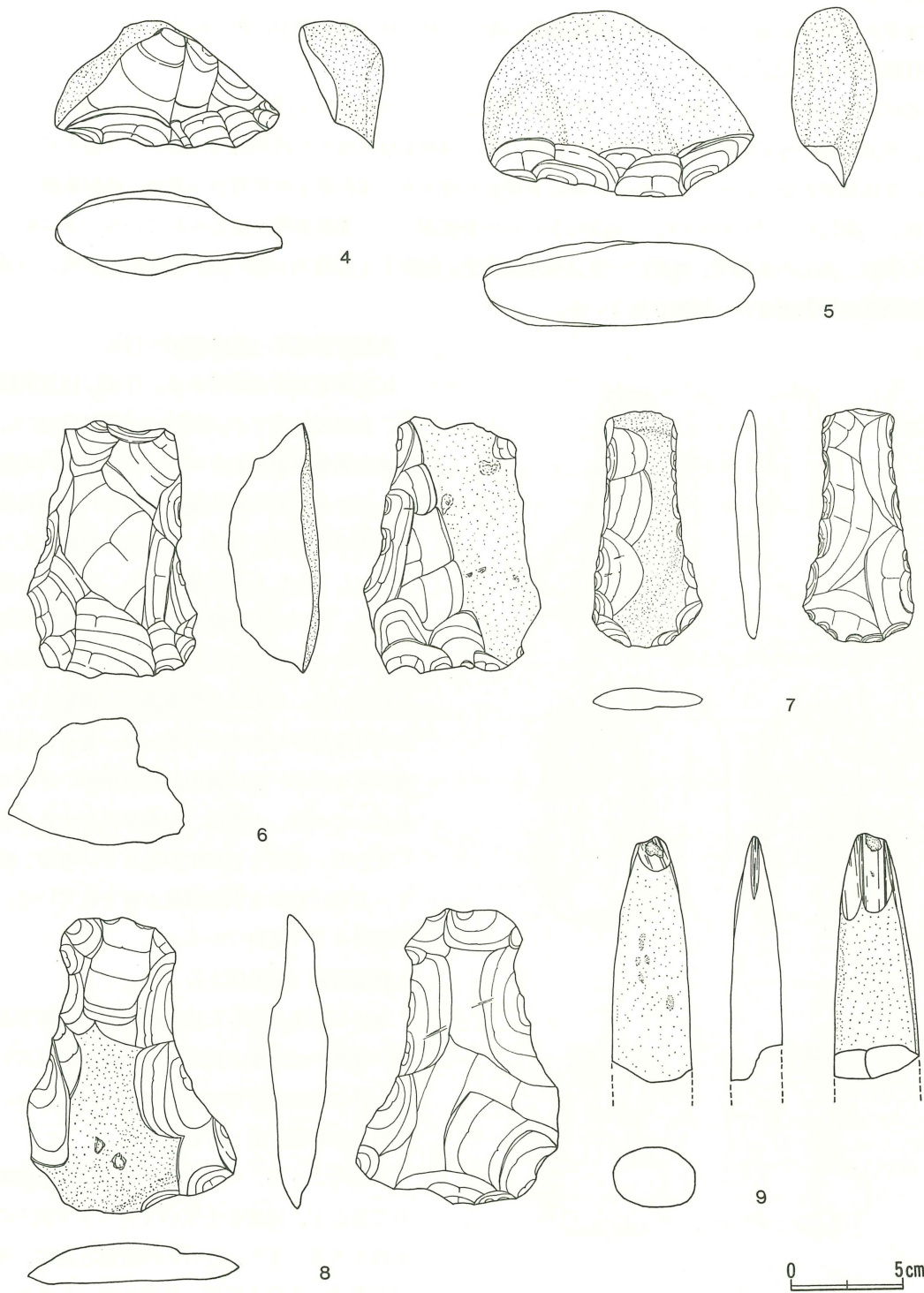
縦長の剥片を使用し、片側辺部には主剥離面から調整加工を施して刃部を作り出し、片側辺部は粗い剥離だけで調整加工は施されていない。

礫器 (第89図 4・5)

2点とも薄手の扁平礫を素材とし、刃部はかなり鋭角的に作り出され削器の一種と考えられる。4は剥離した節離面以外はすべて自然面が残り、刃部は粗く作り出されている。風化が進み、使用痕は



第89図 グリッド出土石器(1)実測図



第90図 グリッド出土石器(2)実測図

確認できない。5は礫の約半分に相当すると思われ、刃部以外はすべて自然面を残している。刃部は一方から打撃が加えられ、数回の調整剥離が加えられ、使用痕も僅かに見られる。

打製石斧（第90図6～8）

6は断面山形を呈する撓形、平刃の打製石斧である。周辺から中央部に向い粗い成形剥離が施され、片面には一部自然面を残している。刃部も粗い調整剥離が施され鈍角的な刃部が作り出されている。7は細身の撓形、丸刃のもの。片面に自然面を残すが、成形剥離後両面から細かな調整剥離が施され、丁寧に仕上げられている。刃部は主に成形剥離面からの調整剥離が加えられている。8は典型的な撓形、丸刃のもので、片面に一部自然面を残す。両面とも周辺から粗い成形剥離が施され、刃部は7同様成形剥離面から調整されている。

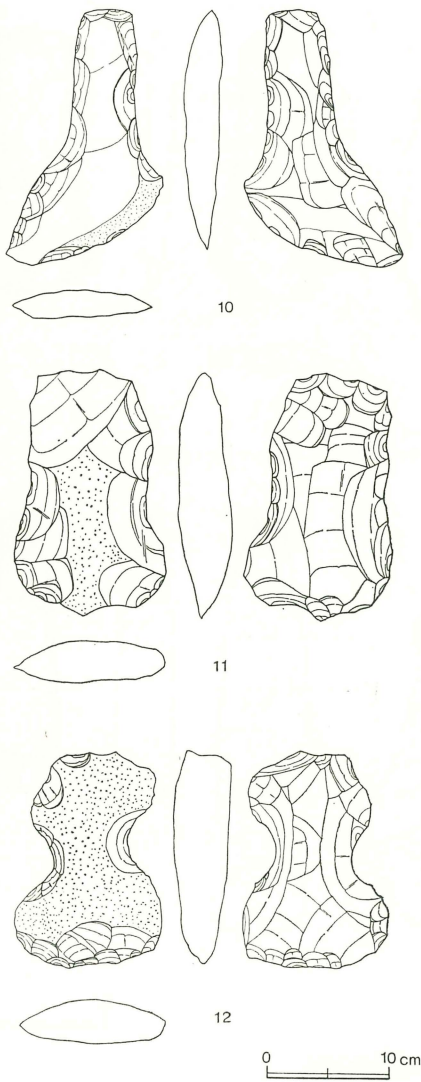
大形打製石斧（第91図10～12）

10は所謂有肩石器である。片面には主剥離面、自然面を残すが、基部から肩部にかけて、丁寧な調整剥離が施されている。刃部の調整は、主に自然面を残す側から施され、鋭角的な刃部が作り出されている。11は撓形、丸刃でずっしりとした重量感がある。自然面を残す側は、粗い成形剥離が施され、片面は主剥離面がわずかに残る程に、細かな調整が加えられている。刃部は自然面側から調整され、かなり使用されたものと思われ、著しい敲打痕が見られる。12は典型的な分銅形、平刃で分厚いもので、自然面、主剥離面を大きく残している。両面とも風化が進んでいるが、抉り、刃部に細かな調整剥離が施されている。刃部はかなり鈍角である。

磨製石斧（第90図9）

9は刃部を欠損した乳棒状の磨製石斧である。細長の自然礫を使用し、全面磨かれている。特に基部の研磨は丁寧に施されている。楕円形の断面を呈している。

以上のように、中井遺跡出土の石器を説明してきたが、12点ともすべてグリッド出土のものである。また、これらの石器と共に、田戸下層式、茅山上層式、諸磯a式・b式石器が散発的に出土しているが、量的にも少なく時期決定の目安にはならない。正確な帰属時



第91図 グリッド出土石器(3)実測図

期は不明であるが、一応ここでは、3～6を早期の所産、その他を前期以降の所産と考えたい。

石器観察表

器種	No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	えぐり(mm)	角度(度)	重さ(g)	石 材	出土地点	備 考
石 鏃	1	24.5	16.5	4.2	0.9	42°	0.62	チャート	表 土	完 形
"	2	21.3	18.3	3.5	1.2	51°	0.55	チャート	"	脚一部欠損

器 種	No.	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	刃部長(cm)	重さ(g)	石 材	出土地点	欠損状況 ・備考
削 器	3	4.45	2.4	0.85	3.7	12.5	黒曜石	表 土	完 形
磔 器	4	5.55	10.1	3.5	9.7	256	細粒砂岩	"	"
"	5	8.2	12.25	3.75	19.8	425	"	"	"
打製石斧	6	11.1	7.9	3.9	5.8	447	ホルンフェルス	"	"
"	7	10.3	4.9	0.95	5.5	77	中粒硬砂岩	"	"
"	8	13.1	9.2	2.63	10.2	249	細粒砂岩	"	"
磨製石斧	9	10.8 (残長)	3.5	2.2	—	177	緑色岩	"	刃部欠損
大形打製石斧	10	19.2	12.6	2.8	14.2	660	石墨片岩	"	完 形
"	11	19.8	12.2	4.2	11.8	1350	粗粒砂岩	"	完 形
"	12	16.8	12.1	4.4	11.2	1070	ホルンフェルス	"	完 形

Ⅸ 鶴巻遺跡の発掘調査

1 遺跡の概観

鶴巻遺跡は、古くから秩父街道の宿場町として栄えた寄居町を扇頂部とする荒川扇状地を北方眼下に見下ろす荒川右岸の狭長な台地上に所在する。標高86~89m、荒川の現河道から1段めの段丘上に展開する水田面からの比高差は15m前後を測る。

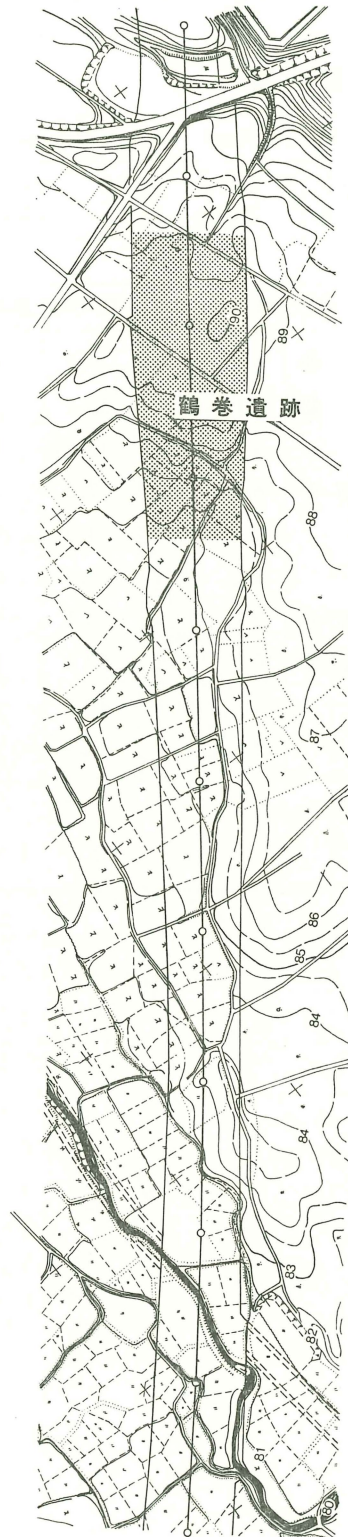
調査前の分布調査では、南西から北東へのびる台地の平坦部から緩傾斜面にかけて、特に密な部分は見られず、少量の遺物が散布していた。遺跡の東側は、緩い傾斜をもつ埋没谷が吉野川へ続き、西・北側は、荒川の段丘面へ急崖となり落ちている。また、遺跡の一部は桑園に利用されているが、大部分は雑木林のため分布調査も不可能であり、遺跡の正確な広がりには把握できない。

今回の調査区は、路線が台地をほぼ東西に横断するため、台地上平坦部、緩傾斜面、谷部から構成されている。調査は、真北を基準に10×10mグリッドをベースに調査区全面をカバーした。グリッドは、北から南(X軸)へアルファベットで、西から東(Y軸)へ数字を付し、A-1、B-1グリッドと呼称した。基本層序(第94図)については次項で詳しく述べる。

調査の結果、次の遺構・遺物を検出した。

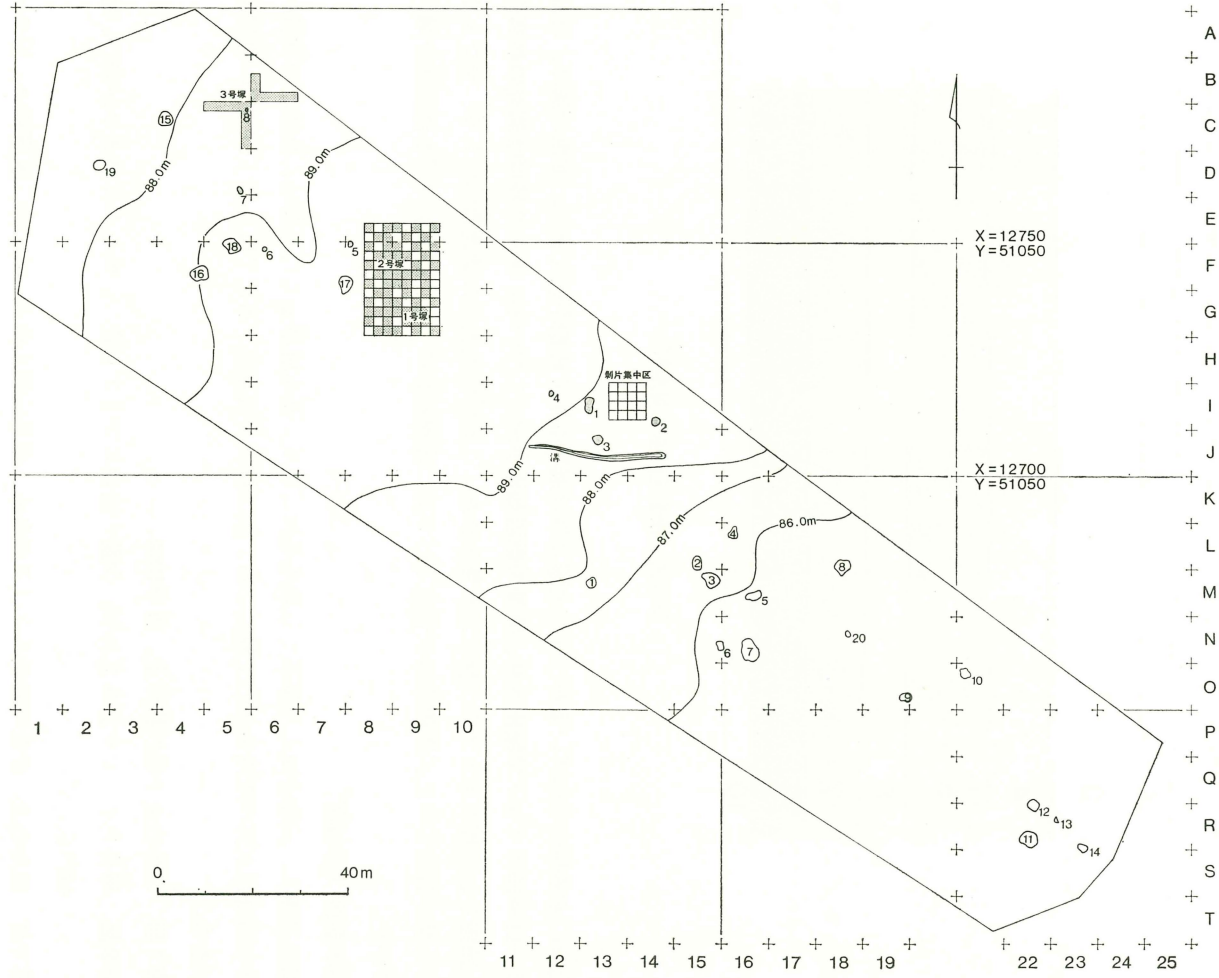
旧石器時代の剥片集中区1ヶ所、縄文時代の土壌1基を含む8基の土壌、近世の溝1、塚3基、風倒木痕20基。

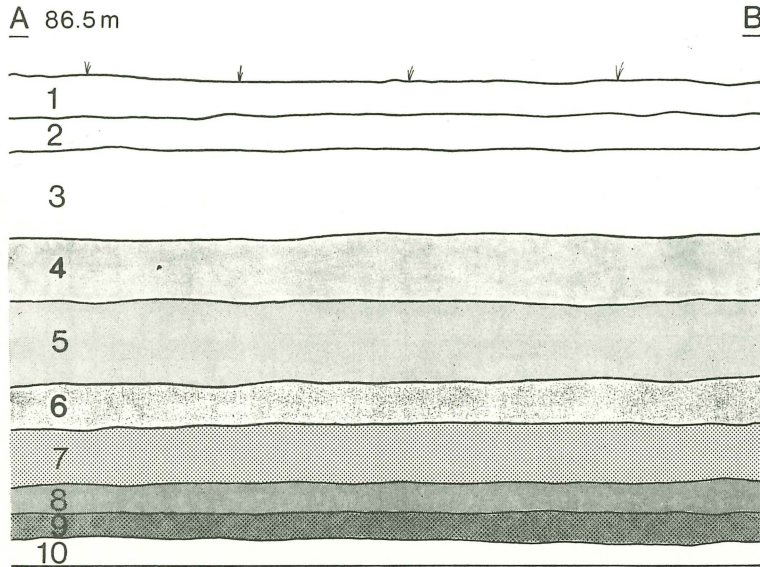
剥片集中区は、緩傾斜面のI-14グリッドを中心に遺物が分布し、浅い表土下部より直ちに包含層にあたる。遺物は、細石刃石核、石核、剥片からなり、同レベルで土師器の細片なども混在し、土層状態からしても、全ての遺物が原位置を保っているものとは思われない。土壌は、剥片集中区周辺に4基と台



第92図 鶴巻遺跡地形図

第93图 鹤卷遗址全测图 (S=1/400)





第94図 鶴巻遺跡基本層序図

地上部に4基検出されているが、5号土層以外は遺物も無く時期不明である。近世の溝は、ほぼ東西にJ-11~15グリッドで検出され、少量の磁器細片が出土している。1・2号塚は調査の最高位平坦面に隣接し、両塚とも大きな土採取穴が見られた。3号塚は調査区の最北西部にあり、マウンド下に8号土層が確認された。風倒木痕は台地上に5基、緩傾斜面に4基、谷部に11基と調査区全域に散在していた。

基本層序（第94図）

鶴巻遺跡は、洪積台地と埋没谷から構成されている。基本層序としたものは、自然層の堆積状態が良好な調査区東側の埋没谷部の土層である。表土層より調査最下層までは、以下の10層の自然層に区分できる。

- 第1層 茶褐色土 現代耕作土、層厚10cm。
- 第2層 黒褐色土 やや赤味をおび、少量の白色スコリアを含む。軟らかく締まりが無い。層厚10cm前後。
- 第3層 漆黒色土 多量の白色スコリアを含み、非常に硬く締まっている。層厚25cm。第2・3層は谷部に発達している。
- 第4層 黄褐色ソフトローム 少量の茶褐色スコリアを含み、全体に軟らかく締まりが無い、層厚20cm。
- 第5層 黄褐色ハードローム 多量の茶褐色スコリアを含み、硬く締まっている。第4層との境界

は不明瞭。層厚25cm前後。

第6層 灰褐色ハードローム 多量の茶褐色スコリアを含み、粘質化している。部分的に微量の鉄分を含む。層厚10cm。

第7層 赤褐色粘質土 多量の赤褐色鉄分を層下面に含み、層全体は不均質で弱い粘性をもつ。層厚は15cm前後。

第8層 灰白色粘土 層全体が均質・緻密。非常に粘性が強く、不透水層で上面より湧水が見られる。層厚10cm。

第9層 灰白色粘質土 微量の濃赤褐色鉄分を含み、不均質で粘性が弱い。層厚10cm。

第10層 黒褐色粘質土 多量の黒褐色鉄分を含み硬く締まっている。層全体は不均質。

2 遺構と出土遺物

(1) 剥片集中区 (第93・96図)

調査区ほぼ中央部のI-13・14グリッドにかけて分布している。台地平坦面から緩傾斜面へ移行する肩部にあり、約4×2mの狭い範囲に集中分布している。石器は、表土下部から黄褐色ソフトローム上面にかけて出土している。主な石器としては、細石刃石核、石核、剥片であるが、一部土採り等の攪乱を受け、包含層まで約15cmと非常に浅く、土師器の細片も混在しているため、すべての石器が原位置を保っているか疑わしい。

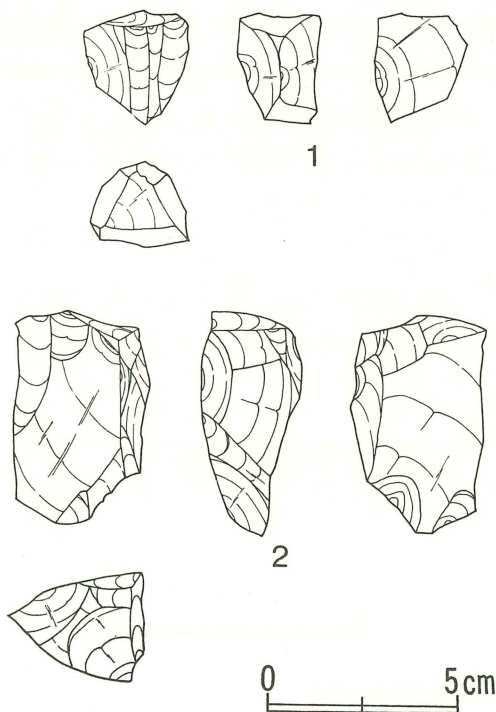
剥片集中区出土石器 (第95図)

細石刃石核 (第95図1)

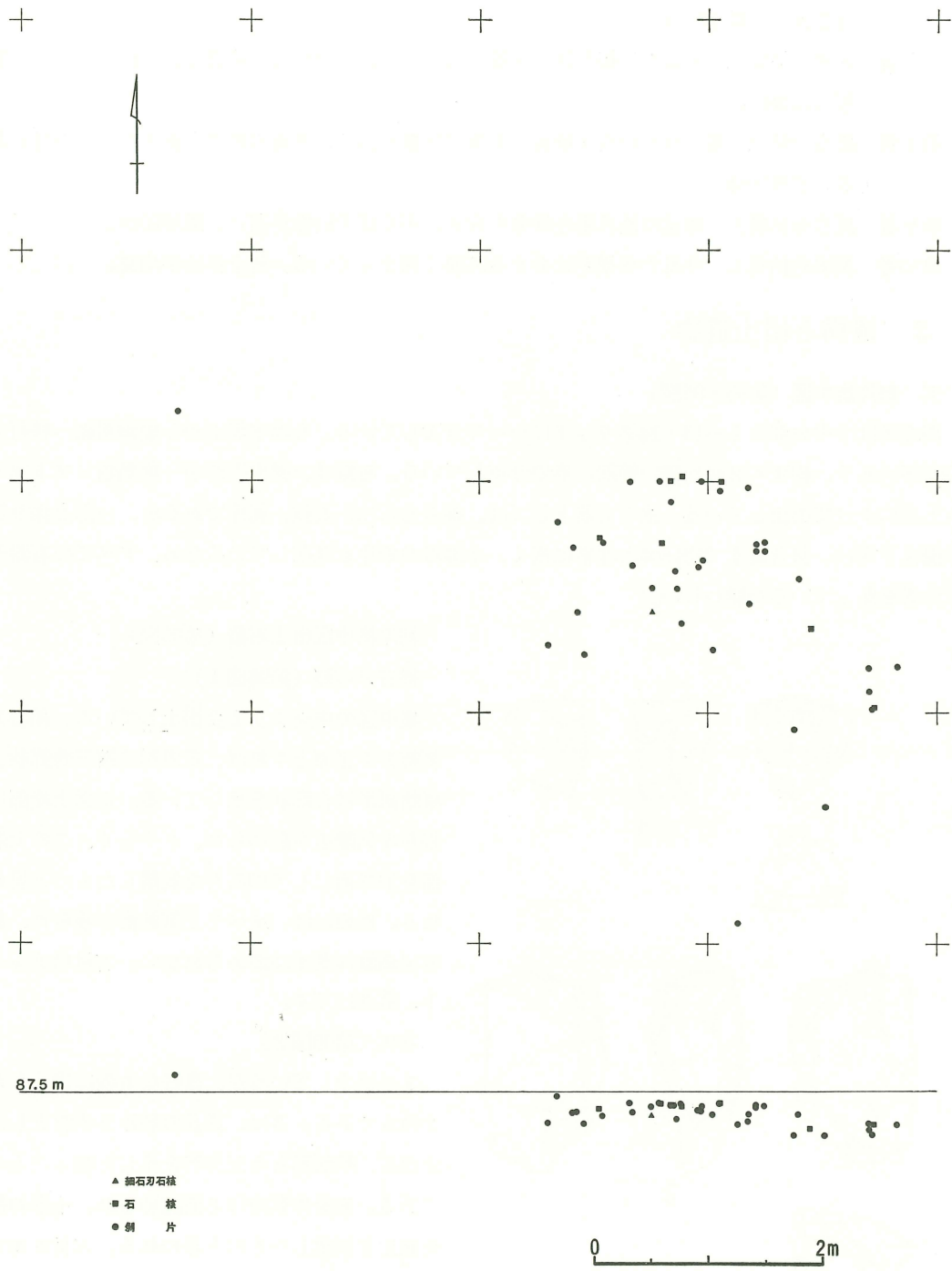
集中区の中央より1点出土している。細石刃剥離面を正面とすれば、正面形は逆三角錐状、縦断面形は合形状を呈している。正面上端部に細かな剥離痕が認められ、おそらく、この上端部を加撃面にして細石刃を剥離したものと思われる。他面には、すべて主剥離痕が観られ、細石刃剥離作業面は認められない。石材はチャート、重さ19.5g。

石核 (第95図2)

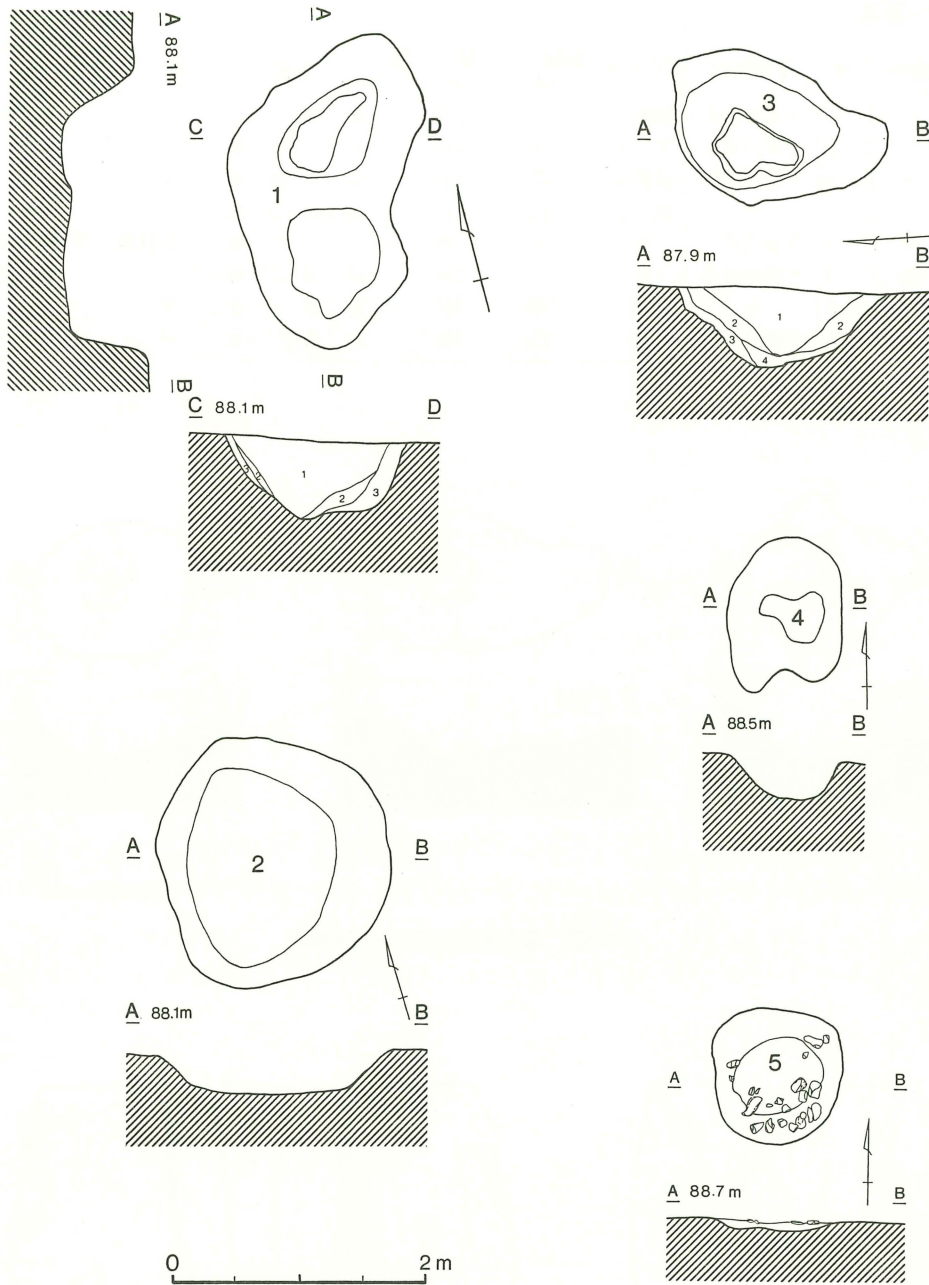
7点出土しているが、良好なものは図示した2のみである。2は、縦長の剥片を素材とし、正面形、断面形とも三角形を呈した整ったものである。剥離作業面は2面認められ、小形の縦長剥片を剥離したものと思われる。石材ホルンフェルス、重さ52.3g。



第95図 鶴巻遺跡剥片集中区出土石核



第96图 鶴卷遺跡剝片集中区遺物分布图



土壌1 土層

- 1 黒褐色土（微量のローム・炭化物含み、堅くしまっている）
- 2 茶褐色土（多量のロームを含む）
- 3 黄褐色土（ローム・ロームブロックの混土層、堅くしまっている）

土壌3 土層

- 1 黒色土（微量の白色スコリアを含み、強い）

2 茶褐色土（多量のローム含む）

3 濃茶褐色土（多量のローム含む）

4 黄褐色土（ロームと微量の濃茶褐色土を含む）

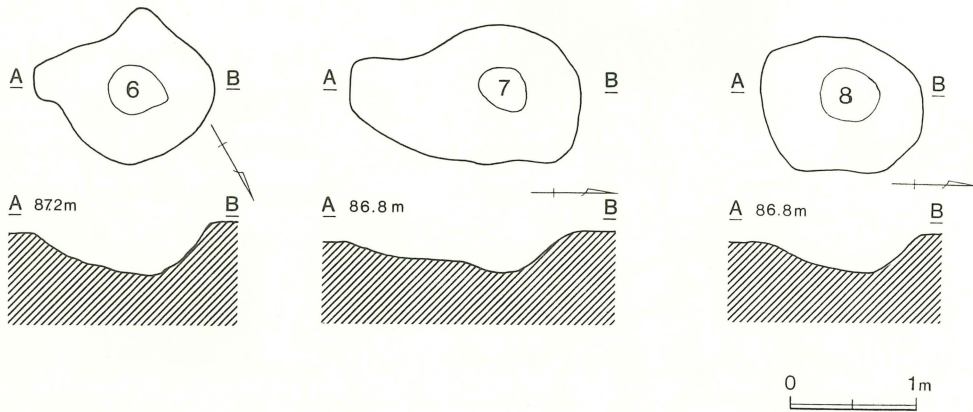
土壌5 土層

茶褐色土（微量の炭化物、白色スコリアを含む）

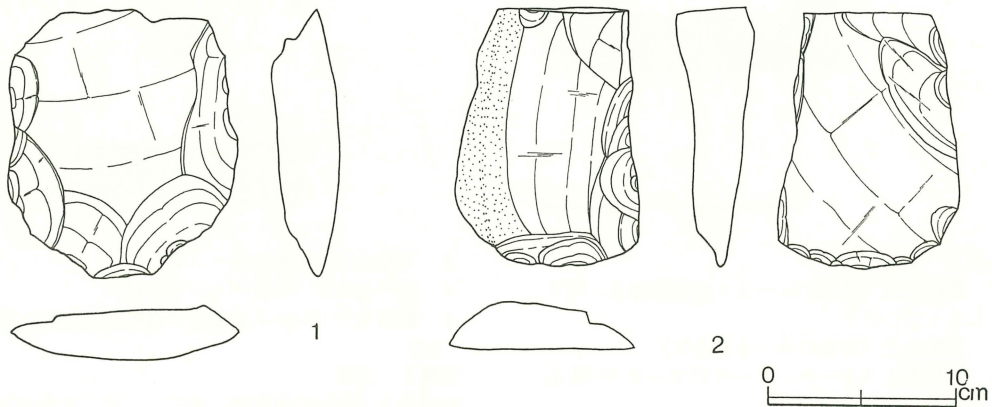
第97図 鶴巻遺跡土壌1～5実測図

土壌一覽表

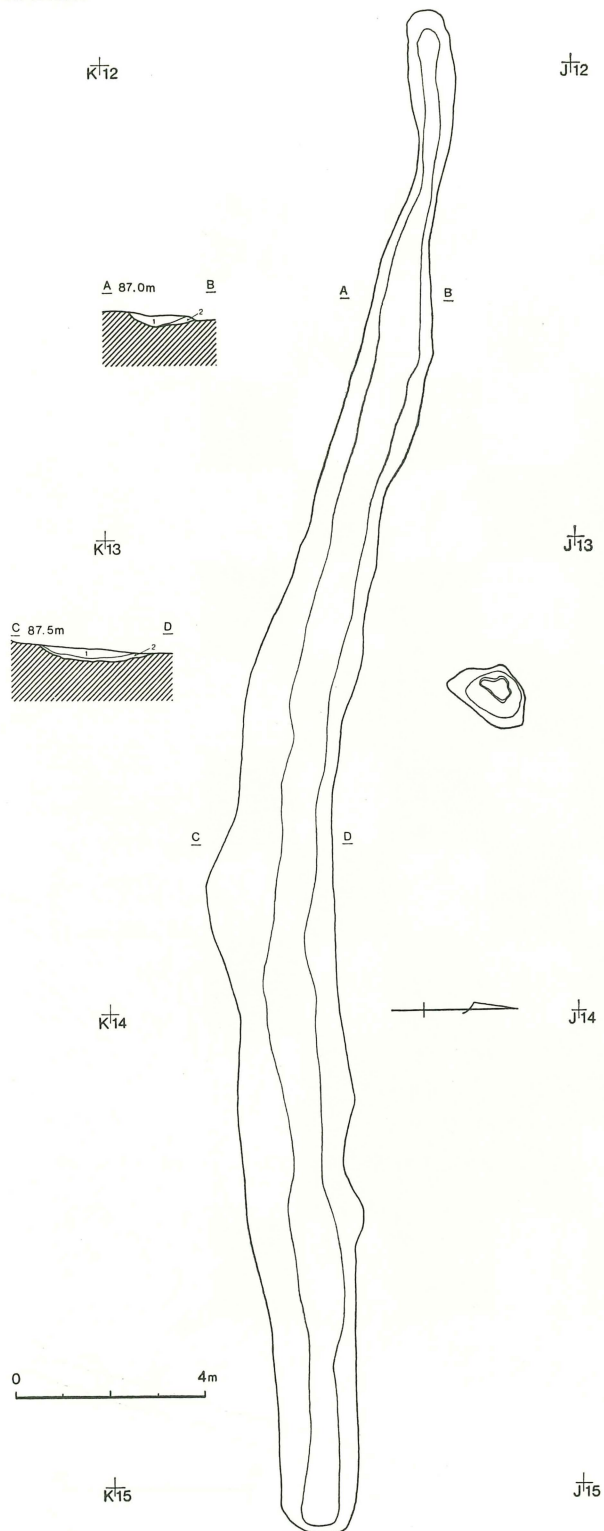
No.	挿図No.	位置	平面形態	断面形態	長軸長 (cm)	短軸長 (cm)	深 さ (cm)	長軸方位	出土遺物	時 期
1	100	I—13	不正楕円形	播鉢状	251	145	60	N-26°-E	なし	不明
2	〃	I—14	不整円形	皿状	195	180	35	N-58°-E	〃	〃
3	〃	J—13	不整楕円形	播鉢状	182	110	64	N-26°-E	〃	〃
4	〃	I—12	〃	皿状	113	92	30	N-19°-E	〃	〃
5	〃	F—8	不整円形	〃	105	98	8	N-45°-E	大形打製石斧	縄文時代後期
6	101	F—6	不整楕円形	〃	145	120	45	N-41°-W	なし	不明
7	〃	D—5	〃	〃	185	105	35	N-19°-E	〃	〃
8	〃	C—5	不整円形	〃	130	105	30	N-27°-E	〃	〃



第98図 鶴巻遺跡土壌6～8実測図



第99図 鶴巻遺跡土壌5出土石器実測図



- 1 茶褐色土 (多量の浅間山Aスコリアを含む)
- 2 濃茶褐色土 (少量の浅間山Aスコリアを含む)

第100図 鶴巻遺跡溝全測図

(2) 土壌 (第97・98図)

第1号土壌 (第97図)

I-13グリッドの緩傾斜面に位置する。プランは長径2.5mの不整楕円形を呈し、底面は2段の底をもつ。覆土にはすべてロームが混入し、自然堆積状態を示している。遺物は出土していない。

第2号土壌 (第97図)

I-14グリッド、剥片集中区東側に位置している。不正楕円形を呈する浅い皿状の土壌である。掘り方はしっかりしているが、遺物はない。

第3号土壌 (第97図)

溝の北側J-13グリッドにある。長径1.8mの不整楕円形を呈し、底面には凹凸がある。遺物は出土していない。

第4号土壌 (第97図)

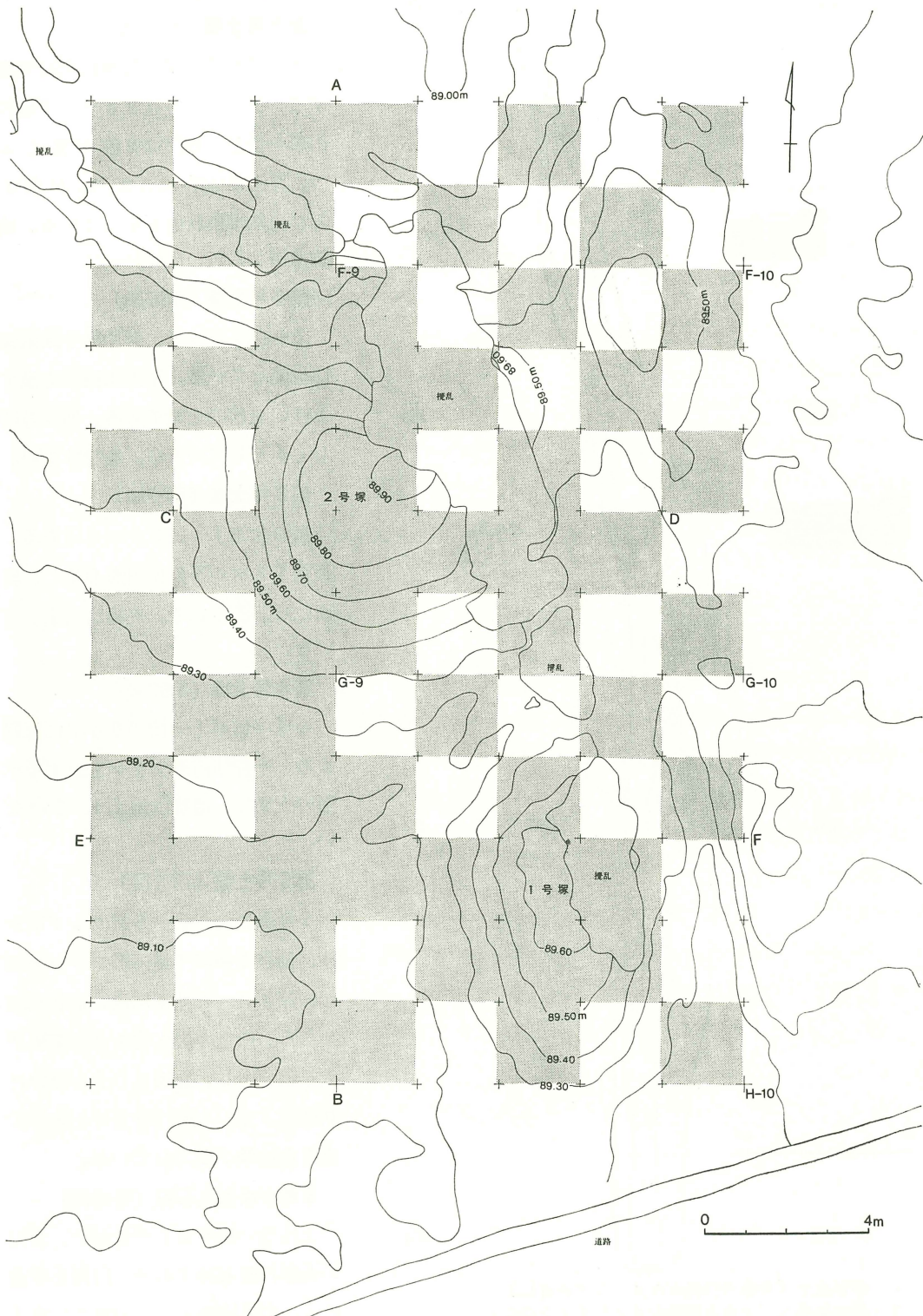
台地平坦面I-12グリッドに位置する。不整楕円形プランを呈する小形の土壌で、遺物は出土していない。

第5号土壌 (第97図)

1号塚西側のF-8グリッドにあり、長径1mの不整円形プランを呈し、深さ8cmと非常に浅い皿状土壌である。微量の炭化物を含む茶褐色土を覆土とし、底面より少し浮いた状態で2点の大形打製石斧を含む22点の自然礫が出土している。

5号土壌出土石器 (第99図)

1は浅い抉りをもつ分銅形、丸刃の大形打製石斧である。円礫を素材とし、表裏両面からの調整加工で浅い抉りを付けている。片面には自然



第101図 鶴巻遺跡1・2号塚全測図

面を残し、主剝離面を残す側一方からの調整加工で刃部を作り出しているが、丁寧な作りとは言えない。石材は中粒硬砂岩、重さ825g、完形である。2は撓形、丸刃の非常に雑な作りの打製石斧である。片面の側縁に沿って自然面を残し、胴部は主剝離面側から粗い調整加工がされている。刃部は両面から調整されている。粗粒砂岩製、重さ670g。

第6号土壙（第98図）

台地平坦面のF-6グリッドに位置する。プランは長径1.4mの凹凸のある不整楕円形を呈している。底面には多少凹凸があり、遺物は出土していない。

第7号土壙（第98図）

調査区西側D-5グリッドの緩傾斜面上に位置している。長径1.9mの不整楕円形プランを呈し、浅い皿状土壙である。遺物は出土していない。

第8号土壙（第98図）

3号塚のマウンド中央部下に検出されたが、直接3号塚に伴なうものではない。長径1.3mの不整楕円形プランを呈し、浅い皿状の土壙である。覆土はローム混りの茶褐色土で、遺物は出土していない。

(3) 溝（第100図）

緩傾斜面のJ-11~15グリッドにかけて、ほぼ東西に地形の傾斜に沿って検出された。全長32m、最大幅2.4m、深さ25cmの浅い溝である。覆土には浅間山Aスコリアを多量に含み、少量の磁器細片が出土している。近世の地境溝と思われる。

(4) 塚（第101・102・103図）

発掘調査前の現地調査で台地上平坦面に、3ヶ所の不規則な地ぶくれ状の塚が確認された。近接する箱崎古墳群や百塚という地名の存在から低墳丘の古墳を想定し、10×10mグリッドを基準に、2×2mの小グリッドをマウンドに設定して、調査を実施した。

第1号塚（第101・103図）

調査区中央部のF-9グリッドを中心に、最も標高の高い地点に位置している。南側には隣接して第2号塚が存在する。塚の東側には、土採りのため基盤層まで深く掘られた攪乱穴が観られ、マウンドも $\frac{1}{3}$ 程度削られていた。プランは8.5×7mの南北を長軸とする隅丸方形を呈している。高さ50cmを測り、塚頂部の標高は89.94mである。

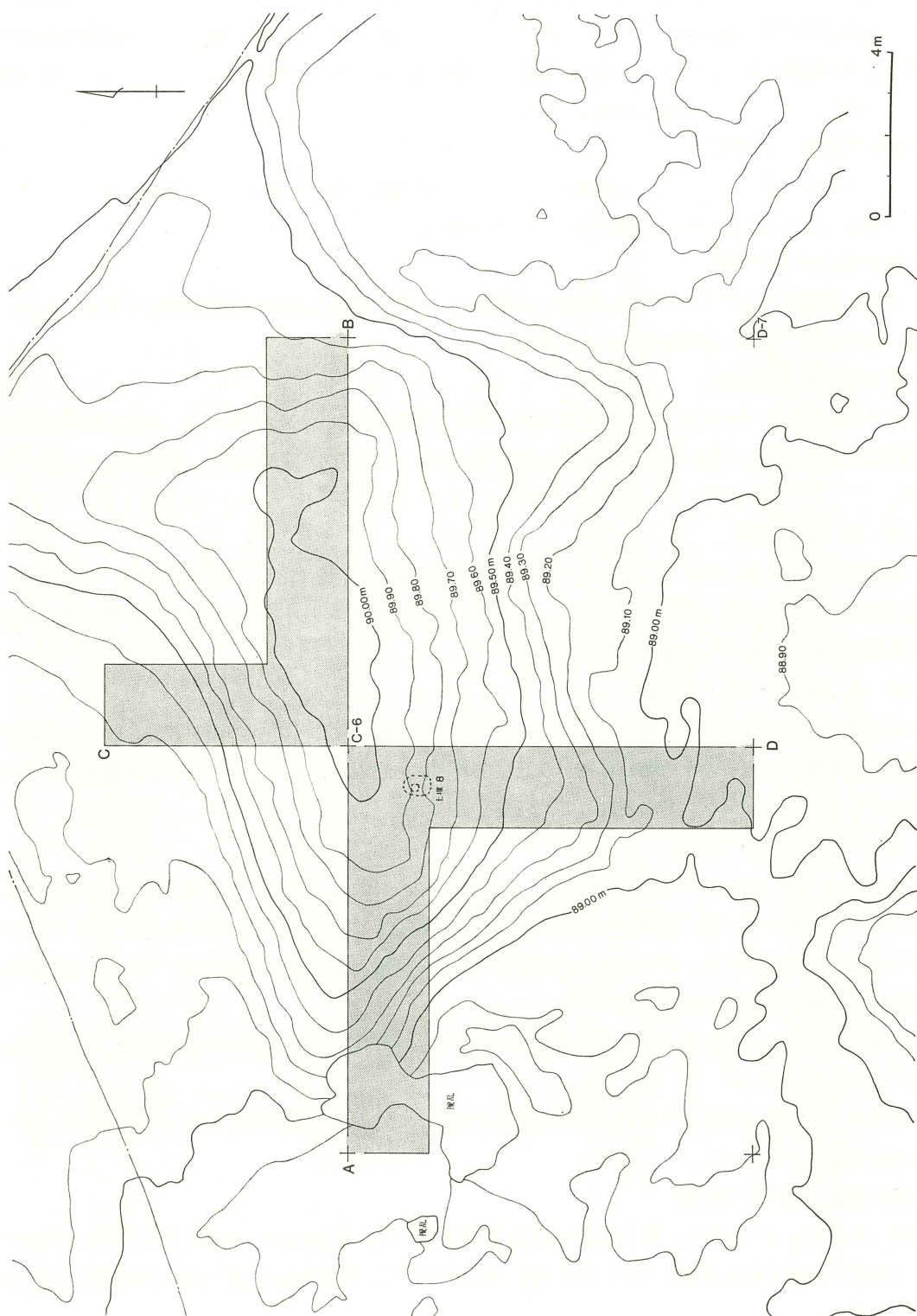
土層は茶褐色土、黒色土、漆黒色土の3層に区分でき、それぞれ基本層序に対比され、人為的に盛土した可能性はない。

遺物は、塚裾部の黒色土中より馬の左上顎歯が出土している。埋葬されたものと思われるが、掘り込みは確認できなかった。

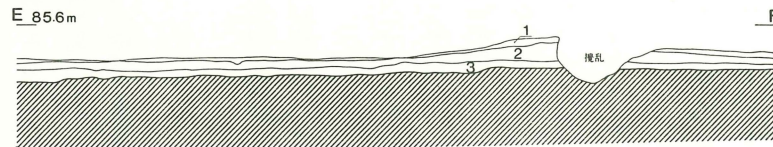
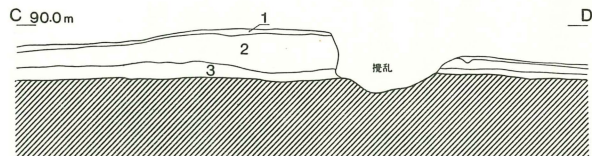
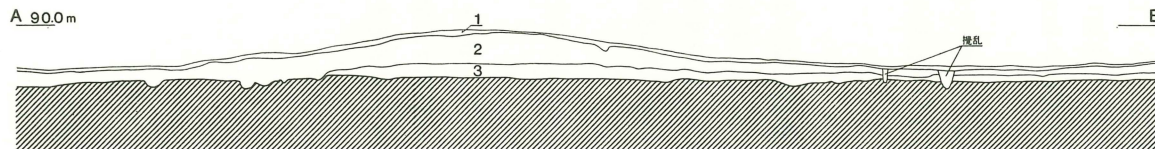
第2号塚（第101・103図）

G-9グリッドに位置し、第1号塚の南側に隣接している。長軸8.5m、短軸5.2mの不整楕円形プランを呈し、第1号塚同様にマウンドに土採り穴が観られる。高さ30cmを測り、塚頂部の標高は89.63mである。

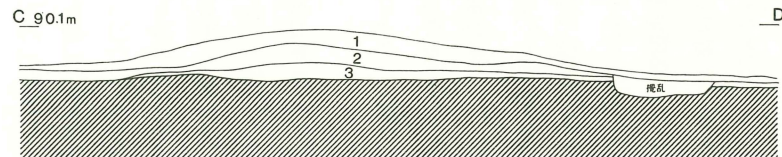
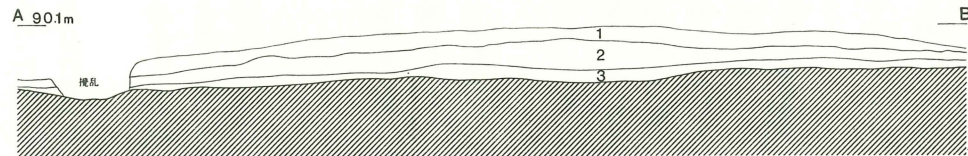
土層は基本層序に対比され、塚頂部には黒色土がやや厚く堆積していた。



第102図 鶴巻遺跡3号塚全測図



1・2号塚土層断面図



3号塚土層断面図

- 1 茶褐色土（白色スコリアとロームを多量に含み軟らかい）
- 2 黒色土（やや赤みをおび、白色スコリアを多量に含む、軟らかくしまりが無い）
- 3 漆黒色土（多量の白色スコリアを含む堅くしまっている。）

0 4m

塚中央部の黒色土下部より、馬の左上顎歯、右上顎歯、足骨が出土している。

第3号塚（第102・103図）

調査区最北西部のC-6グリッドに位置している。東コーナーの一部が突出してはいるが、東西を長軸とするほぼ長方形プランを呈している。長軸15.5m、短軸9.6mと3基の塚では最大のものである。高さ80cm、塚頂部の標高は90.05mである。

土層は、漆黒色がマウンド下で一部途切れてはいるが、1・2号塚と何ら変わった点はない。

遺物は、塚頂部下の黒色土と漆黒色土の境より馬の左上顎歯が出土している。

今回調査した3基の塚について述べてきたが、ここで簡単にまとめてみたい。

塚を構成する土層は、基本土層の1～3層に対比される茶褐色土、黒色土、漆黒色土であり、旧表土、版築等の人為的な痕跡はまったく認められない。また、塚が存在しているのは台地の最も高い平坦面、台地北側肩部と風当たりの強い所であることから、自然の営力とくに北風により形成されたものと考えられる。

3基の塚の特徴は、それぞれ個体の異なる馬の歯、足骨が出土していることである。近年県内では数多くの塚が調査報告されているが、この種の塚は類例がない。確信はないが、貴重な馬を自然の営力で生じた塚に埋葬し、馬塚としたものであろう。

(5) 風倒木痕（第104～108図）

ここで風倒木痕としたものは、遺構確認面での平面的な土層観察によると、周囲に弧状を呈する黒色系のふたつの土層が対峙あるいは環状を呈し、ふたつの黒色系土層に挟まれた中心部には、基本層に方対比される土層が存在するものである。土層の断面観察によれば、中心部の土層は、基本層が縦方向に傾斜した堆積状態を呈し、周囲の黒色系土層は自然堆積状態を呈しているものが一般的である。みかけの平面プランは不整形円形を呈し、断面はスリパチ状を呈しているものが多い。

従来大土壙状遺構（十菱1972）、ローム盛土土壙（谷井他1973）、土層捻転址（鈴木1981）などと呼称されていたものに相当する。

鶴巻遺跡では台地平坦面に5基、緩傾斜面に4基、谷部に11基が調査区全面に散在して検出された。平面および断面の土層状態により次の3類、2種に分類することができた。各部の名称は、深町遺跡（鈴木1981）のものを基本的に踏襲するが、中心部の基本層に対比される土層をマウンド部土層と呼称する。

I 平面土層状態による分類

1類—2次堆積土層がマウンド部土層を環状に囲むもの。（第104・105図）

2類—2次堆積土層がマウンド部土層を弧状に囲むもの。（第105・106図）

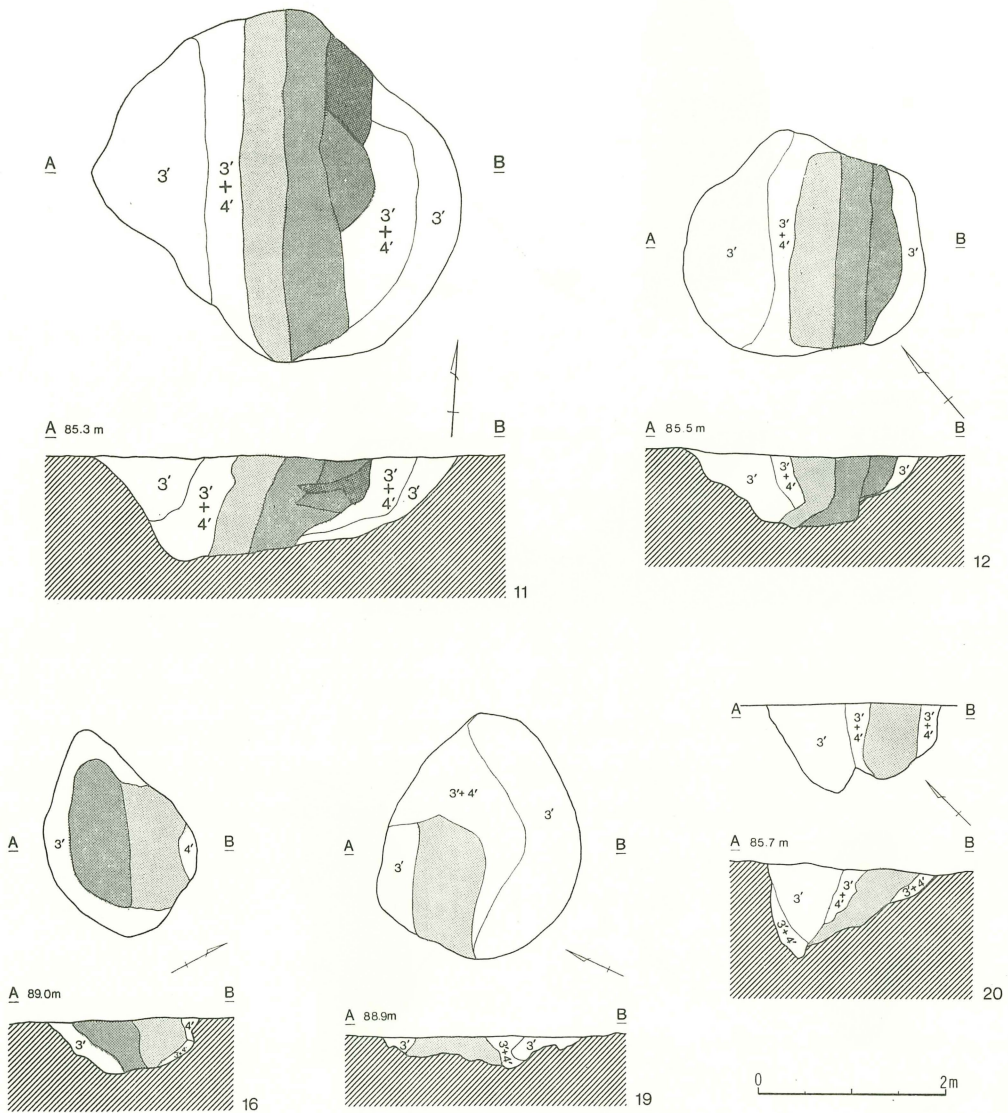
3類—2次堆積土層がマウンド部土層の片側にのみ存在するもの。（第107・108図）

II 断面土層状態による分類

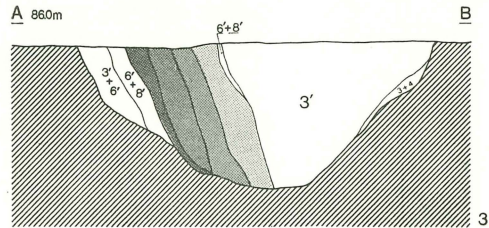
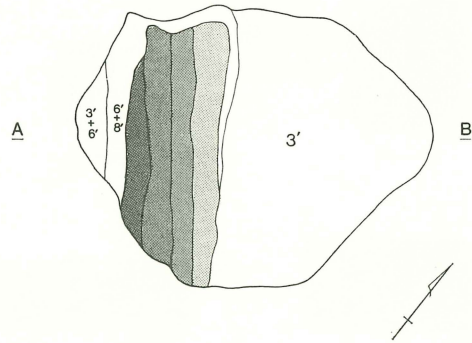
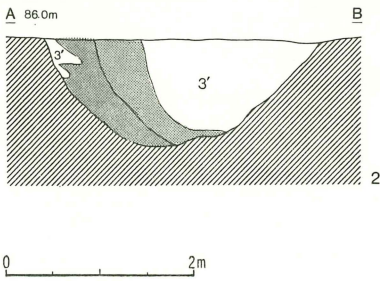
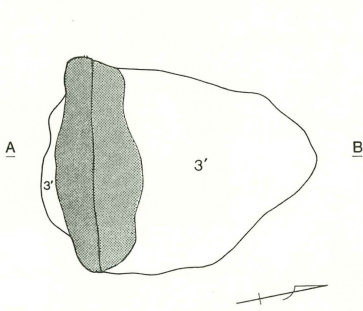
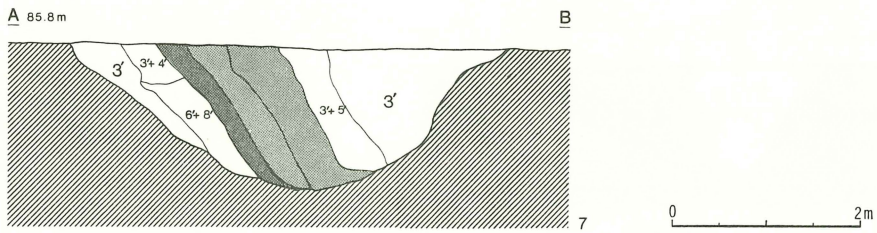
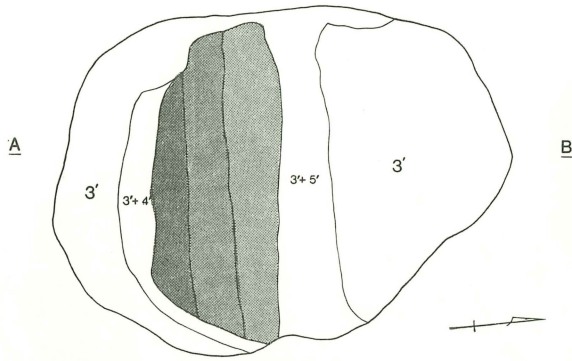
A種—2次堆積土層がマウンド部土層下に存在しないもの。

B種—2次堆積土層がマウンド部土層下に存在するもの。（第104図18）

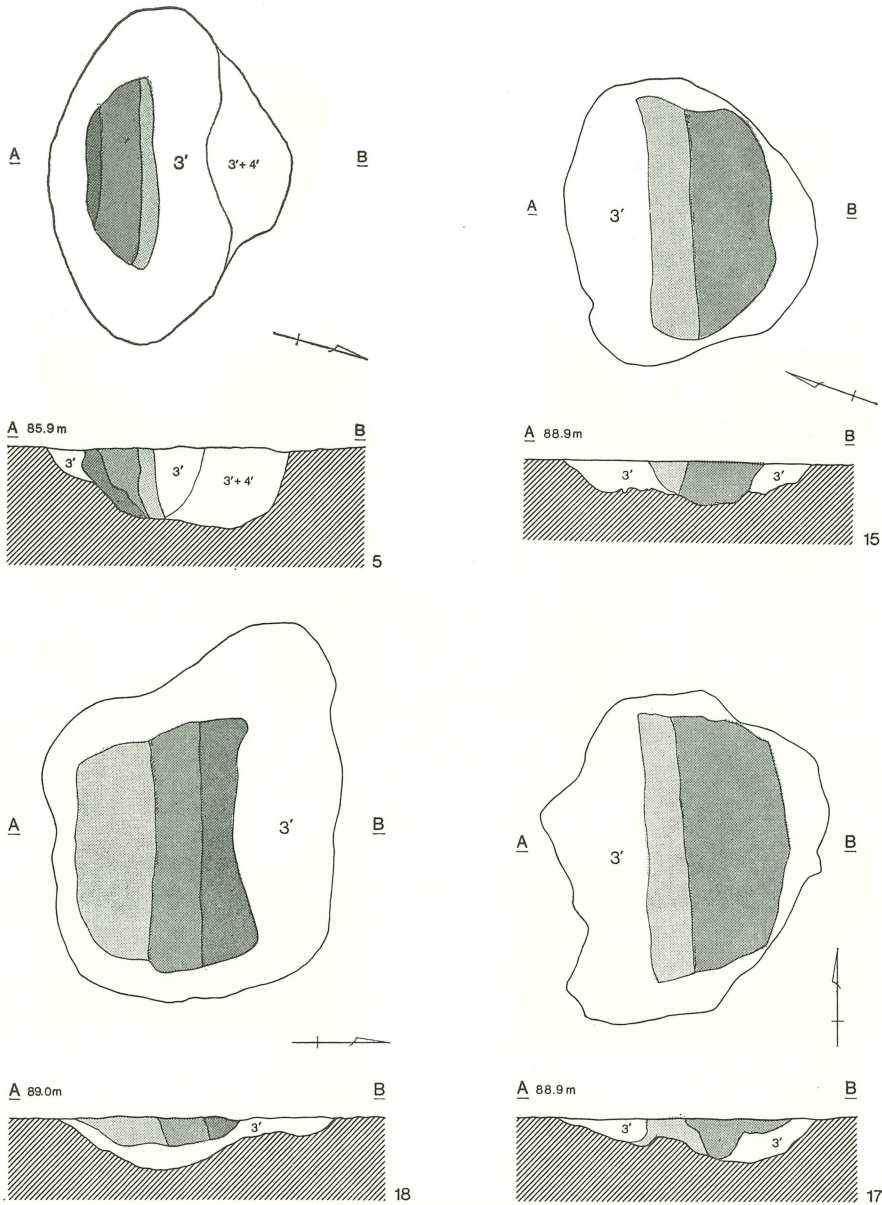
2次堆積土層は3'、3'+4'など10層に分層できたが、自然層が風化再堆積したものと思われ、それ



第104図 鶴巻遺跡風倒木痕1類



第105図 鶴卷遺跡風倒木痕1・2類

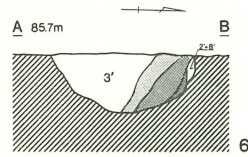
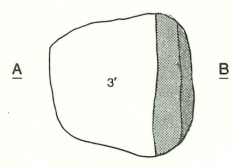
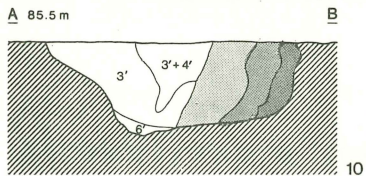
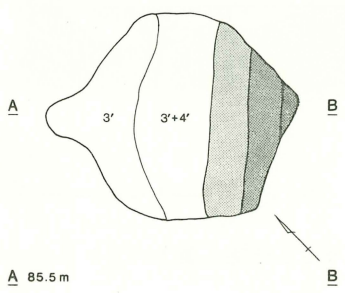
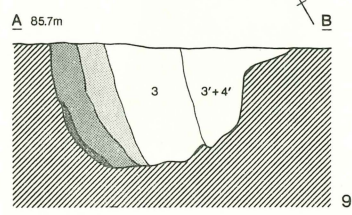
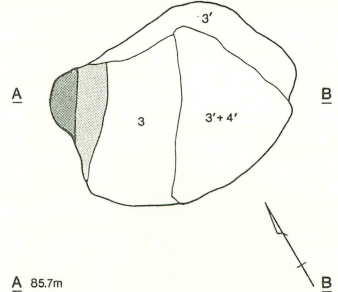
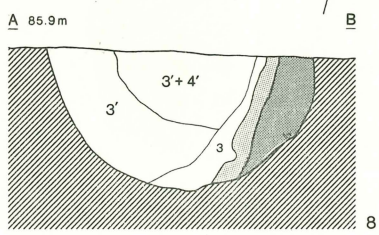
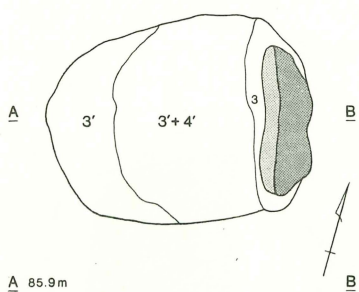
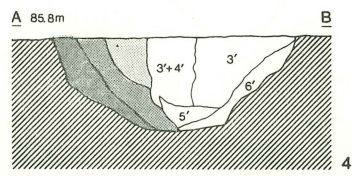
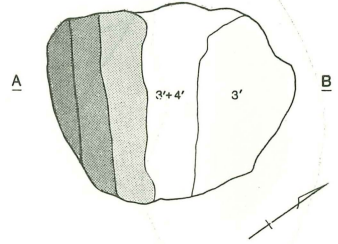
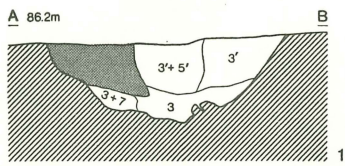
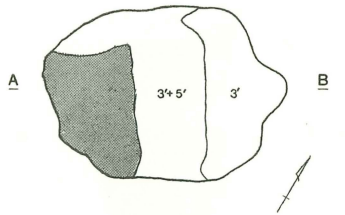


第106図 鶴巻遺跡風倒木痕 2類

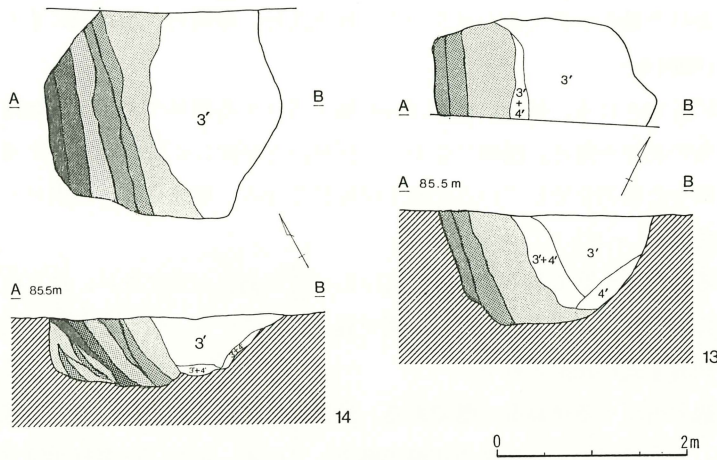
ぞれ対比される自然層に「'」を付けて表記した。また、マウンド部土層上のスクリーントーンは第94図の基本層序と同一のもので示した。

引用参考文献

十菱駿武 1972 「港北ニュータウン地域内文化財調査報告Ⅲ」 横浜市埋蔵文化財調査委員会
 鈴木徳雄 1981 「深町・城の内遺跡」 深町遺跡調査会
 谷井・宮崎 1973 「坂東山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書2集、埼玉県教育委員会



第107図 鶴卷遺跡風倒木痕3類



第108図 鶴巻遺跡風倒木痕3類

風倒木痕一覧表

No.	位置	分類	平面形	断面形	主軸幅 (cm)	副軸幅 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	出土遺物	備考
1	M-13	3-A	不整楕円形	浅いスリバチ状	257	183	81	N-121°-E	なし	底面凹凸激しい
2	L-15	2-A	〃	スリバチ状	296	225	108	N-11°-E	〃	〃
3	M-15	2-A	〃	〃	380	298	152	N-51°-E	〃	〃
4	L-16	3-A	不整円形	〃	279	201	103	N-32°-E	〃	〃
5	M-16	1-A	不整楕円形	〃	226	345	84	N-16°-W	〃	〃
6	N-16	3-A	不整円形	〃	151	154	60	N-178°-S	〃	〃
7	N-16	1-A	不整楕円形	〃	464	348	142	N-6°-E	〃	〃
8	L-18	3-A	〃	〃	295	208	143	N-106°-E	〃	〃
9	O-20	3-A	〃	〃	278	210	138	N-120°-E	〃	底面凹凸激しい
10	O-21	3-A	不整円形	〃	270	209	84	N-43°-W	〃	〃
11	R-22	2-A	〃	〃	380	372	108	N-92°-W	〃	〃
12	R-22	2-A	〃	〃	250	238	76	N-49°-W	〃	底面凹凸激しい
13	R-23	3-A	—	〃	221	—	112	N-63°-E	〃	〃
14	S-23	3-A	—	〃	249	—	71	N-64°-E	〃	〃
15	C-4	1-A	不整円形	浅いスリバチ状	264	298	42	N-18°-W	〃	〃
16	F-5	2-A	不整楕円形	スリバチ状	160	162	58	N-27°-E	〃	〃
17	F-8	1-A	〃	〃	280	335	44	N-89°-W	〃	底面凹凸激しい
18	F-5	1-B	不整円形	浅いスリバチ状	297	378	56	N-189°-S	〃	〃
19	D-2	2-A	〃	〃	210	259	36	N-26°-W	〃	〃
20	N-18	2-A	—	スリバチ状	—	179	98	N-44°-W	〃	〃

(6) グリット出土遺物

鶴巻遺跡からは、少量の縄文式土器や局部磨製石斧、打製石斧などの石器が出土している。いずれも遺構に伴うものでなく、表採や遺構確認作業中に検出されたものである。

i 土器 (第109図)

縄文時代中・後期の土器が谷部より少量出土している。以下一括して説明する。

第1群土器 (第109図1・2)

1・2は同一個体の深鉢形土器の底部付近である。原体 $R < \frac{L}{L}$ の縄文を縦位に施文し、懸垂文の末端が覗られる。胎土は多量の砂粒を含みザラつく。焼成良好、赤褐色。加曾利EⅡ式に比定される。

第2群土器 (第109図3)

後期堀之内Ⅱ式に比定される。推定口径22.5cmの緩く外反する深鉢である。口縁部は小さな波状を呈し、内面には一条の沈線が廻る。沈線による三角区画内を原体 $L < \frac{R}{R}$ の縄文で充填している。器面は縦方向に丁寧に磨かれ滑沢を呈している。胎土は砂粒を含み、焼成良好、赤褐色を呈している。

第3群土器 (第109図4・5)

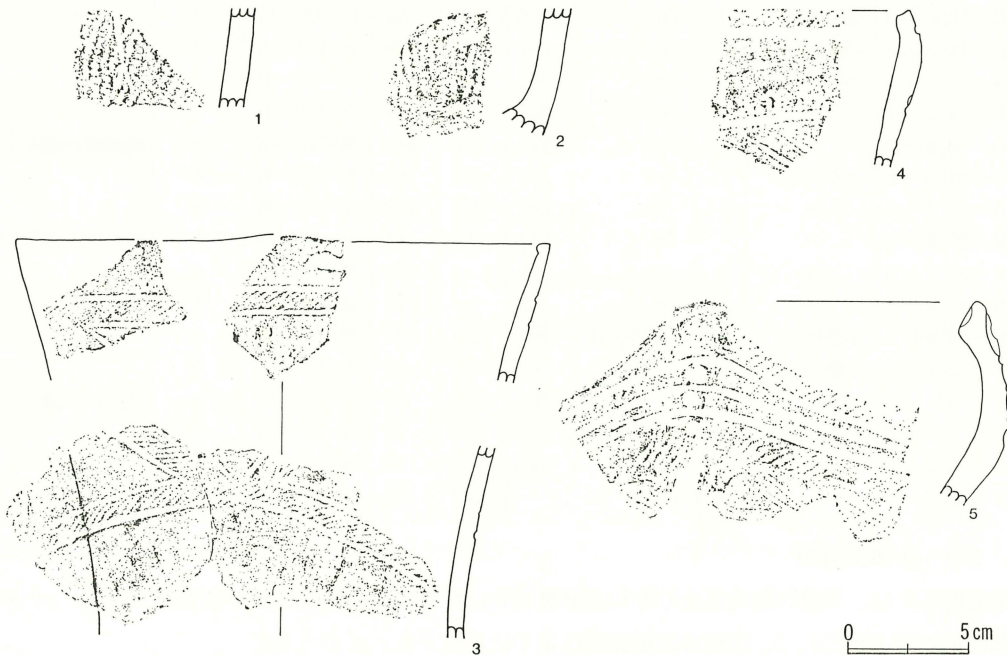
4はやや内反する深鉢形土器である。口唇部には $L < \frac{R}{R}$ の縄文が施文され、直下に一条の沈線が廻る。無文帯は丁寧に磨かれ、列点文、矢羽根状文が施文されている。胎土きめ細かく焼成良好。茶褐色を呈する。加曾利BⅡ式に比定される。

5は緩い波状口縁の内反する深鉢形土器である。波頂部にはU字形の貼付文、口縁部に原体L rの無節の縄文を施文し、口縁に沿った3条の沈線で磨消している。頸部には斜行沈線文を施している。胎土には砂粒を多量に含み、焼成良好。赤褐色。加曾利BⅢ式に比定される。

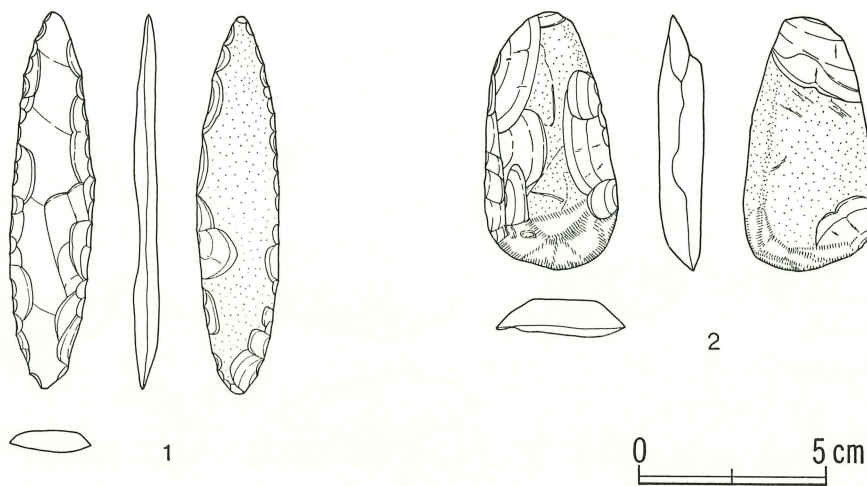
ii 石器 (第110~115図)

遺跡からは、欠損品も含め48点の石器が出土している。谷部より集中して出土していることから投棄されたものと推定される。

尖頭器 (第110図1)



第109図 鶴巻グリッド出土縄文式土器



第110図 グリッド出土石器実測図(1)

主剥離面の調整はやや粗く、片面には大きく自然面を残す。刃部の調整は細かく両面からされ、基部の調整は粗い。全体的にやや粗い調整ではあるが、完形の優品。

局部磨製石斧（第110図2）

全長 6.8 cm の小形品。扁平な礫を素材とし、主剥離面の調整は粗く大きな剥離痕を残し、片面は自然面である。刃部は両面より丁寧に磨かれ鋭い。側縁部も一部磨かれている。

打製石斧（第111図～115図）

本遺跡出土石器群中の主体を占め、31点出土した。側縁部形態から、Ⅰ類—撓形、Ⅱ類—分銅形に分類し、刃部形態より、A種—直刃のもの、B種—丸刃のもの、C種—斜刃のもの、に分類検討した。

Ⅰ類A種（第111図3）

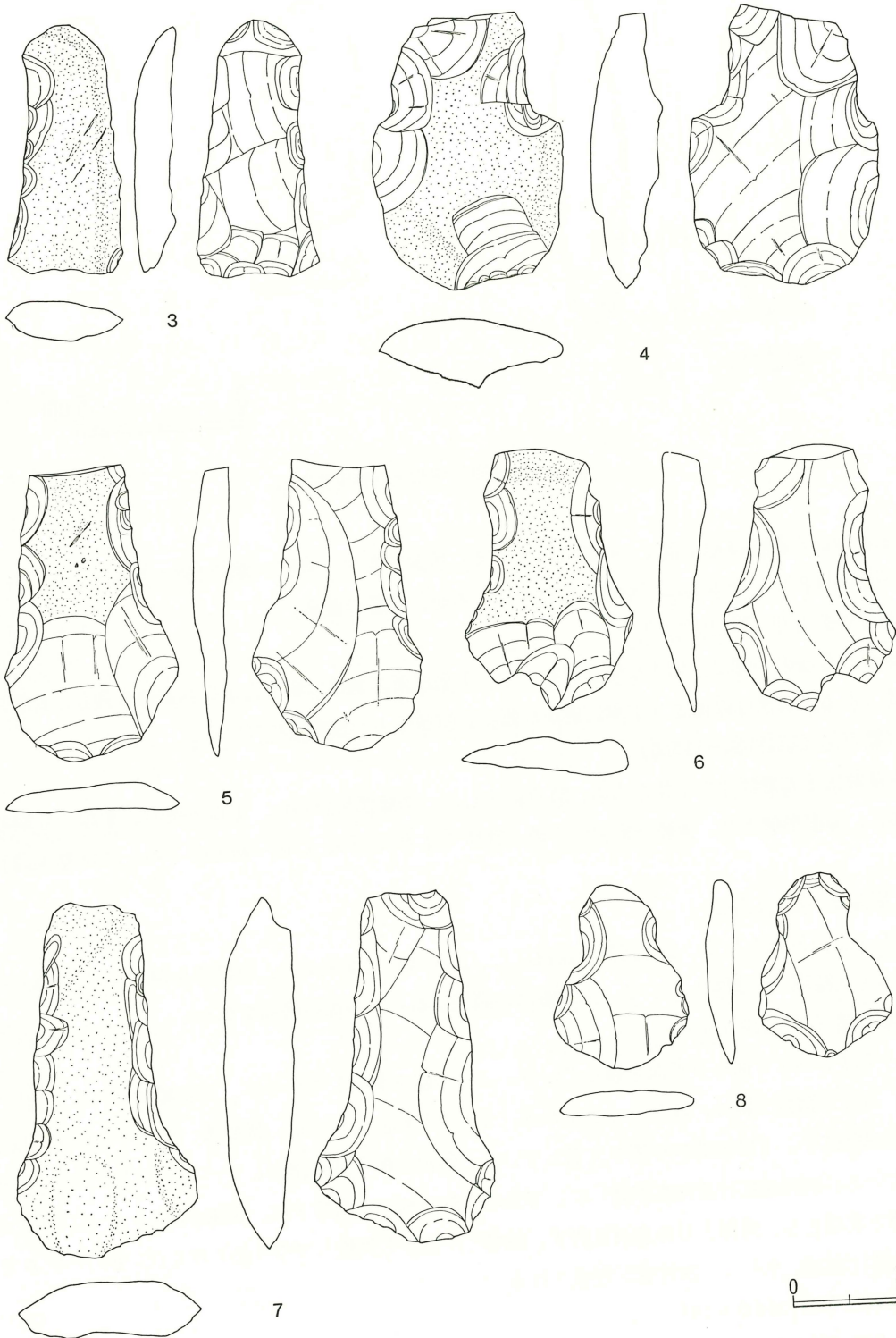
3の1点のみ出土している。円礫を素材にし、片面は自然面である。側縁部片側は自然面側から、片側は主剥離面から調整している。主剥離面の調整は粗い。刃部の磨耗が激しい。

Ⅰ類B種（第111図4～8）

4～7はすべて片面に自然面を残している。4は基部を欠損しているが、主剥離面を大きく残している。刃部の調整も粗く、雑な作りである。5も主剥離面を残すが、側縁部、刃部の調整加工は丁寧に刃部は薄い。6は刃部の一部を欠損している。側縁は粗く細部調整している。7は肉厚でやや湾曲している。両側縁には敲打痕が著しい。刃部は自然面側から調整され、磨滅が激しい。8は小さな扁平礫を素材とし、両面とも自然面を残す。側縁に片面から調整して作り出された浅い抉りがみられ、刃部は磨滅が激しく、線状痕が観察される。

Ⅱ類A種（第112図9～14）

9は大形で雑な作りである。刃部は磨滅が激しく敲打痕が観察される。側縁部の抉りは両面から調



第111図 グリッド出土石器実測図(2)

整されている。10・13は両面に粗い主剝離面を残し、抉り、基部の調整加工も雑である。13の刃部には敲打痕が著しい。11はやや風化しているが、基部、抉りとも丁寧な細部加工が施されている。刃部は磨滅し敲打痕が観察される。12は片面にわずかな自然面を残す雑な作りである。片面には主剝離面を残し、基部、抉りとも粗い調整加工である。14は小形品で、基部、抉りとも自然面側から主に調整されている。刃部の磨滅は著しくつぶれている。

Ⅱ 類B種（第113図15～21）

15は石墨片岩製のもろく雑なものである。両面とも主剝離面を大きく残している。抉りの調整加工は両面から施され、基部は片面から調整されている。刃部は磨滅が著しく敲打痕が観察される。16の刃部片面は自然面を利用し、断面が楔状を呈し薄く作り出されている。抉りは両面より調整加工されている。基部側縁を一部欠損している。17は偏平礫を素材としたもので、両面の対称位置に自然面と粗い主剝離面を残す。刃部片面は自然面を利用し、片面の細部調整で作り出されている。18～21はすべて片面に自然面を残す薄いものである。18は風化が激しいが刃部は薄い。抉りは両面より細かく調整されている。19は片面に主剝離を残し、抉りの調整加工も丁寧である。刃部には線状痕が観察される。20は非常に雑なもの。刃部調整は自然面側から行なわれている。21は基部を欠損している。抉りは両面から調整され、刃部片面は自然面を利用している。

Ⅱ 類C種（第114図22～24）

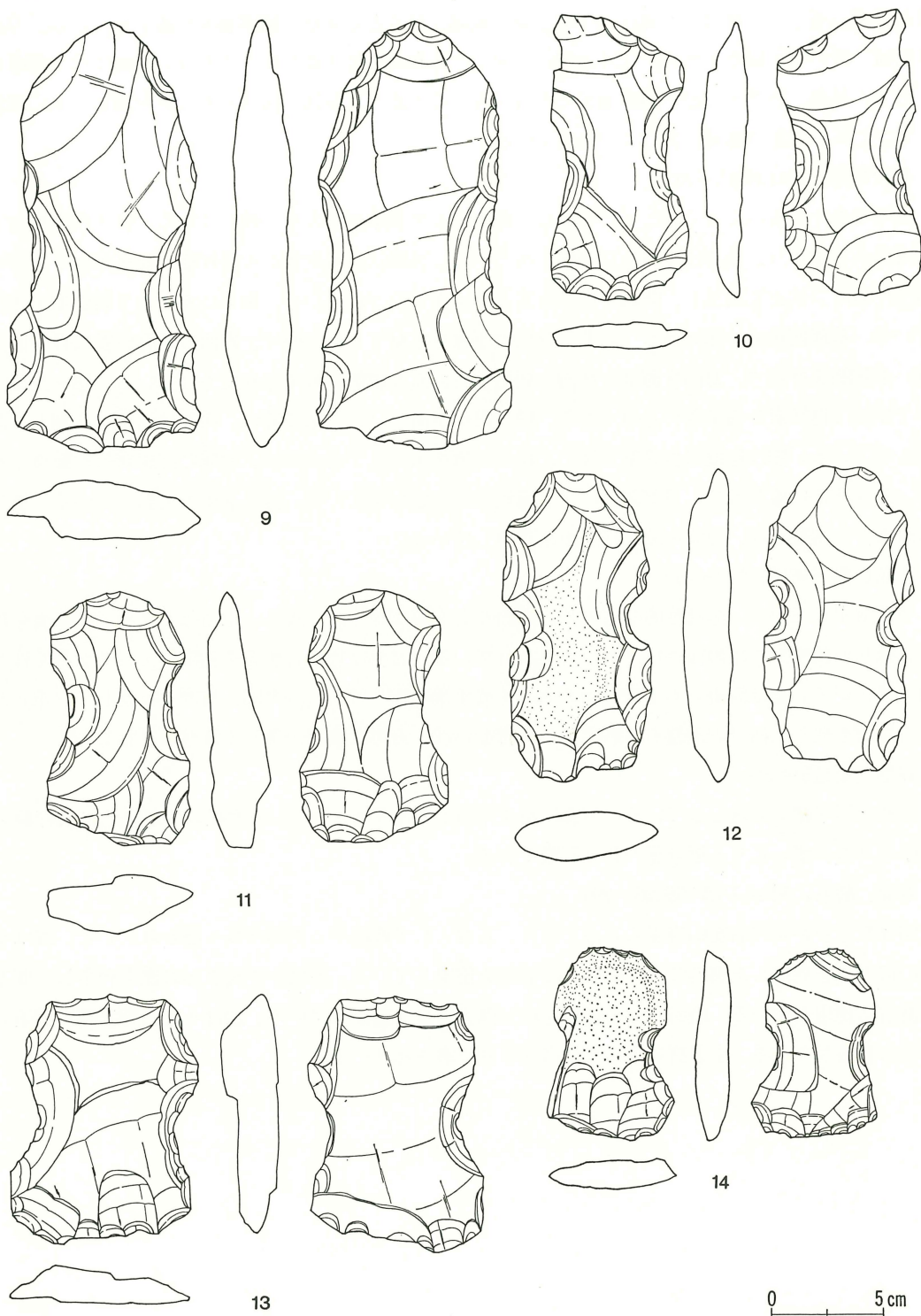
3点出土している。非対称的なもので、片面の上下端に自然面を残す。片面は大きな主剝離面を残し、抉りの調整加工は両面から丁寧に行なわれている。刃部は片面自然面を利用しているが薄く作り出されている。23は両面とも主剝離面を大きく残す雑な作りである。刃部、基部を欠損している。24は自然面を残し、抉りの調整も自然面側から行なわれ、刃部は磨滅が激しく敲打痕が著しい。

礫器（第115図25）

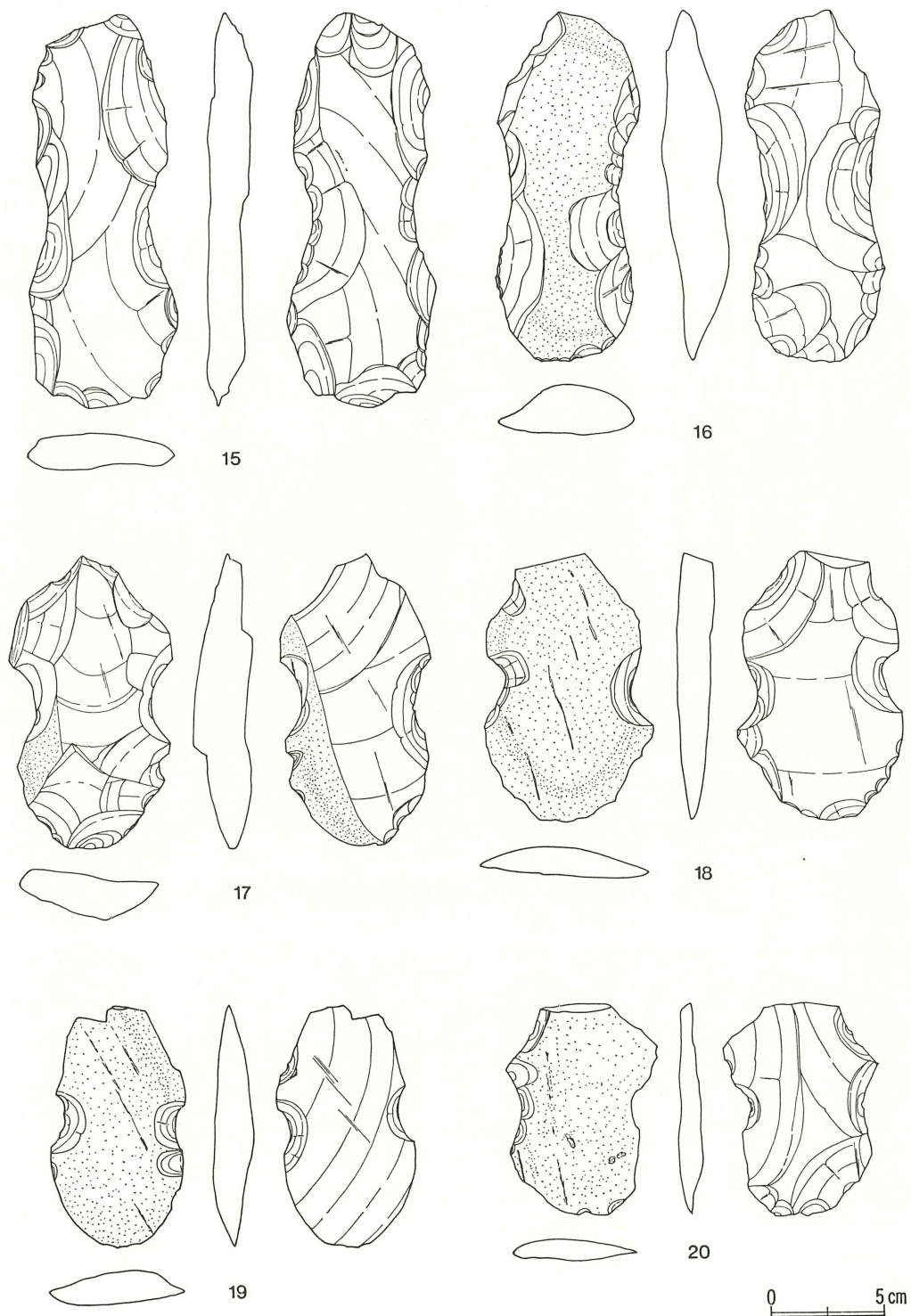
円形の偏平礫を素材としている。刃部は粗く片側から作り出されているが鋭い。部分的に敲打痕が観察される。ずっしりと重量感のある石器である。

石皿、磨石、凹石（第115図26～29）

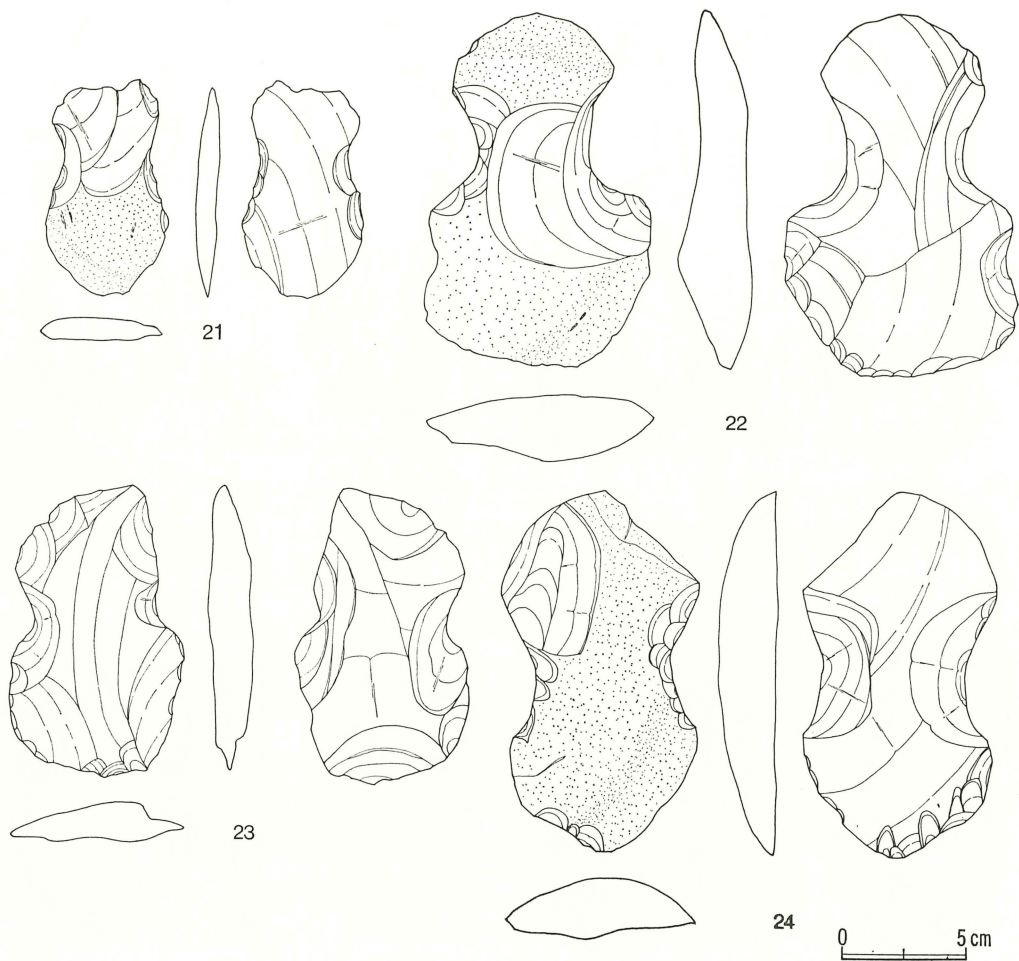
26は軟らかい角閃石安山岩製の石皿である。石皿として機能する内側は良く磨かれている。27は小形の偏平礫を利用した磨石で、片面のほぼ全面を使用している。28はやや大きめの礫を利用して凹石と磨石に使用している。磨石として使用された側面は良く磨かれている。29は小形の球状礫を凹石と磨石に利用している。全面磨石として利用され良く磨かれている。



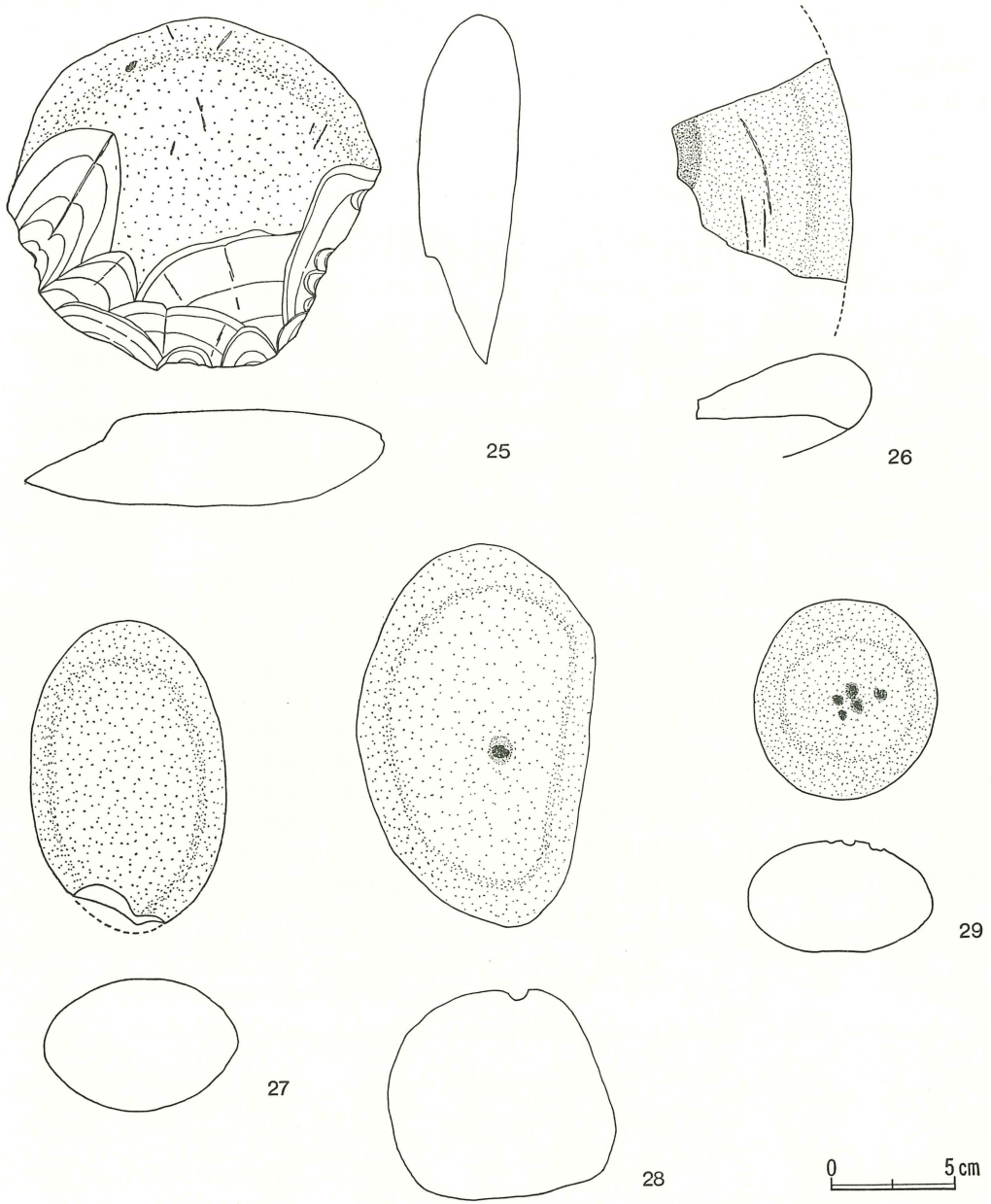
第112図 グリッド出土石器実測図(3)



第113図 グリッド出土石器実測図(4)



第114図 グリッド出土石器実測図(5)



第115図 グリッド出土石器実測図(6)

石器一覽表

器 種	図No.	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	刃部長 (cm)	重さ(g)	石 質	欠 損 状 況
尖 頭 器	110-1	—	10.0	2.2	0.8	12.5	20	砂質頁岩	完 形
局部磨製石斧	2	—	6.8	3.5	1.2	5.3	45	細粒砂岩	〃
打製石斧	111-3	I—A	10.9	5.2	1.8	5.2	130	石墨片岩	刃部磨減
〃	4	I—B	12.5	8.4	3.0	8.7	375	粗粒砂岩	基部欠損
〃	5	〃	12.9	7.8	1.7	12.1	195	準片岩	〃
〃	6	〃	11.5	7.4	1.9	11.5	200	〃	刃部欠損
〃	7	〃	15.7	8.1	3.1	10.4	440	石墨片岩	完 形
〃	8	〃	8.2	6.2	8.1	7.4	72	千枚岩	刃部磨減
〃	112-9	II—A	18.9	8.7	2.9	9.8	620	石墨片岩	〃
〃	10	〃	12.3	6.0	2.0	8.2	220	粗粒砂岩	基部欠損
〃	11	〃	11.4	6.6	2.9	8.4	270	ホルンフェルス	刃部磨減
〃	12	〃	14.0	6.4	2.2	8.5	240	準片岩	完 形
〃	13	〃	10.8	8.1	2.5	9.1	265	石墨片岩	刃部磨減
〃	14	〃	8.5	5.7	1.6	5.8	95	砂質頁岩	〃
〃	113-15	II—B	17.5	6.6	1.9	7.9	285	石墨片岩	中央で二分
〃	16	〃	15.5	5.1	2.8	10.2	370	細粒砂岩	基部欠損
〃	17	〃	13.1	6.2	2.4	10.4	271	準片岩	完 形
〃	18	〃	11.8	7.5	1.5	11.5	160	砂質頁岩	〃
〃	19	〃	10.7	5.9	1.7	10.5	148	中粒硬砂岩	〃
〃	20	〃	9.3	5.4	1.0	8.2	82	〃	〃
〃	21	〃	8.5	5.0	0.9	7.3	60	石墨片岩	基部欠損
〃	114-22	II—C	14.7	9.3	3.0	14.5	390	中粒硬砂岩	完 形
〃	〃 23	〃	11.6	7.1	1.8	8.5	181	石墨片岩	刃部・基部欠損
〃	〃 24	〃	14.9	7.7	2.3	10.2	385	細粒片岩	基部欠損
礫 器	115-25	—	14.2	14.9	4.1	18.5	1,150	絶色岩	完 形
石 皿	26	—	9.2	7.2	2.9	—	225	角閃石安山岩	破 片
磨 石	27	—	12.3	7.9	5.3	—	771	〃	一部欠損
磨石・凹石	28	—	15.6	9.2	8.4	—	1,900	〃	完 形
〃	29	—	8.2	7.6	4.5	—	368	〃	〃

X 結 語

1 沼下・平原遺跡出土土器について

沼下・平原遺跡から出土した土器は8世紀末～10世紀代にわたるものである。検出された竪穴は沼下遺跡24軒、平原遺跡3軒、そして掘立柱建物跡2棟が概期、平安時代に属するものである。

平安時代における土器の編年は須恵器坏の変遷を基軸として行われて来ており、その変遷には旧武蔵国内では斉一性が認められ、竪穴等から普遍的に完形で出土する事等から編年作業の際の1つのメルクマールとして使用されている。

県内の須恵器窯跡としては、入間市東金子窯跡群、比企郡鳩山村に中心をもつ南比企窯跡群、大里郡寄居町末野窯跡群等が奈良～平安時代に属するものである。須恵器編年の拠り所となっているのは東金子窯跡群中の新久窯跡である。新久窯跡は坂詰秀一氏によって、焼成瓦を「続日本後記」承和12年（845年）3月条の武蔵国分僧寺塔再建に使用されたものであるとする説（註1）が出され、近年の瓦の比較検討もこの説の妥当性を裏づけている。（註2）県内の集落出土の土器編年は、高橋一夫氏によってなされ（註3）土器の変遷については、大旨、これが認められている。

新久窯跡は谷井彪氏によって、A地点1・2号窯及びE地点1号窯（Ⅰ期）とC地点1号窯及びD地点1・3号窯（Ⅱ期）、E地点住居跡とF地点住居跡（Ⅲ期）の三時期にわけられており（註4）、後に服部敬史・福田健司氏による南多摩窯跡群の編年が発表され（註5）、武蔵国内の須恵器編年は序列としては確立したかの感がある。県内に於ても、三芳町新開遺跡、富士見市栗谷津遺跡等の10～11世紀とされる窯跡が調査され、県内窯跡出土の須恵器も細かい編年か試みられている。（註6）

県内の須恵器編年は窯跡を列举して行くと、

前内出2号窯→前内出1号窯→八坂前4号窯→新久A地点1・2号窯→（末野2号窯）→新久D地点1・3号窯→新開遺跡P b区窯

以上のようになるようである。南多摩窯跡群についてもほぼ同様の編年が考えられている。年代観に関しては、末野2号窯以後は研究者によって大きな開きがあり、一定していない。又、地域差もあるようであるが、一応ここでは大枠で捕えるものとする。これらの編年をもとに、本遺跡出土の土器の大まかな編年を行ってみよう。

第Ⅰ期

平原1、2、3住、沼下10・11住がこれにあたる。

いわゆるくの字状口縁を呈する土師器甕が存在する。平原1住の甕は全形を知りうる好例と言えよう。口縁部と肩部の境が強く折れる、8世紀中葉に遡る器形を呈するものもある。最大径は胴上半部に持ち、胴下半部はさほど張らず底径は小さい。類例としては、水深5住・7住・46住、花影歴史時代2住、山田31住、西久保第2遺跡などに見られる。台付甕は胴部は球胴状を呈し、口縁部は直立気味にゆるく外反し、脚部は外反し途中で更に大きく屈曲して外反するように力強く立つものである。全形を知りうるものは、平原1・2住より出土しているが、1住例はやや古く、2住例は肩部に段を持ち、又、胴下半部が丸味がより少ないなど、やや新しい傾向を示している。1住例に近い器形を持

つものとして、水深43・46住、荒神脇25住、熊野12住、山田3住例がある。土師器坏は比較的多く、8世紀代に盛行する丸底状を呈するものが多いが（平原2住例）底部は扁平になり、底部と体部の境目に篋削りによる稜線を持つものが出てくる。須恵器坏は底部回転糸切り後、外縁部に回転篋削りを施すものが主体となる。概期の須恵器を焼成した窯跡としては前内出1号窯が知られており、沼下11住—8や平原1住—4に見られる口縁部つまみ手法や体部下端の瓜先手法(註7)はこの時期の特徴を残すものと思われる。

なお、沼下11住からは土師器碗が出土しているが、器壁は厚く平底状を呈し、体部は外傾気味に立上り、口縁は直立気味になり、体部外面に横篋削りを施すものである。類例としては、荒神脇23住例がある。年代は8世紀末～9世紀初頭とする。

第Ⅱ期

沼下1・12・17住がこれにあたる。

土師器甕にはⅠ期に見られる口縁部がゆるやかに立ち気味に外反するもの（沼下1住—1・3・5、沼下12住—4、沼下17住—1）と頸部が直立するもの（沼下17住—1）が混在するようである。土師器坏は平底状を呈するようになり、口縁部が外反するものが現れる（沼下1住—21・23）。須恵器坏は、底部回転糸切り後外縁部に回転篋削りを施すものと糸切り離しのままのもの二者が存在する。なお、沼下12住—5・6・7・8の4点は焼成が非常に良く似ており、1ヶ所の窯跡で焼かれたものと思われ、平原2住—16の坏もこれらと似た深い立ち気味の口縁を有し、やや古い器形であろう。概期の須恵器窯は八坂前窯、南多摩窯跡群では、天沼窯跡(註8)が調査されており、天沼窯跡の例では、坏は底部回転糸切りのままのものであるのに対し、碗の底部には回転篋削り調整を依然として施す例がある。概期のセットとしては、北坂14号住が好例であろう。なお、沼下1住出土遺物中には次の第Ⅲ期に含まれる遺物も出土している。年代は9世紀前半をあてる。

第Ⅲ期

沼下5・6・15・20住があたる。

この時期になると土師器甕はすべてコの字状を呈するようになり、本遺跡では、全形を伺い得るものはない。山田遺跡31住例のように、胴上半部に最大径を持ち、小さい底部をもつものであろう。

台付甕は甕とほぼ同様の口縁部を持ち、胴下半部が小さ目の器形を呈するものと思われる。

土師器坏は少ないが、恐らく、第Ⅱ期と同様の扁平な坏に、新らしくやや底径の小さい沼下15住—2のような体部に横篋削りを施す、須恵坏にやや外形の似る土師器坏が存在するものと思われる。

土師器鉢は、沼下20住—1があり、小さい底部から外傾気味に立上り、口縁部は直立し、ややつままれており、体部外面を横方向の篋削りを施しもので、荒神脇31住例がある。須恵器坏はすべて底部回転糸切りのままで口径底径の比は口径 \leq 底径 $\times 2$ であり、新久A1・2号窯、E1号窯の時期であるが、各住居跡出土例では、底径は口径の $\frac{1}{2}$ か、やや小さ目であり、新久A・E地点窯の坏よりやや後出かと思われる。須恵器碗は高台付のもので沼下5住—21、15住—3の2点があり、底部は大きく高台はハの字状につき、底部は回転糸切りのままで、体部はゆるやかに立上り、口縁は外反しない。非常に丁寧なつくりで焼成も良い。器高はやや低いが、器形は新久A地点2号窯出土の碗に類似している。なお、沼下5住8～19、22・23の土器は次のⅣ期に属するものと思われる。年代は9世紀中葉～

後半をあてる。

第Ⅳ期

沼下2・3・7・21住及び5住の一部がこれにあたる。

土師器甕は第Ⅲ期のコの字状口縁のやや頸部が外傾気味のもの(沼下2住—1、沼下7住—11)と、頸部がやや内傾気味で、口縁が強く外反する、より新しい甕(沼下7住—8、10、12)がある。台付甕もほぼ同様の器形を呈する。土師器坏は沼下7住—1、2があり、1は平底で底部のみ篋削りを施すもので、2は体部下端に横篋削りが及ぶ。口縁部は横なでを施すが、指頭痕、巻き上げ痕を随所に残すものである。類例としては中堀5・6住、雷電下28住例がある。須恵器坏は口径底径比は口径 \div 底径 $\times 2$ で新久A1・2号窯の時期とさほど変わらないが、器形には体部下半が丸いもの(沼下5住—8~12)や口縁端部をつまみ出すもの(沼下7住—15・18)が存在し、これらは新久A1・2号窯よりは末野2号窯により近いものと思われる。高台付坏も大き目のしっかりした高台がつくものが多く、体部でややふくらみ、端部が軽く外反するものである。皿はやや大型の高台のつかないものと、径13~14cm程の高台をもつものの2種がある(沼下7住)。蓋は沼下5住—22があるが、鈕は低くなり、裾部先端も短く折れるものである。これら須恵器の特長は末野2号窯の出土遺物に類似する点が多い。なお、沼下16住—7の高台付坏もこの時期にはいるものであろう。年代は9世紀末~10世紀初頭をあてる。

第Ⅴ期

沼下4・8・9・16・19・22・24住をあてる。

土師器甕はやや厚手となり、コの字状口縁の甕は頸部が強く内傾し、肩部とスムーズにつながってくの字状を呈するものがあり、(沼下8住—9、沼下19住—1)、肩部の強く張る、口縁部が強く外反するものも存在する(沼下4住—5、8住—10)。上記のくの字状を呈する甕の類例としては、甘粕山・如来堂A—1号住、中堀8住例がある。やや異なる器形の甕は沼下24号住例があり、口縁部は短くコの字状を呈し、肩部から胴部へかけて張り、胴下半部で急にすぼまる、やや器高の低いものである。このような甕は類例が少なく、恐らく枇杷橋1号住例は本例と同様のものと思われる。

台付甕は(沼下4住・16住・24住)いくつかの口縁部形態をもつものがあるが、総じて口縁部は厚く、丸味をもって外反気味に直立するものようである。全形は沼下24住—5に見るように楕円形の胴部を持つ。土師器坏は沼下24号住にあり、底部は平底で、底部、もしくは体部下端まで篋削りを施し、内面と口縁部に横なでし、体部は指なで痕、輪積み痕を大きく残し、器高はやや高いものである。須恵器坏は沼下24住例があるが、破片で全形は、恐らく新久D地点1、3住に見られるように、口径底径比は口径 \geq 底径 $\times 2$ となるものと思われる。高台付坏は、小さい底部から大きく開くもの(沼下16住—8・9)と大きめの底部をもち低く鈍い高台をもつもの(沼下22住—4)がある。この時期の類例としては、枇杷橋1号住例、清水谷16号住例がある。この時期は土師甕等にいくつかの口縁部形態が見られ、沼下24号住は同一形態の甕が一括出土している事等から、時期を分けられる可能性がある。年代は10世紀前半~中葉頃と思われる。

この時期より新しいと考えられるものに、沼下13・14・18住をあげてみたが、断片的なものであるが、沼下18号住の埴類は中山1号住(註9)のものと同時期と考えられ、中山1号住では羽釜を同伴

し、底部糸切りの坏も、新開遺跡P b 区窯跡出土例に似ており、10世紀後半の特徴をもつものと思われ、概期にあててるものとする。

11世紀代にはいると考えられる遺物は清水谷11・23号住があり、高い高台を持つ厚手の坏、径10cm程の小型の坏、ろくろ整形の甕と羽釜が伴なうものと考えられ、新久E地点1号住、F地点住居跡、田中前13住等がある。

灰釉陶器は沼下1号住から手付瓶の破片が出土しており、3号住からは皿と壺が、4号住からは壺、7号住からは平瓶、1・17号住からは長頸瓶が破片で出土している。3号住例は黒笹14号様式期に、1・7号住例は黒笹90号様式期と思われる。

一応の編年を試みたが、9世紀後半～10世紀代に関しては問題点が多い。ゆえに年代に関してはなお流動的であり、仮定年数としたい。窯跡出土の須恵器のより一層の研究が望まれる。(大和 修)

	800	850	900	950	1000
沼下遺跡	11 10	12 17 1 15 6	20 5 2 3	4 16 19 8	24 13 14
			7 21	9 22	18
平原遺跡	2 1 3				

註1 坂詰秀一ほか 「武蔵新久窯跡」(1971)雄山閣

2 有吉重蔵 「武蔵国分寺跡出土の平城宮系宇瓦について」

シンポジウム「関東地方における9世紀代の須恵器と瓦」資料(1982)

3 高橋一夫 「国分期土器の細分・編年試論」埼玉考古13・14号(1975)

4 谷井 彪 「鶴ヶ丘」歴史時代(1975)埼玉県教育委員会

5 服部敬史・福田健司 「南多摩窯址群における須恵器編年再考」神奈川考古第12号(1981)

6 金子真土 「埼玉県における9世紀代の須恵器」一東金子窯跡群を中心として(註2)所収

7 高橋一夫 「前内出窯跡発掘調査報告書」土器の考察(1974)埼玉県遺跡調査会

8 坂詰秀一ほか 「武蔵・天沼窯跡」立正大学考古学研究室(1981)

9 本報告書 P115~119参照

(引用・参考文献)

市川 修 「田中前遺跡」埼玉県遺跡調査会(1977)

今泉泰之ほか 「岩の上・雉子山」埼玉県教育委員会(1973)

栗原文蔵ほか 「水深」埼玉県遺跡調査会(1972)

栗原文蔵・田部井功ほか 「下新田・荒神脇・熊野遺跡」埼玉県遺跡調査会(1974)

駒宮史朗・菅谷浩之ほか 「枇杷橋遺跡」埼玉県遺跡調査会(1973)

駒宮史朗・大和修ほか 「中堀・耕安地・久城前」埼玉県教育委員会(1978)

駒宮史朗 「入間市新久発見の土器」埼玉研究第26号(1975)

谷井 彪 「山田遺跡・相撲場遺跡」埼玉県遺跡調査会(1973)

中島宏ほか 「清水谷・安光寺・北坂」埼玉県埋蔵文化財調査事業団(1981)

中島利治・小林重義 「水深」埼玉県遺跡調査会(1972)

服部敬史ほか 「南多摩窯址群」(1981)八王子バイパス鍮水遺跡調査会

増田逸朗・駒宮史朗ほか 「雷電下・飯玉東」埼玉県教育委員会(1979)

松本富雄ほか 「新開遺跡I」埼玉県三芳町教育委員会(1981)

愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告書(I) 愛知県教育委員会(1980)

広島六郎太ほか 「第二西久保遺跡発掘報告」朝霞の文化財第四集(1973)

2 掘立柱建物について

近年、埼玉県に於ける発掘調査の増加に伴い、歴史時代の遺跡も数多く検出されている。挿図117付表は、奈良、平安時代の遺跡一覧である(註1)。現段階では未発表の遺跡や、実見できなかった報告書等もあり、遺漏も多々あると思われるので、今後御教示願えれば幸である。

これらの遺跡は調査範囲が工事区内に限られるなど調査時点での制約があり、遺跡全体が調査された例は皆無に等しい。しかしながら、掘立柱建物を伴う遺跡も確実に増えており、上記の表中でも約19%の遺跡で検出されている。これらの遺跡では、鉄製品、帯金具、施釉陶器、墨書土器、硯などの遺物も共伴して出土しており、なかでも坂戸市と鶴ヶ島町にかかる若葉台遺跡は、入間郡郡衛跡と推定されており、その集辺にも脚折遺跡群、千代田遺跡など多くの掘立柱建物を検出する遺跡があるが、残念ながら、まだ、その全容は明らかにされていない。その他、掘立柱建物跡を有するままとまりを県北から見てゆくと、岡部町北部に榛沢郡に属する六反田遺跡、熊野遺跡、白山遺跡、大寄B・西浦北遺跡、小窪遺跡、古川端遺跡、東光寺裏遺跡、地神祇遺跡、千光寺遺跡などを中心とするグループがあり、ここより西南の岡部町と美里村の境を接するところに、那珂郡に属する「中」の鉄製焼印、篋書きなどを出土した北坂・清水谷遺跡を中心に、甘粕山遺跡群、畑中遺跡、北貝戸遺跡、宮下遺跡、宇佐久保遺跡(註2) 題薙神社前遺跡などがあり、当、平原・沼下遺跡はこのグループに入る。その他、ずっと南下して、富士見市中央遺跡群を中心に、殿山遺跡、東台遺跡、西松原遺跡、北通遺跡、侯埜遺跡、新開遺跡、新田遺跡などのグループがある。これらは、掘立柱建物を伴う遺跡を中心とし、ある程度の広がりをもってまとまっている。上述したとおり、遺物にも有力なものが出土してはいるものの、郡衛跡として決定できるような政庁や正倉といった建物遺構は発見されていない。これは、調査時の条件のためか、それとも武蔵国の特色なのか、今後の発掘調査、研究にまたねばならない。

次に、上記の遺跡に於て検出された掘立柱建物について述べてみたい。周知のとおり、掘立柱遺構より出土する遺物は、極めて少なく、遺物によって判断することは困難である。従って掘立柱建物の種類、規模、掘り方、共伴する堅穴住居跡などとの関係から分類を試みたい。

埼玉県で検出された掘立柱建物は、大別して次の2例が考えられる。

A 長方形を呈するもの。

1 桁行3間×棟行2間を基本とするもの。このタイプは最も一般的である。しかし、規模はまちまちで、総床面積は、約 $12m^2$ ~ $39m^2$ となる。平原遺跡では、小規模の建物跡の方が古く、総床面積は、 $12m^2$ である。これは、檜下遺跡SA2に類例を求められる。また、建替え後は $35m^2$ となり、荒神脇遺跡、鶴ヶ島町山田遺跡、北貝戸遺跡第1掘立柱建物、北坂遺跡1号・2号・7号・8号建物跡と同様である。このうち北貝戸遺跡のものは、東柱をもっており、長野県平出遺跡で検出されたものと同様である。このほか、これらの中間の規模をもつ総床面積 $20m^2$ ~ $27m^2$ のものがある。すなわち、坂戸市山田遺跡、若葉台D地点、城の越遺跡、北坂遺跡3Aなどが挙げられ、いずれも廂をもたない。

2 1以外のタイプのもの。a、桁行5間×棟行3間の建物、総床面積は、東山遺跡1号 $57.24m^2$ 、

北貝戸遺跡63.24㎡を計る。b、5間×2間のもの。六反田遺跡、総床面積約63㎡を計る。c、4間×3間のもの、(城の越遺跡)、鶴ヶ島町山田遺跡、総床面積37.5㎡、東柱、廂をもつ。d、2間×1間の小型のもの、東山遺跡、六反田遺跡で検出された。e、5間×4間の東柱をもつものが西龍ヶ谷遺跡で検出されている。

B 正方形のもの

1 2間×2間を基本とする総柱建物が一般的である。総床面積が9㎡を計るものは、坂戸市山田遺跡、御林下遺跡、宇佐久保遺跡で検出されており、宇佐久保遺跡例では廂をもつ。

2 一辺3.6mのもの。荒神脇遺跡、六反田遺跡C—8、北坂遺跡4、檜下遺跡SB5。d、一辺4mのものが西浦北遺跡で、e、一辺4.8mを計るものが、北坂遺跡5にみられる。

3 3間×3間の総柱建物跡が、北貝戸遺跡で3棟検出されている。これらは、一辺、5.4m、5.6m、6.4mと規模はやや異なる。

4 1間×1間の小型のもの、六反田遺跡で3棟検出されている。

5 ほぼ正方形を呈するが、2間×1間のもの、小型である。六反田遺跡で検出される。

掘り方は、総て坪掘りで、千葉県日秀西遺跡、神奈川県鷹尾遺跡などでみられる様な布掘りや溝掘りといった方法は行われていない。ただ四隅が「く」字状になる掘方が荒神脇遺跡、城の越遺跡で検出されている。柱穴は、概ね、円形または楕円形、不整形を呈し、きっちりとした方形を呈するものは、六反田遺跡、台耕地遺跡にみられるように時代が下るものと思われる。

各遺跡における掘立柱建物の検出状況をみると以下のようなになる。

1 1～2棟の掘立柱建物が、堅穴住居群の中心的位置に、ある一定の距離をもって存在する。Aタイプ、Bタイプともセットで、あるいは単独で検出される。荒神脇遺跡、清水谷遺跡、坂戸市山田遺跡、平原遺跡、宇佐久保遺跡、また、西龍ヶ谷遺跡も同様な様相を示す。

2 複数の掘立柱建物があり、堅穴住居の切り合いも激しく、長時間に亘って存続したと思われる遺跡、六反田遺跡では、五領期から中世までの遺構を有し、掘立柱建物も登呂遺跡検出のものと同類似する1×1間のものから中世のものまでバラエティーに富んでいる。北貝戸遺跡は、各々の遺構、遺物についての詳報がなされておらず、不明な点が多いが、五領期、和泉期、平安時代の堅穴住居が23軒検出されており、総柱の3間×3間建物が3棟、2×3間の総柱建物が1棟、3×5間の掘立柱建物が1棟2×2間、2×3間の掘立柱建物各1棟、その他の掘立柱建物が検出されている。檜下遺跡においては、道路巾の発掘のため切り合いの激しい掘立柱建物群のみ検出されており、他には堅穴式の特異遺構が一軒みられるだけである。

3 北坂遺跡では、継続期間は短い、掘立柱建物、堅穴住居跡とも建て替えがみられる。占地の状況としては、標高86mの丘陵上の平坦地に掘立柱建物跡3棟、85mのところには溝に囲まれて、総柱建物2棟、以下に15軒の堅穴住居跡が切り合って検出されている。頂上部平坦地にある2×3間の掘立柱建物3棟は溝で区画された外側にある。

4 北坂遺跡より直線距離にして約2kmのところにある甘粕山遺跡群に含まれる如来堂A遺跡では、同一レベルであるが、約30m離れて、堅穴住居跡と対峙している、同じく、東山遺跡に於ては、瓦塔を出土した1×2間の掘立柱建物と、隣接する2×3間の掘立柱建物を頂部縁におき、以下に3

×5間の掘立柱建物などを検出している。それ以下は発掘されておらず、竪穴住居とどのようにかわっているのかは不明である。丘陵頂部をこえて、反対側には、竪穴住居が2軒みられる。

5 城の越遺跡では、掘立柱建物は一棟と報告されているが、土壌とされているもので、整然とならぶものは、掘立柱建物と考えられるのではないだろうか。もし、掘立柱建物とすれば、竪穴住居とも、最低2時期に亘って存続したと考えられる。

県内の掘立柱建物の初現期をみてみると、4世紀代に遡り得る柱穴群遺構として、五領遺跡B区のものあげられている(註3)。六反田遺跡で検出された1×1間、2×1間の小形のものは、登呂遺跡検出例の流れをくむものと考えれば、古墳時代のものと言えよう。しかし、8世紀後半から9世紀初頭とされる底部回転糸切り後、周辺篋削り調整が施される須恵器坏が伴出する遺跡のものが圧倒的に多い。檜下遺跡で真間期に比定されているものにも上記の須恵器坏が伴出しており、該期のものと考えたい。その他、御林下遺跡、平原遺跡、荒神脇遺跡、北貝戸遺跡(3×3間、3×2間の総柱のもの)などがある。続いて、坂戸市山田遺跡、清水谷遺跡、北坂遺跡、北貝戸遺跡(上記以外)などがあげられ、なかでも9世紀中葉とされている北坂遺跡は、存続期間も短く、計画村落的な要素をもつものと思われる。西龍ヶ谷遺跡では5×4間の総柱のものが、平安時代の遺構として報告されている(註4)が、詳細は不明である。これらに続くものは、同じく西龍ヶ谷遺跡、六反田遺跡など中世の館跡である。中世(註5)に入ると、六反田遺跡、大山遺跡、社具路遺跡などで認められるように、井戸、墓壇、溝、ピット群などが検出されるが、住居跡と認められるものは明確にされていない。

時代背景

8世紀後半から9世紀半前は律令制度の確立する時代であり、開墾政策が多数行われ、また、「寒暖の歴史」(註6)でいう暖期にもあたり、各地に残る条里遺構が示すように水田農耕の発達をうながした。また、東北征伐は、それに必要な食料、武器などを蓄える倉庫を必要としたであろう。その他調物を運ぶ者たちのために、759年には、諸国に常平倉が置かれ、国の大小に従いその官米の幾分を貯蔵した。武蔵国に於ては、833年に、多摩、入間の群界に悲田處が置かれ、旅人の難苦救済のために、五宇の建物を営み、当宗宿禰家主以下官人6名が各々公解を割いて運営にあたったとある(註7)。これは後の鎌倉街道沿いにあったのではないかとされている(註8)。武蔵国は771年に東山道から東海道へと変っており、東北への入口として、その要地でもあったと考えられる。渡来人による開拓もさかんで、古くは、716年に駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野の7ヶ国に在住する高麗人1,799人を移して高麗郡が置かれ、その後、758年には新羅人を移して新羅郡が置かれた。これ以前にも渡来人の記事がいくつか見られる(註9)。

掘立柱建物の性格

掘立柱建物を検出する遺跡は上記のとおりであるが、検出しない遺跡には、大山遺跡のように、製鉄遺跡や、窯跡などの工房跡が顕著である。また、明らかに農業、特に水田に関っていたと思われる遺跡にも検出しない例が多くみられる。このことは、水田農業は高床倉庫を必ずしも必要とするものではなく、食糧の保存にも他に適当な方法があったものと考えられる。そうすると、掘立柱建物の性格は、中央の権力や文化との関りから求めて行かなければならない。

上述のとおり、掘立柱建物にはA、Bタイプに分けられるが、その用途については不明である。B

タイプの総柱のものは概ね、倉庫とされている。Aタイプのものについては、倉庫風の高床建築物(註10)、あるいは、納屋(註11)という風に言われている。

AタイプとBタイプの検出される割合は、5：3で、Aタイプの方が多い。

Bタイプについては、登呂遺跡などで倉庫址とされた1×1間のを初現として、穀物(特に稲)を納める倉庫と考える。また、大和の石神神宮の由来(註12)、神体が剣で、神殿は倉であったように、信仰の対象としても考えられるのではないだろうか。北貝戸遺跡では、3×3間、3×2間の大型の総柱建物が検出されており、特異な例であるが、本報告がなされていないのが残念である。

Aタイプは、種類も多く、一口にその性格を言うのは難しい。西龍ヶ谷遺跡では、5×4間の掘立柱建物を中心として、14軒の堅穴住居がこれを囲むようにしてあり、この掘立柱建物の柱穴内から炭化米が出土しており、当主の館を中心とする一村落といった感がある。しかし、Aタイプの掘立柱建物をすべて住居と考えるには、カマドももたず、出土遺物なども希薄であるなどの問題点がある。また、関東地方における堅穴住居から平地住居への移行とも合せて考えなければならない。

畿内では、7世紀後半にはほとんど堅穴住居から掘立式の平地住居に移行したとされる。武蔵国にあっては、該期には、堅穴住居が小型化し、柱穴を持たなくなるという傾向が出てくる。笹森健一氏は、カマドの支柱が壁外にあることから、それ以前の住居跡とその規模は、変化していないという説をとっている(註13)。地面に残された掘り方のみで上屋構造を想定するのは困難であるが、一方で中央の文化にふれて発展したところに、いかに収奪されていたとはいえ、住居一般が貧弱になるとは考えがたい。筆者も支持するところである。

では、この柱穴をもたない堅穴住居の上屋構造はどのようなものであったのだろうか、このことは、堅穴住居から掘立柱建物に移行したとは考えられない当地にあって、非常に重要なことである。

4世紀代の宝塚古墳出土の倣製家屋文鏡には、4軒の家屋が表われる。A、堅穴住居、B、2×2間と思われる高床建築で、額を収蔵する高倉であり、ホクラすなわちウカノミタマを祭る宗教の対象でもあった。C、高床建物 伝統的な宮殿建築の正統形式、ミアラカ「御舎」、D、トノ、オホトノ「殿」、宮廷正殿を示し、中国の大堂から来たもので木造の床を持っていたと考えられるもの(註14)。

これらのうち、Dの建物は、上記の住居を考えるにあたって、重要である。Dは、中国では基壇上に建てられたものであったが、日本に入ってきて、基壇は縮少し、木造床を持つようになったとある(註15)。この建物の柱は、直接地中には建てられず、横になった材の上に建てられている。これは、近世まで、普通に行われていた工法でもある(註16)。このことは、平安期以降の集落跡を発見することが出来ないこととも関りがあるように思われる。埼玉県内をみただけでも、最近、中世の遺物などが検出された土壙、溝、井戸跡などはあちこちで報告されているが、城館跡、陣跡、寺院跡の他は住居と呼ぶべきものは検出されていない。井戸は住居のそばにあるものと考えれば、当然、住居跡も近くから検出されるはずであるが、六反田遺跡、大山遺跡、古川端遺跡など、中世の井戸が検出されている遺跡において、それに対応すべき住居址は不明である。その他、中世の遺跡としては、庄和町馬場遺跡で、土壙78基、万蔵院の墓域とも考えられており、15世紀の板石塔婆などが検出されており、西富田遺跡群の社具路遺跡では、墓壙23基が検出され、岡部町西龍ヶ谷遺跡では、掘立柱構5軒、柱穴群、溝12、土壙多数が検出され、館的要素をもった遺跡とされている。後2者は、遺跡発表会の要

旨に掲載されていたもので、今後の報告が待たれるところである。

このように、中世における一般住居が発見されないのは竪穴住居のようにローム層まで掘り込むような構造をもたなかったために、発掘時に見過されてしまったのか、あるいは、ほとんど痕跡の残らないような構造であったものと考えられる。これは、柱穴をもたない竪穴住居跡からの伝統と考え、いわゆる、転し根太を使用した構造を考えたい。この他、六反田遺跡、大山遺跡でも、ピット群から中世遺物が出土していることが注目される。このピット群のまとまりを捉えるのは難しく、性格は不明である。

以上のように、束柱をもたないAタイプのは、一般の住居とは考え難く、富者、あるいは支配者階級の者の住居か、悲田處などの公的施設か、または、神殿など信仰に関わるもので、人が使用した施設と考えたい。

平原遺跡は、周囲を削平された丘陵頂部に掘立柱建物を中心とする3軒の竪穴住居が検出され、墨書土器4点5例、転用硯などが出土した特殊な遺跡であり、その存続期間も短く、水田面との比高差もあり、この掘立柱建物を倉庫とは考え難い。文化の程度も高く、あるいは渡来人が居住した遺跡かとも思われる。いずれにしても、各々の遺跡の占地する標高、水田との関係、遺跡の性格などもっと詳しく分析しなければならぬと痛感した。しかし、時間もなくなったので、ここでは出来なかった。

3 陶硯と墨書土器について

A 沼下、平原遺跡の陶硯（第116図）

1 円面硯 沼下遺跡4号住出土、形態は、北坂遺跡4号住出土のものと類似するが、やや大形で、硯部が、海と陸とに分けられており、台部にも一部に透しの切り込みが認められた。また、使用痕が顕著で、平滑である、墨痕は認められない。

2 坏転用硯 沼下遺跡グリッド出土、底部に回転糸切り痕、色調は暗灰色で須恵器風であるが、高温で焼かれたものか、非常に硬質で、自然釉がかり、外面には部分的に分厚く付着している。内面底部が磨滅している。墨痕は認められない。

3 坏転用硯 沼下遺跡1号住出土、墨書土器7が伴出している。茶褐色を呈するやや軟質の須恵器高台付坏の底部を打欠いた後、擦って調整している、底部内面に使用痕がわずかに認められる。墨痕は認められない。

4 蓋転用硯 平原遺跡3号住出土、墨書土器6が伴出している。須恵器蓋の内面を使用、接合する2片のうち中心部の方の1片に使用痕が著しい。墨痕は認められない。

その他、沼下遺跡3号住出土灰釉陶器皿（第11図22）の内面にも使用痕がみられた、墨痕は認められない。（註17）

以上が、両遺跡から検出された硯である。いずれも墨痕は認められなかったが、転用硯については、使用痕や整形痕などから判断した、3については、他のものと比較すると、焼きが甘く、使用痕もわずかであり、やや疑問が残る。

埼玉県内で検出された硯は、付表のとおりである。窯跡出土のものを除くと、使用された風字硯、円面硯は、187遺跡中7遺跡でしか検出されていない。風字硯は、富士見市北別所遺跡3号住（註18）

に1例あるのみである。円面硯は、高岡廃寺1例、若葉台遺跡13例、立野遺跡2例、岩比田遺跡、北坂遺跡、沼下遺跡に各1例である。

窯跡との供給関係が明らかなものは、新久窯跡と武蔵国分寺がある（(註18)、富士見市中央遺跡群北別所遺跡の風字硯は、隣接する三芳町新開遺跡からのものとみて相違あるまい。日高町高岡廃寺出土の円面硯は、若葉台遺跡例(註20)と類似するが、新久窯跡D地点出土のものとは趣を異にする。立野遺跡が今井説のとおり、須恵器を選別する工房であるなら、南比企窯址群の中に類例を求められるかもしれない。また、南比企窯址群の中心地である鳩山村虫草山窯跡からは直径20cm以上の大型で透しをもち脚中位に段をもつ円面硯が出土している。当沼下遺跡例は、北坂遺跡例との類似点が多いが、どこの窯のものかは、現在のところ不明である。

転用硯は、平原遺跡で須恵蓋使用1点、沼下遺跡で須恵坏使用2点、如来堂A遺跡で須恵坏使用1点、北貝戸遺跡で須恵蓋使用1点、東の上遺跡、須恵坏使用1点、ハケC遺跡、須恵坏使用1点の計7点が検出されているのみでその数も少ない。しかしながら、転用硯が注目されだしたのはごく最近のことであり、その性格から、発掘調査、整理段階で見過されることもあったのではないかとも思われる。ちなみに、出土総数からみると、円面硯が一番多く21点（使用17点）、次に風字硯12点（使用1点）、転用硯7点となる。これは、墨書142点（一天狗遺跡出土「又」72点を含む）、朱書13点に比較して非常に少ない。

使用された硯を検出する遺跡は、寺院跡（高岡廃寺）、郡衛跡と想定される若葉台遺跡で13点と多出している。また、北別所遺跡では風字硯が住居跡より出土しており、富士見市中央遺跡群、打越遺跡、栗谷ツ遺跡、北通遺跡群などを中心とする地域の特性が窺われる。このことは、北坂遺跡、沼下遺跡例についても同様である。

石井則孝氏によれば(註21)、関東地方における出土陶硯は、8世紀後半より9世紀全般と、本県で掘立柱建物の出現する時期と重なっている。

その他、六反田遺跡からは中世の石硯が出土している。

B 沼下・平原遺跡の墨書（第116図）

沼下遺跡では、7・8・9の3点が検出されている。これ以外に、須恵質坏の口縁部付近の小破片に、「田」の文字があった。また、9号住からも、文字の一部がみられた。7は、1号住出土、「刃」か。8は18号住出土、「東」。9は、16号住出土、「厶」の部分しか残っておらず「兎」か。1号住から3はの転用硯も検出されている。その他、1の円面硯が4号住から、2の転用硯がグリッドより検出されている。

平原遺跡では、掘立柱建物を中心に、3軒の竪穴住居が検出され、うち2軒より、4点5文字の墨書土器と、転用硯が1点出土するなど、特殊な状況を示している。5は、1号住出土、「夫」、6は、3号住出土、「土」あるいは「吉」がかすかに残る。10は、1号住出土で、体部2カ所に墨書が施されている。「凵」（風）、120°のところに、「大木」、は11当初、判読不能と思われたが、横から見ると、「吉」と読めた。その他、4の転用硯が、3号住より出土している。

県内出土の墨書土器については、すでに柿沼氏の報告がある(註22)。その後、調査、報告されたものを加えると、付表のとおりである。ここでは、墨書、朱書の他にも文字と認められるものは掲載し

た。

県内で、墨書、朱書土器の検出率は、約21%と掘立柱建物の検出率とほぼ一致する。しかし、その検出例をみると、掘立柱建物が検出される遺跡から出土したもの13例、竪穴住居跡のみが検出される遺跡のもの21例である。さらに、硯が出土する遺跡は7例を数えるのみである。

掘立柱建物が検出される遺跡からは、同一文字が多数出土する例がある。

「又」72個体、一天狗遺跡・「時山」朱書11個体、若葉台遺跡・「廣」4個体、荒神脇遺跡
それ以外の遺跡

「東」4個体、飯積遺跡・「大」墨書3個体、朱書1個体、水深遺跡

墨書、朱書以外のものは、主に、窠跡から出土した瓦や須恵器に、篋書、型押、指書、模骨などで記されたもので、その数も多い。集落跡から出土した例は次のとおりである。

線刻 「長眠」荒神脇遺跡・「武蔵」中道遺跡・「武蔵児玉、有、大」枇杷橋遺跡・「私物」他水鳥の絵、小針遺跡などがあり、荒神脇遺跡例は、須恵器長頸瓶の肩部に、他3点はいずれも滑石製紡錘車である。

焼印 「中」北坂遺跡・「王」若葉台遺跡

墨書土器の研究は、浜松市伊場遺跡(註23)に詳しい。

「墨書土器に見られる文字は、1字が最も多く、2字が次ぎ、そのほか多いものでも5～6字とまりである。」その他、「奈良時代のものは、2～3字が多く、内容判読が可能であるが、平安時代になると、1字のものが多くなり、意味を把握するのが難しい。」とある。

本県出土例も1字の例が多く、2文字以上のものは、「大木」平原遺跡、「臣万呂」清水谷遺跡、「十二」「片牧」山田遺跡、「時山」若葉台遺跡、「大上」仙波遺跡、「古綿」あるいは「右綿」北通遺跡、「安院」皿尾遺跡などがある。

その他、線刻には前述した「長眠」、「武蔵児玉・有・大」、「武蔵〇〇」「私物」がある。

1文字のものでは同一文字が2例以上検出される場合がある。「平」中堀遺跡、下田遺跡・「東」沼下遺跡、枇杷橋遺跡、飯積遺跡、「大」水深遺跡、廻廻神社前遺跡、「土」平原遺跡、岩の上遺跡、「本」一天狗遺跡、櫛谷遺跡、「井」若葉台遺跡、東台遺跡などがある。

伊場遺跡の例にならって文字の種類を分類すると、

1 地名をあらわすとみなされるもの

一文字のため他の意味に解釈できる場合もあるので、断定はできないが、新久窠跡などで多くみられる篋書文字などから地名、あるいは郡名と考えた。

「武蔵」御林遺跡、「足」安行中学校校庭遺跡、「廣」荒神脇遺跡「入」新久窠跡、「中」北坂・清水谷遺跡、「湯」又は「油」東の上遺跡、「加」中堀遺跡

2 建物、施設、その場所等をあらわすとみなされるもの

「寺」一ツ木遺跡、「宮」若葉台遺跡、「片牧」山田遺跡

3 人名をあらわすとみなされるもの

「臣万呂」清水谷遺跡

4 身分またはこれに類するもの

「夫」平原遺跡、「土」平原、岩の上遺跡、「大上」仙波遺跡、「長」第二西久保遺跡、「王」若葉台遺跡

5 方角をあらわすとみなされるもの

「東」沼下・枇杷橋、飯積遺跡、「西」南中丸遺跡。飯積遺跡では、特に遺構はなく、4枚重ねで出土しており、祭祀に関係するものと思われる。

6 数量、大小をあらわすとみなされるもの

「七」、「十二」山田遺跡、「十」岩の上・中道遺跡、「大」山田、題懸神社前、新開遺跡、「中」北坂、清水谷遺跡、「小」若葉台遺跡

7 物資をあらわすとみなされるもの

「食」高岡廃寺

8 吉祥的な文句をあらわすとみなされるもの

「吉」平原遺跡、「平」中堀、平原遺跡、「良」原遺跡、「安」、「安院」皿尾遺跡、「太」北貝戸遺跡

9 農耕に関係あるとみなされるもの

「田」沼下遺跡、「沔」沼下遺跡、「田田」荒神脇遺跡

10 その他のもの

「大木」・「爪」・「人」・「回」又は「句」・「真」・「木」・「有」・「林」・「白」・「又」
・「正」・「右綿」・「登」・「成」・「乙」又は「足」・「畠」・「時山」

墨書土器の使用目的

県内で検出された墨書土器は、172点であるが、うち72点は一天狗遺跡出土の「又」1字である。使用されたものは、ほとんどが、坏形土器であり、須恵器43例、土師器13例、灰釉陶器2例、緑釉陶器1例である。坏形土器以外のもので実見できたのは、一天狗遺跡の須恵器蓋がある。例外として、線刻で須恵器長頸瓶の肩部に施されたものがある。

墨書の部位は、底部外面31例、体部外面25例、底部内面4例である。

墨書部位

○底部外面 沔・夫・土・臣万呂・回or句・平・加・土or干・片牧・十二・井・湯or油・生or主・古綿or右綿・大・食・平・長・足・登・（中）

○体部外面 東・田・大木・爪・吉・人・大・木・神・小・井・富・大上・余・東・十・長・（長眠）

○底部内面 真・東・廿・良

※同一文字が2度使用されるのは出土遺跡の相違によるものである。（ ）は線刻。

実見出来たもの、意味のとれるもののみ表記したので、疑問も残るが、底部外面に記された文字には、郡名、施設名、人名とみなされるものが多く、体部外面、底部内面に記されたものは、祭祀に関係するとみなされるもの、吉祥句とみなされるものが多いという傾向が窺える。

真間期末から国分期前半にかけては、本県の各地に掘立柱建物、墨書土器、硯などが出現する時期にあたり、帯金具なども集落跡より出土している。武蔵国にあっては、この時期になってようやく国

家の中に組み入れられた感がある。

最後に、本稿を書く機会を与えて下さった増田逸朗氏をはじめ、心良く資料を提供し、ご協力下さった大和修、宮崎朝雄、笹森健一、酒井清治、今井宏、大塚孝司諸氏にあらためて謝意を表します。

(鈴木仁子)

註1 挿図117は、栗原文蔵「古代集落と神々」埼玉考古19号、1981をもとに作成した。

註2 当初、鬼高期のものと考えていたために挿図117にはのせなかったが、笹森健一氏の御教示により、該期の住居跡も含まれていることがわかり掘立柱建物も該期のものと判断した。

註3 金井塚良一他 「新版考古学講座5」原史文化<下>

註4 埼玉県遺跡調査発表会発表要旨 昭和57年

註5 ここでいう中世は、平安以後、鎌倉、室町南北朝までを含む。

註6 西岡秀雄 「寒暖の歴史」好学社 1970

註7 続日本後記天長10年5月の項

註8 埼玉史談第2巻4号

註9 日本書記

天智5年冬の条 百済の男女2千人を東口に居いた。僧俗を撰ばず3年間官の食を賜わった。

天武13年5月の条 帰化した百済の僧尼および俗人の男女あわせて23人をみな武蔵国に安置した。

持統元年3月の条 筑紫の大宰(府)が帰化した新羅の僧尼および百姓男女22人を献ったので、武蔵国に居らしめ、田や粟を受けて生業に安らかならしめた。

持統4年2月の条 新羅の沙門(僧)詮吉、級(新羅の官位名)北助知ら50人が帰化した。帰化した新羅の韓奈末、許満ら12人を武蔵国に居らしめた。

註10 斉藤国男 大御堂檜下 埼玉県遺跡調査会報告第28集 埼玉県遺跡調査会

註11 高橋一夫「東国集落遺跡の検討」古代を考える20 古代を考える会 1979.8

註12 延喜式 御祭神は布留魂(フルノミタマ)であり、天の一角から剣が降ったさまを示している。「神社の建築」源原書店 昭和49年

註13 笹森健一 川崎遺跡(第3次)発掘調査報告書 郷土史料第21集 上福岡市教育委員会

註14 大林太良編 「家」日本古代文化の探究 社会思想社

註15 註14に同じ

註16 千葉県柏市花前Ⅱ-1遺跡で検出された近世の家屋では、直径10~12cm、高さ2cm程の版築、あるいは平たい河原石などによって土台をのせる基礎としていた。

註17 陶硯と墨書土器の図を作成する段階ではわからなかったが、酒井清治氏のご指摘でここに加えた。

註18 小出輝雄他 富士見市中央遺跡群Ⅱ 富士見市文化財調査報告第17集 富士見市教育委員会 1979

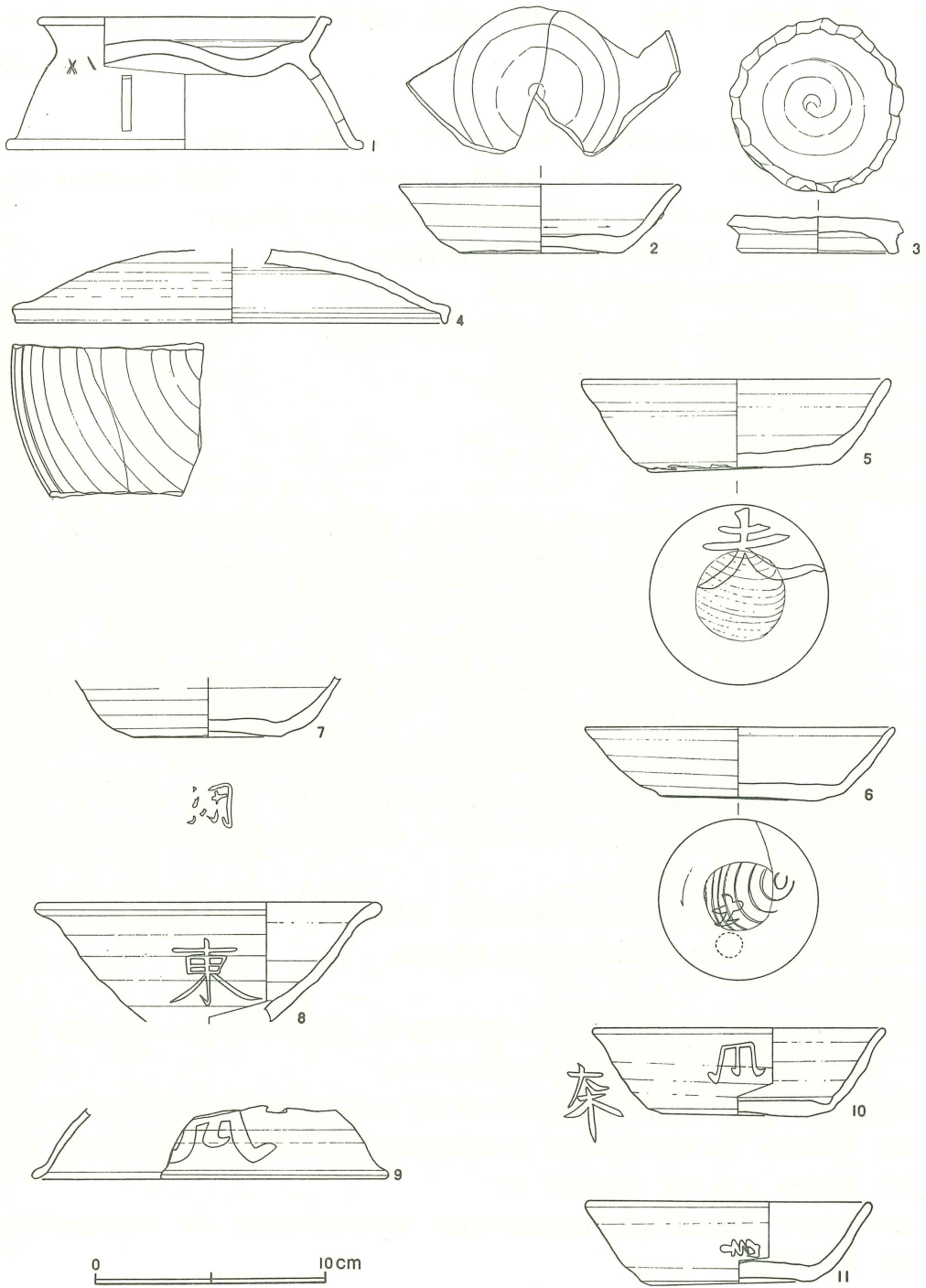
註19 石井則考 日本の陶硯 五島美術館 1978

註20 斉藤稔他 若葉台遺跡群第二次発掘調査報告概報 鶴ヶ島町教育委員会 1980 D地点表土層出土24

註21 註2に同じ

註22 柿沼幹夫 「川口市安行中学校校庭出土の土器」鳳翔No.10 埼玉大学考古学研究会 1975

註23 斎藤忠他 伊場遺跡発掘調査報告書第4冊 伊場遺跡遺物編2 浜松市教委 1980



第116图 沼下・平原遺跡出土硯・墨書実測図

番号	遺跡名	年代	竖穴数	掘立柱建物		墨書・朱書・線刻			硯		備考
				A	B	種別	文字	器墨書部位	種類	数	
33	水窪	国分	12								灰釉・風倒木痕(9C前半)
34	熊野(岡部町)	真間・国分	32・11	2							小鍛冶・丸軋・巡方
35	白山	真間・国分	18・4(1)	4							井戸1
36	台耕地										
37	樋之上	真間・国分	6・42	2							
38	鶴森	真間~国分	137								井戸
39	渡柳陳場	国分	1								
40	原(行田市埼玉)	国分	2			墨	良他2	須恵坏低部内外面 体部1・底部2			細首瓶・土壙・井戸
41	女堀	真間 真間~国分	3	2(1)							刀子・砥石
42	前原	国分	3			墨	有・林				
43	立正大学熊谷校地内	真間	2								
44	荒神脇	真間・国分	19・21	1	1	墨 線刻	廣×24・白 ・「田田」 長眠	土師・須恵 坏体底外面 長頸壺肩部 外面			
45	熊野(江南村)	国分	15								小鍛冶・中世遺構3
46	岩の上	国分	8			墨	土または干	須恵坏底部 外面			土壙3 溝2 尾錠 平瓦
47	耕安地	国分									遺構なし
48	石蒔	平安									井戸・柵・溝
49	緑山	真間	3								平瓦・軒丸瓦
50	立野	真間	3						円面硯 2		うち1点は3号住出土・磚
51	番清水	国分	9								
52	馬室埴輪窯址	国分	1								
53	宮岡	国分									分布調査
54	桶川市No.45										
55	大山	国分	46			墨	神	土師坏体部			製鉄址・羽口・鎌
56	吉野原										
57	高台山	国分	2								羽口・タタラ・紡錘車
58	寿能東										
59	貝崎貝塚										
60	大宮市No.170										
61	中里										
62	花影	国分	2								
63	山田	国分	40	(1)		墨 線刻	片牧・十二 大・七	須恵坏底部 外・内面			奈良三彩・井戸4
64	千代田	真間・国分	4・5	(1)							鉄製品(紡錘車・鎌・刀子)
65	一天狗		23	10			又×72・本				
66	雷電池東										
67	若葉台	奈良・平安	25	33		墨 朱焼印	井・富・小 ×2他4点 時山×11 王	須恵坏体部 外面・内面 須恵坏底外	円面硯 13		奈良三彩

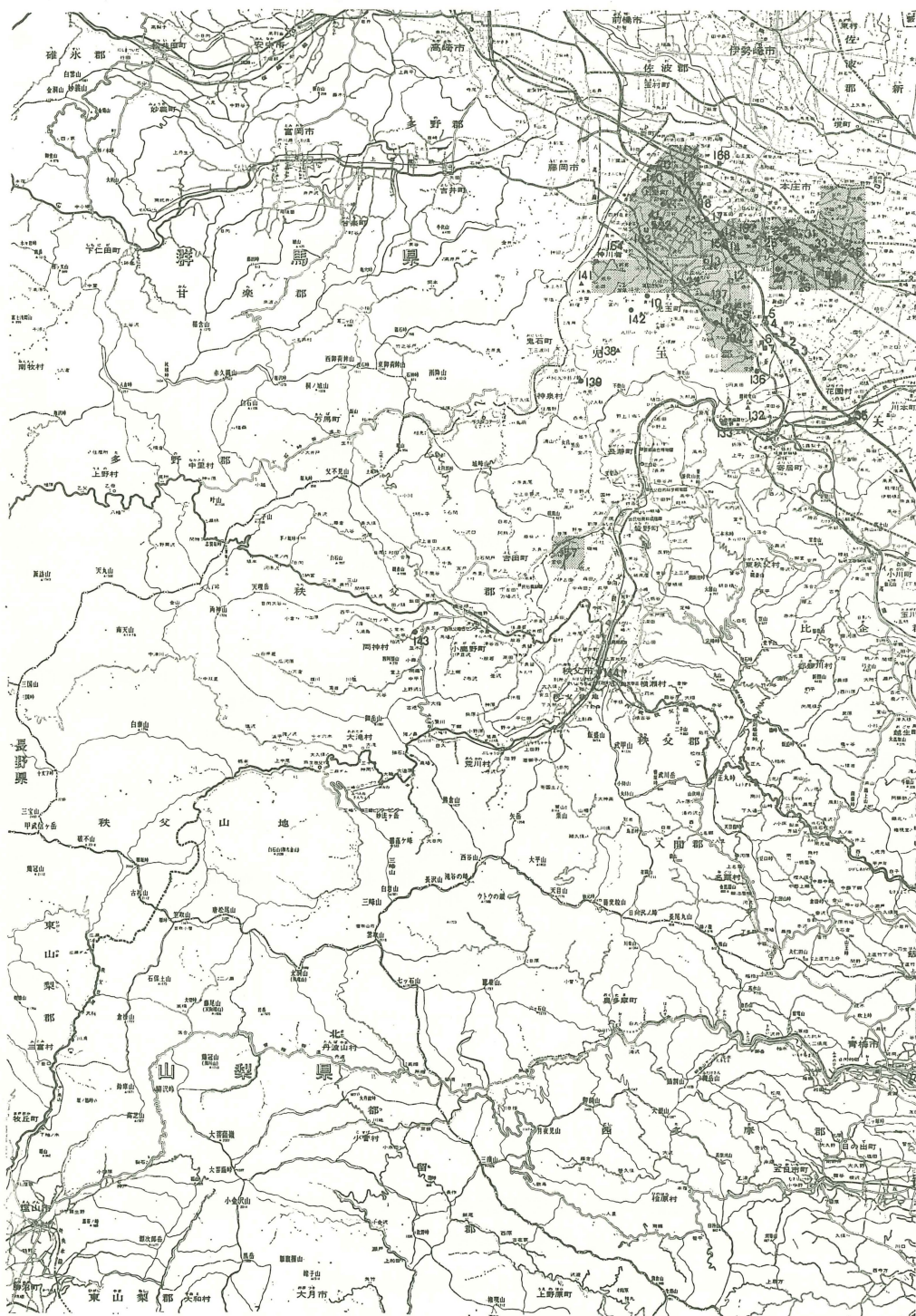
番号	遺跡名	年代	竪穴数	掘立柱建物		墨書・朱書・線刻			硯		備考
				A	B	種別	文字	器種 墨書部位	種類	数	
113	勝呂廃寺	国分	5								瓦・井戸
114	女影廃寺										
115	新宿										
116	大寺廃寺										
117	高岡廃寺										
118	高岡瓦窯跡	8 C後半～	1	4	墨	食	緑釉坏底部外面	円面硯	1	瓦塔・二彩・緑、灰釉・釘・風鐸・銅製環・紡錘車	
119	寺谷廃寺	8 C後半～ 9 C前半	1						円面硯	1	須恵器窯跡
120	古姓前遺跡										
121	虫草山古窯跡										
122	小用廃寺										
123	毛藏寺	国分	20	4							馬具・鋤先・鎌・刀子・釘・鏃・灰釉 中世瓦
124	旭台南										
125	伴六										
126	旧盛徳寺										
127	小針	8 C末～9 C後半 真間・国分	3・2		線刻	私物・他水鳥絵	紡錘車(国分)				鬼高期10軒・他9軒
128	諱光寺廃寺	8 C～10 C									
129	舟山										
130	荷鞍ヶ谷戸窯跡										
131	西別府廃寺										
132	馬騎の内廃寺										
133	末野窯跡	鬼高～									五輪塔・概報・昭和51年・美里村教委 第15回発表要旨
134	大仏廃寺										
135	下道掘・上耕地										
136	地台										
137	宮下	国分	4								
138	寺山廃寺	奈良～平安	6								
139	橋ノ入										
140	五明廃寺										
141	城戸野廃寺										
142	金草窯跡	国分	2								灰釉長頸瓶・羽釜・鉄斧・釘
143	薬師堂										
144	上野町	国分	1								
145	飯積										
146	武蔵国分寺	国分	3								
147	中原後										
148	駒前										
149	池上										
150	目沼										
151	宮の前										
152	小谷窯跡										
153	赤沼国分寺窯跡										
154	山田窯跡										
155	金沢窯跡										
156	新沼窯跡										
157	大田条里										
158	大里郡条里										
159	南河原条里										
160	新田	真間・国分	3・4								3号住出土 38号住出土
161	北別所										
162	下田	奈良・平安	6・17	○							試掘・緑釉・小形壺・瓦・その他 5号住出土
163	皂樹原										
164	中道	国分	6		墨	十	須恵坏体部外面 紡錘車				
165	岩比田	鬼高～国分	31			刻書	武蔵	紡錘車	円面硯	1	19号住出土・井戸

番号	遺跡名	年代	竪穴数	掘立柱建物		墨書・朱書・線刻			硯		備考
				A	B	種別	文字	器墨書部位	種類	数	
166	正綱										
167	河越館跡										
168	北稻塚			3							溝2
169	氷川	平安	1	掘立柱群							足立郡
170	第2西久保	国分	1		墨	長		盤状坏・体・底部外面 須恵坏			布目の残る甕
171	御林遺跡	国分(9C前)	3		刻書	武蔵国		紡錘車			鎌・フィゴ羽口
172	御庵遺跡	国分	1								
173	針ヶ谷遺跡										
	字佐久保	国分	3		1						以下図117になし
	安行中学校校庭	国分	3		墨	足×4		土師坏底部外面			
	南通	国分	5		墨	登		須恵坏底部外面			5号住出土
	皿尾宿				墨	安・安院					
	南中丸				墨	乙または足					
	宮前				墨	西					
	菅谷館跡			○	墨刻書	田・回					
	將軍沢窯跡群					○ちや	かわらけ				中世畠山重忠館
	鶴巻窯跡群								円面硯		第8支群出土
	東金子窯跡群								風字硯		
	谷窪窯跡				銘書	入大家・奈	}瓦				
	谷津池窯跡				型押刻印	橋・荏					
					銘書	木田					
					銘書	大・取・高	瓦		風字硯		
					押型	田男					
					銘書押型	男	瓦				
	丸山遺跡	平安	1								

※ 中世には平安以降、鎌倉・室町を含む。

参考・引用文献

- あ 会田 明 「富士見市東台遺跡の調査」第10回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会 S.52
- 「打越遺跡IV」文化財調査報告第10集 富士見市教育委員会 1976
- 「打越遺跡」富士見市文化財報告第14集 富士見市教育委員会 1978
- 「富士見市中央遺跡群I」文化財調査報告第15集 富士見市教育委員会 1978
- 「富士見市中央遺跡群IV」文化財調査報告第21集 富士見市教育委員会 1981
- 青木義脩 「上木崎三丁目遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第5集 浦和市遺跡調査会 1977
- い 飯田充晴 「東の上遺跡」所沢市文化財調査報告書第1集 所沢市教育委員会 1976





第 117 図 埼玉県奈良・平安時代遺跡地図

- 石井則孝他 「日本の陶硯」五島美術館 1978
- 石田広美他 「山田水呑遺跡・考察篇別冊」山田遺跡調査会 1977
- 市川 修 「田中前遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第32集 埼玉県遺跡調査会 1977
- 福生美代子他 「伊勢塚・東光寺裏」埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集 埼玉県教育委員会 1980
- 今井 宏 「宮下・樋之口遺跡発掘調査概報」埼玉県児玉郡美里村教育委員会 S.51
- 今泉泰之他 「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集 埼玉県教育委員会
1974
- 岩崎卓也 「川越市仙波古代集落跡発掘報告書」川越市教育委員会 S.31
- う 梅沢太久夫他 「六反田」大里郡岡部町六反田遺跡調査会 埼玉県立歴史資料館編 1980
- お 小川良祐他 「高台山遺跡調査報告」大宮市文化財調査報告第2集 大宮市教育委員会 S.45
- か 柿沼幹夫他 「下田・諏訪」埼玉県遺跡発掘調査報告書第20集 埼玉県教育委員会 1979
- 『川口市安行中学校校庭出土の土器』「鳳翔No.10」埼玉大学考古学研究会 1975
- 金井塚良一 「江南村岩比田遺跡の調査」第11回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会 S.53
- く 栗原文蔵 『古代集落と神々』「埼玉考古第19号」 埼玉考古学会 1981
- 「殿山一貝塚及び土師集落址の調査」埼玉県遺跡調査会、富士見市教育委員会 S.52
- け 県史編さん室 「新編埼玉県史 資料編2」埼玉県 S.57
- こ 小出輝雄他 「富士見市中央遺跡群Ⅱ」文化財調査報告第17集 富士見市教育委員会 1979
- 小出義治 『住居と集落』「新版考古学講座5 原史文化下」雄山閣 S.47
- 小林重義他 「水深」埼玉県遺跡調査会報告第13集 埼玉県遺跡調査会 1970
- 「下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会 1974
- 駒宮史朗 「中道・西北原遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第23集 埼玉県遺跡調査会 1974
- 「御林下遺跡」埼玉県遺跡発掘調査報告書第13集 埼玉県教育委員会 1977
- 「中堀・耕安地・久城前」埼玉県遺跡発掘調査報告書第15集 埼玉県教育委員会 1978
- 「雷電下・飯玉東」埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集 S.54
- 「甘粕山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集 埼玉県教育委員会 S.55
- 後藤守一他 「登呂遺跡」日本考古学協会編 S.51
- さ 斎藤国男他 「大御堂檜下・女堀遺跡調査報告」埼玉県遺跡調査会報告第28集 1976
- 「小針遺跡発掘調査報告書—B地区—」行田市文化財調査報告書第10集 行田市教育委員会 1980
- 「陣場遺跡・旧盛徳寺址・内郷遺跡」行田市文化財調査報告書第13集 行田市教育委員会 1982
- 斎藤忠他 「伊場遺跡遺物編2」伊場遺跡発掘調査報告書 第4冊 浜松市教育委員会 1980
- 斎藤稔他 「若葉台遺跡第一次発掘調査概報」鶴ヶ島町教育委員会 1979
- 「若葉台遺跡群第二次発掘調査概報」鶴ヶ島町教育委員会 1980
- 「若葉台遺跡群第三次発掘調査概報」鶴ヶ島町教育委員会 1981
- 「脚折遺跡群」鶴ヶ島町教育委員会 1981
- 佐々木保俊 「針ヶ谷遺跡群Ⅴ」富士見市遺跡調査会調査報告第19集 富士見市遺跡調査会 1982
- 笹森健一 「あたご山古墳・南河原条里遺跡」あたご山古墳、南河原条里遺跡調査会 1977
- 「埼玉県上福岡市ハケ遺跡C地区」埼玉県上福岡市ハケ遺跡調査会 1979
- 「川崎遺跡（第3次）・長宮遺跡発掘調査報告書」上福岡市教育委員会 1978

- 「上福岡市内遺跡群の調査」第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会 S.55
- 佐藤忠雄 「岡部町熊野遺跡第1次調査」埼玉県遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会 S.53
- 「後榛沢遺跡群の調査」埼玉県大里郡岡部町教育委員会 S.53
- 「岡部町西龍ヶ谷遺跡の調査」第15回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会 S.57
- 「大寄B・西浦北遺跡圃場整備事業に伴う榛沢遺跡群の調査概報」埼玉県大里郡岡部町教育委員会 1979
- 「水窪遺跡の調査第二次」埼玉県大里郡岡部町教育委員会 S.52
- し 塩野博他 「菅谷館跡」埼玉県埋蔵文化財調査報告第6集 埼玉県教育委員会 S.52
- 市史編さん室 「浦和市史 第一巻 考古資料編」浦和市 S.49
- す 菅谷浩之他 「枇杷橋遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第20集 埼玉県遺跡調査会 1973
- 「宮下・樋之口遺跡発掘調査概報」埼玉県児玉郡美里村教育委員会 1976
- 「北貝戸遺跡—県営美里ほ場整備事業地内遺跡—」埼玉県児玉郡美里村教育委員会 1977
- 杉崎茂樹他 「原遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第34集 埼玉県遺跡調査会 1978
- 鈴木徳雄 「児玉町橋ノ入遺跡の調査」第15回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会 S.57
- そ 曽根原裕明 「薬師堂遺跡の調査」第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会 S.55
- た 谷井彰他 「寿能泥炭層遺跡の調査」第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会 S.55
- 「畑中遺跡…埼玉県営一般灌漑排水事業児玉用水改良事業地内遺跡」児玉群美里村畑中遺跡調査会 1979
- 「山田・相撲場遺跡発掘調査報告」埼玉県遺跡調査会報告第18集 埼玉県遺跡調査会 1973
- 高橋一夫他 「埼玉県古代寺院跡調査報告書」埼玉県史編さん室 1982
- 「大山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集 埼玉県教育委員会 1979
- 「馬場遺跡」庄和町馬場遺跡調査会 S.49
- 段熙麟 「日本に残る古代朝鮮<関東編>」創元社 S.53
- な 中村倉司 「宇佐久保遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第38集 埼玉県遺跡調査会 1979
- 「蕨薙神社 前遺跡」埼玉県遺跡調査会報告第39集 埼玉県遺跡調査会 1980
- の 野部徳秋 「末野窯址(花園支群)発掘調査」文化財報告第2集 埼玉県大里郡寄居町教育委員会 1977
- 野村幸希 「遺跡調査室年報I」立正大学熊谷校地遺跡調査室 1979
- 野村侃司他 「氷川遺跡(第2次)の調査」第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会 S.55
- は 長谷川勇 「本庄市西富田遺跡の調査」第15回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会 S.57
- 坂野和信他 「皂樹原・檜下遺跡試掘報告」神川村遺跡調査会 1980
- ま 増田逸朗 「千光寺」埼玉県遺跡調査会報告第27集 埼玉県遺跡調査会 1975
- 松本富雄 「新聞遺跡I」埼玉県三芳町教育委員会 1979
- む 村田二郎太 「朝霞の文化財第四集—第二西久保遺跡発掘報告—」朝霞市教育委員会 1973
- よ 吉川国男他 「北本市の埋蔵文化財」北本市文化財調査報告書第1集 北本市教育委員会 S.47
- 「蓮田町の埋蔵文化財図録集」蓮田町教育委員会 1971
- 吉敷正明他 「城ノ越遺跡—国分期集落址の調査—」城ノ越遺跡調査会 1978
- り 林野全考・桜井敏雄 「神社の建築」日本の美と教養25 河原書店

4 中山遺跡の遺構と遺物について

中山遺跡は関越自動車道にかかる寄居用土地区一連の遺跡の一つとして、他遺跡の如く集落遺跡を想定していたが、調査の結果竪穴工房跡とこれに関連する炭窯が検出された。

検出された3基の窯のうち、2基は年代の下降するものである。

製炭遺跡の存在は、近年発見例が増加し、その形態や集落との関連など、古代生産構造の一端を示すものとして重要な遺跡と言える。

工房跡

第1号住居跡は隅丸のややくずれた方形を呈する小型の竪穴で、一辺にカマドを設置するが壁の掘り込は極めて浅く貧弱な規模である。小規模な構造にもかかわらず、カマド前面の焚口に相当する部位には、深さ63cmを測る不釣り合な程大きなピットが掘られている。さらに床面中央には並列する挿鉢状のピットが設けられている。

このピット中と床面から4点以上のフィゴ羽口が出土しているのが注目される。

フィゴ羽口は、送風装置の一部としての機能を有し、実際に使用された跡を証する鉄滓が先端に付着し、加熱を受けてひび割を生じているものばかりであった。

これらの状況から本遺構は小鍛冶的機能を有していた工房跡と推定される。

小鍛冶遺構とするには、精錬用の炉が構築されていなければならない。そこで先にカマドとした遺構と、これに伴う深いピットの性格を考えた場合、通常のカマドには、この様な規模のピットは構造上必要が無いことから、壁を切っている焼土の分布は、小鍛冶用の炉の可能性が強い。

伊奈町大山遺跡A区第44住（註1）、あるいは、岩槻市諏訪山遺跡第34号住居跡（註2）でもカマドを鍛冶用として、使用している例からも十分考えられることである。

この観点から前面のピットは、炉の下部から風を送る。フィゴの羽口を差し込むためか、鍛鉄を取り出し易くする作業上の機能を有するピットと考えられよう。当工房跡からは、鉄滓も多数出土しており、これらのあり方も大山や諏訪山遺跡の工房跡と酷似するものである。

工房跡は、恒常的居住をする一般住居ではないが、作業の工程から風雨を防ぐ為に、上屋構造を必要としなければならない。当然作業の合間をぬって、食事をしたりする事もあり得るはずで、これらに使用した道具として、第72図の土器類がある。

土器

出土土器は、土師器坏、甕、須恵器坏、長頸壺、これに羽釜がある。完形品はないがNo.2・9の土器はP₃中より出土している。

各々の特徴は土師器②では厚味のある造りで体部下半から底部にかけて荒いヘラケズリと全体に器面に凹凸をみせ、中位がいく分窪んで屈曲して立ち上る。

甕③は頸部が内傾してくびれ、④は小形の甕で短かい口縁が外反する。両者は、内外面とも横位のヘラケズリが施されている。

須恵器坏類は全て底部は回転糸切で、高台は貼り付けである。⑤は直線的に大きく開いた体部で口径に対し底径比が $\frac{1}{2}$ 以下と小さいもので、土師質焼成となっている。

その他の坏は口唇が玉縁となって先端で小さく外反し、高台も鋭さを失ってくずれた作りの雑なものである。㊸は羽釜で口縁部が欠失し、鏝は小さなものが短かく突出した形である。

これらの土器様相からは、いずれの土器も平安時代後期に比定される土器で、羽釜の出現は10世紀に入り、須恵器と土師器の伴出関係からも矛盾するものではなく、10世紀後半に位置づけられるものである。

炭窯

炭窯は3基調査されている。1号窯は浅い舟底状を呈するもので底に若干の傾斜を持つ。外部には本体に伴うピットや溝は検出されていないため覆屋等が存在していたかどうか不明である。遺構の構造から簡単な伏窯と推定されるが、このような形態の窯として、県内では大山遺跡で見られる。

炭焼窯の性格から遺物に乏しく、遺構の年代決定が困難である。他遺跡例では、製鉄遺跡の場合、炭窯、工房跡（小鍛冶跡）集落などが付近に存在し、有機的な関係となって結びついて、集落として機能しており、そこから工房跡等の関連の上で年代を位置づけている。本遺跡においても、工房跡との位置的な関係、製鉄に用る燃料の供給などから、工房跡と同時期に存在していたと考えるのが妥当であろう。

さて、本窯は、方法も簡単な伏窯方式と推定され、専ら黒炭を製造していたものであろう。黒炭は火力が強く熱が上るため鍛冶には適している。

2、3号窯は1号と31m離れている。丘陵の裾部に位置し北斜面に掘り込まれ、冬季には上野国から吹きおろす赤城おろしをかなり受けたと想像される。これは製炭上にも様々な形で影響を及ぼしていると思われる。

2、3号は並列し、一見終末期の横穴式古墳の石室を連想させる。

石を以って構築され、底面にも偏平な石を敷き小規模ながらしっかりした造りである。焚き口分部にピットが連続して切り合っており、作業場となっている。

かき出しや、閉塞用の石や粘土を溜め置く施設としても利用した例も知られている。

この窯については何ら遺物が無い為、明確な時期が不詳であるが、これと同様な構造を有するものは、寄居町折原地区や周辺の美里村でも散見できる。しかし、付近の古老の記憶も又言い伝えでも、当所で炭を焼いたという話は聞かれなかったので、明治以前即ち江戸期のものと思われるが果して、このような構造を有する窯がいつの時代に発生したのかは、今のところ不明である。

この様にして中山遺跡は、遺構は少ないが、周辺遺跡との関係で把える時、重要な意味を持つものである。北方の甘粕山遺跡（註3）では平安時代の炭窯が発見され、北坂遺跡（註4）では「中」の焼印と、郷倉の鍵も出土している。鉄の生産は開発に大きく寄与するもので、又、仏教の拡散により地方寺院では仏像や梵鐘、仏具の鑄造などが行われ、大量の木炭が消費され、このような時代背景の中で、各郡では、手工業の発達に伴い木炭の生産が盛んとなり、多くの窯が構築される様になったと思われる。

（駒宮史朗）

註1 埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集 「大山」 埼玉県教育委員会 昭和54年

註2 埼玉県遺跡調査会報告第8集 「諏訪山遺跡」 埼玉県遺跡調査会 昭和46年

註3 埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集 「甘粕山」 埼玉県教育委員会 昭和55年

註4 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第1集 「清水谷・安光寺・北坂」 昭和56年

5 鶴巻遺跡の風倒木痕について

風倒木痕の概要

性格不明の落ち込みが風倒木痕と認識されたのは、能登氏の論文（能登1974）以来であるが、風倒木痕が注目された当初よりの、墓塚、おとし穴、貯蔵穴、産小屋などの機能をもつ人工的所産とする説（十菱1972）も、いまだ根強く残っているのが現状である。当鶴巻遺跡で検出された風倒木痕とした遺構の土層観察などによれば、人為的な遺構としての積極的な根拠が無く、やはり能登氏のいう風倒木痕として認識可能なものである。

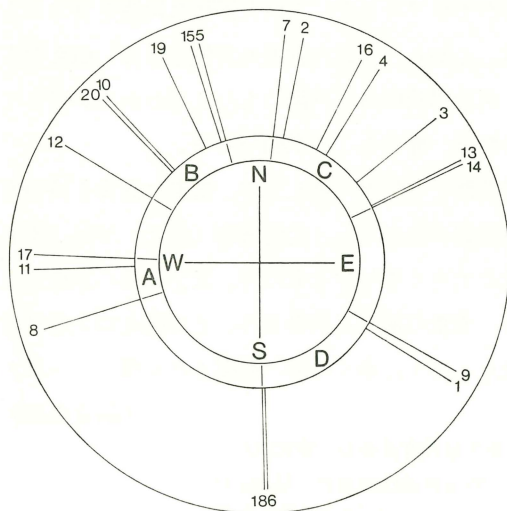
鶴巻遺跡で検出された20基の風倒木痕の形態上での一般的な特徴は、不整円形プラン（図版54・55）を呈し、黒色系土層で充填される二次堆積土層部と基本自然層に対比されるマウンド部土層から構成され、断面はスリパチ状を呈し、底面は凹凸の顕著なもの（図版56・57）が多く観察された。

主軸（倒木）方向

マウンド部土層の平面および断面土層観察によれば、垂直に堆積している自然層に対比される1層ないし数層の土層が、主軸に沿って連続して水平的に分布していることが認められる。これにより、風倒木痕の主軸方向は、基本自然層の土層に対比される土層が分布している側に倒れたものと認識できる。

第121図は、主軸方向を示したものである。

- A N-108°-W~N-89°-W, 3基、15%
- B N-49°-W~N-10°-W, 6基、30%
- C N-6°-E~N-64°-E, 7基、35%
- D N-120°-E~N-179°-E, 4基、20%



第118図 鶴巻遺跡風倒木痕方位

以上の4群に分類できる。B（北西）、C（北東）群にやや集中していることが認められ、特に南西方向には1基も存在していないことが注目される。

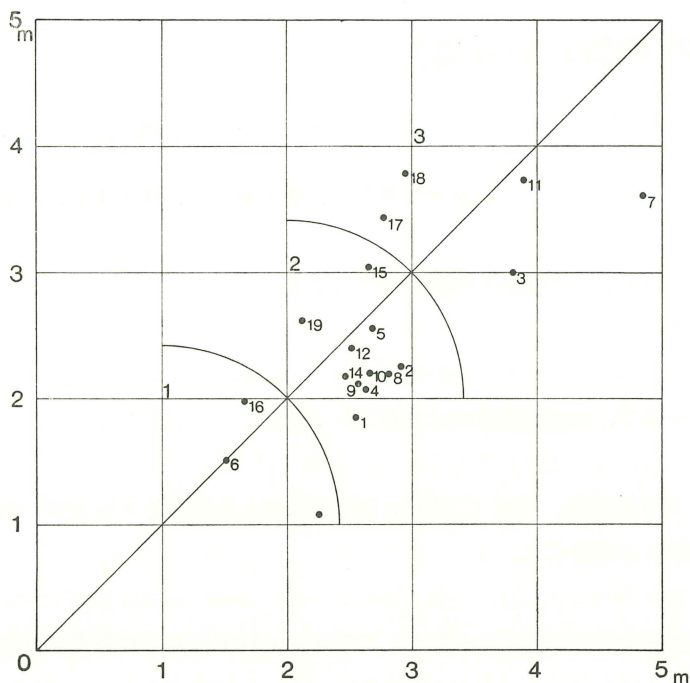
規模

第122図は、風倒木痕の規模を示したものである。

- 1群 2m以下、3基、15%
- 2群 2~3m、13基、65%
- 3群 3m以上、4基、20%

以上の3群に分類でき、特に2群の2~3mの規模に集中が認められる。

ここで、93基の風倒木痕が土層捻転址として調査された。本庄台地上の沖積面に立地す



第119図 鶴巻遺跡風倒木痕規模

られるものは無い。3層土面より加曾利B式期の土器が出土していることから、縄文後期には形成されていたものと考えられる。

以上、鶴巻遺跡の風倒木痕の分類検討をもとに深町遺跡の調査例と比較検討してきたが、この他にも、居沢尾根遺跡（青沼1981）、軽野正境遺跡（石原1979）など、ほぼ全国的に、かつ形成時期も各時期にわたり分布しているものである。（今井 宏）

引用参考文献

青沼博之 1981 「居沢尾根遺跡」 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 原村その4
 石原道洋 1979 「軽野正境遺跡発掘調査報告書」 秦荘町教育委員会
 柿沼幹夫ほか 1978 「天神山遺跡」 川口市文化財調査報告書第8集
 鈴木徳雄 1981 「深町・城の内遺跡」 深町遺跡調査会
 十菱駿武ほか 1972 「東方第7遺跡」 港北ニュータウン地域内文化財調査報告書Ⅲ
 谷井 彪ほか 1973 「坂東山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第2集
 能登 健 1972 「東方第13遺跡」 港北ニュータウン地域内文化財調査報告書Ⅲ
 能登 健 1974 「発掘調査と遺跡の考察—いわゆる性格不明の落ち込みを中心として—」 信濃第26巻3号
 前沢輝政 1973 「平石遺跡」 毛野古文化研究所

る児玉町深町遺跡（鈴木1981）の調査例と比較検討してみたい。主軸方向については、鶴巻遺跡同様南西方向に主軸方向をもつものが、1基も存在せず、規模においても2～3mに共通して集中し、土層観察でも大きな差異は認められない点など、示唆的な共通点が認識できる。

形成時期

鶴巻遺跡で検出された風倒木痕からは、大まかな形成時期の決定材料となる遺物の出土も皆無であるが、すべて2次堆積土層に3層の風化再堆積土をもち、2層の風化再堆積土と認め

6 沼下遺跡井戸跡採取資料分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

埼玉県埋蔵文化財調査事業団殿より、花粉分析1点、鉱物分析2点、炭化材3点、種子1点、計7点の分析の御依頼を受けました。

このほど、分析が終了いたしましたので、その結果を御報告いたします。

I 花粉分析

1 試料

試料は一点、有機質に富むロームで、化石産出傾向は普通であった。

2 分析方法

先試料30gを採り、HCL、HF処理後、重液(ZnBr²)分離で浮遊した残渣をアセトリシス法を行い、グリセリンゼリーで封入し検鏡する。

3 分析結果及び考察

分析結果は検出された花粉、孢子化石の総個体を基数として各花粉・孢子化石の百分率を算出し、付表-1に表わした。

又、主要花粉孢子化石については付図-1とし写真図版(図版64)を作成したので参照にされたい。

今回の分析において検出された花粉・孢子化石を以下に列挙する。

<AP-1 (針葉樹花粉)>

Picea (トウヒ属)、*Pinus haploxyton-type* (五葉型松)、*Pinus diploxton-type* (二葉型松)、*Pinus* (マツ属)、*Tsuga sieboldii* (ツガ)、*Tsuga diversifolis* (コメツガ)、*Cryptomeria* (スギ属)、*Sciadopitys* (コウヤマキ属)

<AP-2 (広葉樹花粉)>

Alnus (ハンノキ属)、*Betula* (カバノキ属)、*Carpinus* (クマシデ属)、*Castanea* (クリ属)、*Fagus* (ブナ属)、*Cyclobalanopsis* (アカガシ亜属)、*Lepidobalanus* (コナラ亜属)、*Ulmus* (ニレ属)、*Zelkova* (ケヤキ属)

<NAP (草本花粉)>

Persicaria (サナエタデ節)、*Caryophyllaceae* (ナデシコ科)、*Chenopodiaceae* (アカザ科)、*Impatiens* (ツリフネソウ属)、*Carduoideae* (キク亜科)、*Artemisia* (ヨモギ属)、*Gramineae* (イネ属)、*Moraceae* (クワ科=他の木本の産出数と比較した結果、草本の占める割合が多いと判断→草本類に繰入れた)、*Portulaca* (スベリヒユ属)、*Galium* (ヤエムグラ属)、*Euphorbia* (トウダイグサ属)

<FP (形態分類花粉)>

Triporate pollen (三孔型花粉)、*Tricolpate pollen* (三溝型花粉)、*Tricolporate pollen* (三溝孔型花粉)、*Inaperturate pollen* (無孔型花粉)

<FS (羊歯類孢子)>

Polypodiaceae (ウラボシ科)、Monolete spore (単条型孢子)

次に主な花粉、孢子化石の消長について述べる。

分析の結果は草本類が大半(60.5%)を占め、広葉樹花粉(29.5%)、針葉樹花粉(11.5%)がこれに次ぎ、羊歯類孢子は5.0%と少なかった。

主なものとしては草本類では Moraceae (クワ科) 20.0%、Gramineae (イネ科) 13.5%、Impatiens(ツリフネソウ属) 11.0%であり、広葉樹花粉でLepidobalanus(コナラ亜属) 4.5%、Cyclobalanopsis (アカガシ亜属) 4.0%、Zelkova (ケヤキ属) 4.0%検出された。また、針葉樹花粉ではCryptomeria (スギ属) が5.0%あったがその他は低率であった。

なお、クワ科については木本類もあるが、木本性クワ科植物の花粉産出量は数%までであり、今回の検出量が著しく多いので木本、草本両方が含まれると思われる。

他の木本の産出数と比較した結果、草本の占める割合が多いと判断した。

古植生はLepidobalanus (コナラ亜属)、Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)、Zelkova (ケヤキ属) 等の広葉樹にCryptomeria (スギ属)、Pinus (マツ属) などの針葉樹が混じる針広混交のやや疎らな林下や周辺部に Moraceae (クワ科)、Gramineae (イネ科)、Carduoideae (キク亜科)、Impatiens (ツリフネソウ属) 等の草本類が生育していたと考えられる。

古気候はPinus haploxyylon-tyhe (五葉型松)、Tsuga diversifolis (コメツガ)、Picea (トウヒ属)、Fagus (ブナ属) 等や、冷涼~寒冷や気候を示す要素と、Sciadopitys (コウヤマキ属)、Cyclobalanopsis (アカガシ亜属等) 等、や、温暖な気候を示す要素が共に検出されており、断定出来ないが現在と略同じか、や、冷涼であったと思われる。

なお、Persicaria (サナエタデ節)、Chenopodiaceae (アカザ科)、Carduoideae (キク亜科)、Gramineae (イネ科)、Portulaca (スベリヒユ属)、Euphobia (トウダイグサ属)、Galium (ヤエムグラ属) に属する植物の幾つかは、現在路傍植生や、耕地・雑草として知られており、同時に出土した種子類の存在と合せて、人為的影響(耕作?)があったことも考えられる。

II 鉱物分析

1 試料

No 1 ローム塊、褐~明褐色 7.5YR 4/6~5/6

2 井戸覆土 にぶい黄褐色 10YR 4/3

2 分析方法

採取した原試料を超音波発生装置にかけ粘土分を除去し、 $\frac{1}{4}$ mm (60mesh) と $\frac{1}{8}$ mm (120mesh) の標準篩を用いて $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{8}$ mm の砂分を抽出し、テトラブROMエタン(比重 \times 2.96)によって重鉱分を分離した。

検鏡は300個体程度観察し、粒数の%表示にて鉱物組成を表示した。分析結果は付表-2に示した。

また参考として写真図版(図版65)を作成した。

3 分析結果

試料は褐色～明褐色のローム塊 (No. 1) と植物片等を多く含むにぶい黄褐色を呈する井戸覆土 (No. 2) の 2 点である。

乾燥した試料に含まれる $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{8}$ mm の砂分の量は、No. 1 で 12.3%、No. 2 では 9.1% と比較的大きい数値を示している。

$\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{8}$ mm の砂分中の重鉍物量は No. 1 では 67.1%、No. 2 では 48.2% であった。このことは No. 2 の場合は 51.8% の軽鉍物が含まれていることを示している。

○ No. 1 試料の重鉍物組成

斜方輝石が 61.4%、単斜輝石が 22.6%、不透明鉍物が 15.1% の値を示す。

斜方輝石・単斜輝石共に柱状の自形～半自形を示すものが多い。

また、斜方輝石、単斜輝石、不透明鉍物から成ることから、浅間火山に由来する上部ローム層の一部である可能性が推定される。

○ No. 2 試料の軽鉍物組成

長石が最も多く、全体の 53.9% を占める。

石英は 0.3% と微量であった。火山ガラスはその形態からバブル型・中間型・軽石型の 3 つに配分した。

バブル型は泡の曲率が非常に大きいものや、平板型の火山ガラスからなり、軽石型は小さい泡が沢山集合した火山ガラスであった。

バブル型と軽石型の中間のものを中間型としたが、泡が繊維状に細長く伸びたものも中間型として数えている。

この試料の火山ガラスはバブル型が 2.2%、中間型が 10.6%、軽石型が 5.1% であった。

特に繊維状に伸びた中間型火山ガラスが比較的多産している。

この分析結果から、テフラ火山層序について、その位置を考察することは難しい。

Ⅲ 炭化材鑑定

○ 寄居町沼下遺跡試料

本試料は樹皮を主体とし、枝・種子等、雑多な植物遺体を含んでいるが、樹皮から種を固定することは甚だ困難である上に、誤る場合もある。

従って今回は比較的保存状態の良い小枝 1 本を鑑定することとした。

なお、鑑定に用いたプレパラートの写真図版 (図版 66—1・2) を作成し、後掲したので参照されたい。

鑑定結果 *Castanea Crenata* (クリ)

○ 寄居町中山遺跡試料

試料は 2 点であるが、両者共に炭化が進み、鑑定は非常に困難と考えられた。

従って比較的炭化の程度の進んでいない木片を選びだし試料とした。(図版 66—3・4)

鑑定結果 *Quercus acutissima* or *Q. variabilis* (クヌギあるいはアベマキ)

Ⅳ 種子鑑定

本試料中に含まれる種子は以下の様であった。なお、写真図版 (図版 67—1～4) を作成したの

で参照されたい。

1 *Lagenaria* sp. (ヒョウタン類の一種)

2 *Prunus of salicina* (スモモ?) の核

中国原産で洪積世及び鮮新世から散点的に核遺体が報告されているが、現在我国に現生しない。試料は現生のスモモの核より小型である。未熟なためのものと思われるが *Prunus* の他の種の可能性も否定できない。

3 *Vitis ficifolia* or *V. flexuosa* (エビヅル or サンカクヅル)

両種共に暖帯(本州～朝鮮、中国)に分布し、果実は食用となる。

種子遺体はエビヅルとしては鮮新世から、かなり広い範囲で報告があり、一方サンカクヅルも沖積期から報告がある。

種子の大きさから見ても、殆んどのものはエビヅルではなからうかと思われる。

4 *Cannabis sativa* (アサ)

一年生植物であるため貯蔵していた種子の一部と考えられる。本採取地土壌の花粉分析では、多量のクワ科花粉化石(20.0%)が検出されている。

参 考 文 献

Brown Panshin & Forsaith : Textbook of and wood technology,

Mc. Graw Hill 1960

Fsau, k : Anatomy of seed plants, John Wiley & Sons 1976

島地 謙 : 「木材解剖図説」地球社

Pollen and Spores		Pollen and Spores	
Picea	0.5	Chenopodiaceae	3.0
Pinus haploxylon	1.5	Impatiens	11.0
Pinus diploxylon	1.0	Carduoideae	1.5
Pinus (unknown)	1.0	Artemisia	3.5
Tsuga sieboldii	1.5	Gramineae	13.5
Tsuga diversifolia	0.5	Moraceae	20.0
Cryptomeria	5.0	Portulaca	2.5
Sciadopitys	0.5	Galium	0.5
		Cf Euphorbia	2.0
ΣAP-1 (N)	23	ΣNAP (N)	121
(%)	11.5	(%)	60.5
Alnus	0.5	Triporate pollen	1.5
Betula	0.5	Tricolpate pollen	0.5
Carpinus	2.0	Tricolporate pollen	2.5
Castanea	0.5	Inaperturate pollen	0.5
Fagus	1.5		
Cyclobalanopsis	4.0	ΣFP (N)	10
Lepidobalanus	4.5	(%)	5.0
Ulmus	0.5		
zelkova	4.0	Polypodiaceae	0.5
		Nonolete spore	4.5
ΣAP-2 (N)	36	ΣFS (N)	10
(%)	18.0	(%)	5.0
ΣAP (N)	59	ΣPollen & Spores (N)	20.0
(%)	29.5		
Persicaria	1.5		
Caryophyllaceae	1.5		

付表一 沼下遺跡井戸採取試料花粉分析結果一覧表

試料	色調	試料中の砂分量 (W%)	砂分中の重鉍物量 (W%)	重鉍物組成(粒数%)				同定個体数	軽鉍物組成(粒数%)						同定個体数	
				斜方輝石	単斜輝石	不透明鉍物	その他		石英	長石	火山ガラス型	火山ガラス型	軽石	その他		
1	ローム塊	褐 7.5 明褐 5.6	12.3	67.1	61.4	22.6	15.1	0.9	350							
2	井戸覆土	にぶい黄褐 10.4	9.1	48.2						0.3	53.9	2.2	10.6	5.1	27.9	312

付表一 沼下遺跡井戸採取試料鉍物分析結果表

7 中山遺跡 1号住居跡出土鉄滓の調査

大澤 正己

1 はじめに

中山遺跡は、埼玉県大里郡寄居町用土字中山 5, 421 に所在する。平安時代に比定される第 1 号住居跡から、羽口（内径20~25mm、外径75~80mm）と共に鉄滓が出土している。この住居跡には、カマドと思われる部分のすぐ内側にピットが 2 箇所あり、その周辺から羽口や石が、まとまってほぼ床面から出土しており、工房跡的な性格をもつ遺構と考えられている。（註 1）

この遺構から出土した鉄滓 2 点について、埼玉県埋蔵文化財調査事業団から調査依頼を受けたので、鉱物組成と化学組成の調査を行ない、当鉄滓が精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）で、椀形滓（註 2）の破片であることを明らかにしたので報告する。

なお、同遺跡より、時期不明の第 1 号炭焼窯（幅 2 m、長さ 7 m、上部削平で現存深さ 20~40cm の舟底型）1 基と、近世炭窯 2 基が検出されている。前者の窯は、小炭製造の炭窯の形態を示すもので、大鍛冶に際して使用した木炭を生産した窯としての可能性は十分に考えられる。

2 供試試料及び調査項目

Table 1 に、今回の調査対象となった鉄滓の履歴及び調査項目を示す。

Table 1 供試鉄滓の履歴及び調査項目

符 号	遺跡名	鉄 滓 履 歴			調 査 項 目		
		出 土 位 置	鉄滓サイズ(mm)	重 量(g)	外観写真	顕微鏡組織	化学分析
8 J-811	中 山	第 1 号住居跡	55×40×35	100	○	○	○
8 J-812			45×35×25	90	○	○	

3 調査結果

図版 68 に顕微鏡組織を、また Table 2 に化学組成の調査結果を示す。

(I) 第 1 号住居跡出土鉄滓 (8 J-811)

肉眼観察：本来の表皮は剥落しており、赤褐色を呈する二次表面で気泡が散見される。裏面は、さざ波状の凹凸に炉材粘土が少量附着しており、これは高熱のため青灰色に変色し、局部的に鉄錆が発生している。破片ではあるが、裏面にアールが認められた。破面は漆黒色で、気泡がわずかに散在している。

顕微鏡組織：図版 68 の上段に示す。鉱物組成は、白色粒状のヴスタイト (Wüstite : FeO) (註 3) と淡灰色多角形状のヘーシナイト (Hercynite : FeO · Al₂O₃) (註 4) それに灰色長柱状結晶のフェイヤライト (Fayalite : 2 FeO · SiO₂) (註 5) らが、地の暗黒色のガラス質に晶出しているのが認められる。

化学組成：Table 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) は高目で 50.0% あり、そのうち、酸化第一鉄 (FeO) が 54.3%、酸化第二鉄 (Fe₂O₃) が 11.14% である。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO)

は、やや多い目で27.13%あり、特徴的には酸化アルミニウム (Al_2O_3) が7.31%に対して酸化カルシウム (CaO) が0.77%含有され、その比は9.5である。 $\text{Al}_2\text{O}_3/\text{CaO} \approx 3.7$ 以上であれば、ヘーシナイトが顕微鏡で確認されるが、今回もその傾向は認められた。

二酸化チタン (TiO_2) は3.89%あり、バナジウム (V) が0.21%から砂鉄を原料とした鉄滓であることが判る。他の随伴微量元素は全般に低目で、酸化マンガン (MnO) が0.23%、酸化クロム (Cr_2O_3) 0.01%、硫黄 (S) 0.068%、五酸化リン (P_2O_5) 0.26%、炭素 (C) 0.03%、銅 (Cu) Nil (なし) であった。

当鉄滓は、造滓成分が製錬滓ほどではないがやや多い目、全鉄分も高めで、二酸化チタン、バナジウムの中レベルからみて、精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓) と推定される。なお、外観観察で、裏面にアールがみられたのは、火窪の底部が鉄滓に残っているためである。また鉍物組成がヴスタイト+ファイヤライト+ヘーシナイトの構成からも精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓) の裏付けとなる。

(Ⅱ) 第1号住居跡出土鉄滓 (8 J—812)

肉眼観察：当鉄滓も表皮側は剝離し、赤褐色を呈する二次表面で、わずかに気泡が認められる。裏面は滴下状の小さい凹凸に炉材粘土を少量付着しており、わずかなアールが認められる。破面は、黒色地に黒褐色部が混じり、2~3 mmの気泡が散在する。緻密で比重大、8 J—811 と同じく椀形鍛冶滓の破片である。

顕微鏡組織：図版68の下段に示す。鉍物組成は、白色粒状のヴスタイト (Wüstite : FeO) と、淡灰白色で多角形状のマグネタイト (Magnetite : Fe_3O_4) (註6)、それに灰色長柱状のファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) から構成されている。

当鉄滓も精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓) としての鉍物組成を示しており、マグネタイトの晶出は羽口直下の高温域での生成物であろう。

4 考察

中山遺跡の第1号住居址 (工房跡) より出土した鉄滓は、破片であるが復元すると椀形滓となり、鉍物組成と化学組成から推察して精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓) と分類できる。

精錬鍛冶とは、金属の純度を改善するために、溶湯や還元鉄から酸化物、ガスその他の不純物を除去する操作をいう。製錬炉より出たばかりの銑や鋸は、まだ粗成品で鉍滓と未分離の半溶融状態のまままで製造されているから、不純物も多く、可鍛鉄にするには左下げ法といって和銑または鋸を加熱半融して脱炭し、卸金をつくる。また、鍛錬によって鉍滓を絞り出して錬鉄 (庖丁鉄) を製造する。

この工程で、排出される鉄滓は、再加熱で全鉄分 (Total Fe) を多く含有する。これらを精錬鍛冶滓と呼んでいる。鍛冶炉の炉底に溜まる半球形に近い形をした直径10~20 cmの滓を精錬鍛冶椀形滓と呼称している。

Table 2 に示した化学組成で伊奈町の大山遺跡 (註7) の製錬滓に比べて、構成成分が異なることが判るであろう。

すなわち、製錬滓は精錬鍛冶滓に比べて、全鉄分 (Total Fe) が低く、造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$) が多い。なお砂鉄を原料としているので、二酸化チタン (TiO_2)、バナジウム (V) が高目である。

また、同じ鍛冶滓でも Table 2 の No25、26高岡寺院跡の鍛冶滓（註8）らは、小鍛冶滓に分類されて、中山遺跡出土の精錬鍛冶滓に比べて、さらに全鉄分は高目となり、造滓成分、二酸化チタン、バナジウムらは減少している。

中山遺跡出土鉄滓は、製錬滓と鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）の中間に位置づけられる。鉱物組成も、ヴスタイト（Wüstite : FeO）とファイヤライト（Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）が基本で、これにヘーシナイト（Hercynite : $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ ）とマグネタイト（Magnetite : Fe_3O_4 ）が検出された。ヘーシナイトの検出例は次の Table 3 に示す 5 例となる。

Table 3 ヘーシナイト検出鉄滓

出土鉄滓 組成	中山遺跡 椀形滓破片	(註8) 高岡廃寺 鉄滓	(註10) 千草山遺跡 椀形滓	(註11) 門田南側台地 鉄滓	(註12) 大牟田3号墳 鉄滓
$\text{Al}_2\text{O}_3/\text{CaO}$	9.5	4.5	3.7	6.0	4.0

埼玉県内では、中山遺跡と高岡廃寺（入間郡日高町大字高岡字ケシ坊主）の鉄滓である。県外では、千葉県千草山遺跡（註10）（市原市能満字西千草山）、福岡県の門田遺跡（註11）（春日市大字上白水字門田）、大牟田3号墳（註12）（福岡市西区柏原字大牟田）前庭部出土の鉄滓らである。

いずれも、カルシウム（CaO）の含有量が少ない鉄滓に晶出するもので、過剰な酸化アルミニウム（ Al_2O_3 ）が酸化第一鉄（FeO）と結合してスピネル・ヘーシナイトを形成したものと考えられる。

なお、鍛冶滓にマグネタイトが検出される類例として管見の気づいたものは、九州から北海道をみわたして、中山遺跡例を含めて14例が挙げられる。（註13）

5 まとめ

中山遺跡の鍛冶工房跡に推定される建屋跡から出土した鉄滓を調査して次のことが判った。

<1> 調査鉄滓は2個ともに破片であるが、鍛冶炉の炉底部に集積した椀形滓と推定される。鉄滓裏面のアールと炉材付着粘土がそれを証明する。

<2> 鉄滓の鉱物組成は、基本的にはヴスタイト（Wüstite : FeO）+ファイヤライト（Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）であるが、1個にはヘーシナイト（Hercynite : $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ ）が、他のもう1個にはマグネタイト（Magnetite : Fe_3O_4 ）が検出された。ヘーシナイト、マグネタイトの結晶は、他地域の鍛冶滓でも検出されている。

<3> 化学組成は、全鉄分（Total Fe）が50.0%、造滓成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$ ）が27.13%あり、二酸化チタン（ TiO_2 ）が3.89%、バナジウム（V）が0.21%あるところから、製錬滓と鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）の中間に位置する精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）に分類できる。

<4> 1号住居跡は、2個所のピットをもち、これらから鉄滓と羽口4本を出土した。ピットは火窪の可能性を有しており、状況的にみても工房跡と考えられる。羽口は、内径20~25mm、外径75~80mmで、形態が筒状を示すところをみても大鍛冶用と考えられる。（顕微鏡組織下の実測図参照。両端に溶着鉄滓を付着して、両方使用したことが伺われる。製錬においては、こういう使い方は不可能）

<5> 中山遺跡から、時期不明の第1号炭窯が検出されている。上部削平であるが、幅2m、長さ7mの舟底型は、形態的にみても大炭窯ではなく、鍛冶用の木炭窯と推定される(註14)。この木炭窯で製造された木炭は1号住居跡の工房で使用された可能性が考えられる。

<6> 中山遺跡隣接地の岡部町に所在する西浦北遺跡(註15)の製錬滓に含有される二酸化チタンのレベルからみても、中山遺跡出土鉄滓は、精錬鍛冶滓(大鍛冶滓)として矛盾しない。

註1 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 整理担当者 大和修氏のご教示。

註2 椀形滓「椀形滓は鍛冶滓の一種であり、直径12~18cmのやゝ楕円形を呈した浅い椀形の鉄滓である。鍛冶工房で大鍛冶や鍛え鍛冶にともなって発生するものと、小鍛冶の作業にともなって発生するものがあり、前者の表面はやや製錬滓に近い外貌をしており、後者の方はやゝ小形で質も均一に粗鬆である。いずれも吹子直下の火床中に形成されるもので、鉄滓と藁灰、あるいは山土との焼結状態を呈している。」以上は窪田蔵郎『鉄の考古学』雄山閣 1972。最近では、芹澤正雄、穴澤義功両氏は、椀形滓タイプは製錬滓にもみられると云っている。関東地区にも多く存在するシャフト炉の炉底滓をさしているの、俗に云う椀形滓とは異なる(成分的に)と考えている。

註3 ヴスタイト(Wüstite: FeO) Fe—O系二元状態図における鉄と酸素との固溶体のこと。FeO (O₂ 22%)は α Feに分離する共折反応(eutectoidreaction)をおこす。すなわち
$$\text{Wüstite} \xrightleftharpoons{570^\circ\text{C}} \text{Fe}_3\text{O}_4 + \alpha\text{鉄}$$
 となる。

鉱物特性

光学的性質; マグネタイトと同様に等軸晶系に属し、反射偏光を示さない。屈折率もマグネタイトよりわずかに低く、色調もマグネタイトより灰色を帯びているが、その差はあまり大きくない。形状は一般に球状、樹枝状およびマグネタイトとの共晶の形で観察されるが、光学的性質だけではマグネタイトと識別がたい。透過光ではマグネタイトと同様、不透明である。

腐食性; ヴスタイトの明確な識別は、エッチ・テストによるのがよく、SnCl₂飽和溶液により1~2minで完全か、それに近い程度まで腐食されるのでマグネタイトと識別される。

微小硬度; 焼結鉱中のヴスタイトは一般にマグネタイトと共晶をなしており、微小硬度は450~500Hv程度で、マグネタイトよりいくぶん低い値を示す。

註4 ヘーシナイト(Hercynite: FeO · Al₂O₃)。Al₂O₃/CaOの比が大きい場合に多く認められる鉱物組成。

Hercyniteの生成は、鉱物組成中のアノルサイト(Anorthite: CaO · Al₂O₃ · 2SiO₂)が、CaOを満たすに十分なAl₂O₃を取り上げ、残りはFeOと結びついてSpinel Hercyniteになったのであろう。

註5 ファイヤライト(Fayalite; 2FeO · SiO₂)。斜方晶系に結晶する鉄ケイ化物のこと。溶融点、990℃、比重4~4.2。2FeO+SiO₂→2FeO · SiO₂の反応による生成物。

光学的性質; ファイヤライトは斜方晶系に属し、反射偏光を示す。屈折率(Ng=1.886)は酸化鉄鉱物に比べれば低く、マトリックスのけい酸塩の中では比較的高い。ファイヤライトは焼結中に現われる場合、スラグ中に、よく木ずり状となって晶出するため、この場合その特徴ある組織から他鉱物との識別は容易である。透過光では、開ニコルで無色であり、交差ニコルで淡黄色、黄緑色、黄橙色などを呈する。

微小硬度; 微小硬度は600~700Hv程度である。

註6 マグネタイト(Magnetite; Fe₃O₄) FeO · Fe₂O₃でも表わされ、FeOの2価のFeは、MgまたはNiで置換され、また別にTiO₂を含むこともある。立方晶で普通正八面体。

鉱物特性

光学的性質； マグネタイトは等軸晶系に属し、屈折率は $N_g=2.42$ で、わずかに黄色を含む灰白色を呈し、反射光度は弱い。反射偏光を示さず、このことは屈折率の低いことと共にヘマタイトと明瞭に識別できる。マグネタイトは不規則塊状の大きい結晶を生成し、また往々にして樹枝状、四面体、八面体などで観察される晶癖の面からヘマタイトとは異なる。透過光では不透明である。

腐食性； マグネタイトは王水により黄変するが、ヘマタイトは変化せず、ヘマタイトと識別される。また SnCl_2 飽和溶液[※]によって侵されず、ヴスタイトは1～2 minで暗灰色を呈するのでヴスタイトと識別される。

微小硬度； 500～600Hvでヘマタイトとは相当の差異を有する。

※ 腐食液の SnCl_2 飽和アルコール溶液の代用として SnCl_2 の1% HCl 飽和溶液を代用してもよい。

- 註7 大澤正己「大山遺跡を中心とした埼玉県下出土の製鉄関係遺物分析調査」『大山』（埼玉県遺跡発掘調査報告書 第23集）埼玉県教育委員会 1979
- 註8 大澤正己「高岡寺院跡出土の鉄滓・釘の分析調査」『高岡寺院跡発掘調査報告書』高岡寺院跡発掘調査会 1978
- 註9 大澤正己「馬場遺跡の鉄滓について」『馬場遺跡』〈国道16号線（春日部—野田線バイパス）埋蔵文化財調査報告〉庄和町馬場遺跡調査会 1974
- 註10 大澤正己「千草山鍛冶遺構出土の鉄滓・スケール・鉄釘の調査」『千草山遺跡』千草山遺跡発掘調査団 1979
- 註11 大澤正己「門田遺跡出土鉄滓及び羽口先端溶着鉄滓の調査結果」『山陽新幹線関係文化財調査報告書(Ⅲ)』福岡県教育委員会 1977
- 註12 大澤正己「福岡平野を中心に出土した鉄滓の分析」『広石古墳群』福岡市教育委員会 1977
- 註13 精錬鍛冶滓、鍛錬鍛冶滓でマグネタイト ($\text{Magnetite} : \text{Fe}_3\text{O}_4$) が検出されたものとして、次に示す遺跡出土滓がある。
- ① 大澤正己「二丈町深江・塚田遺跡出土鉄滓の分析調査」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第7集』福岡県教育委員会 1982
 - ② 白岩遺跡 福岡県北九州市八幡西区大字香月。大澤正己「香月地区白岩遺跡出土の鉄滓について」『白岩遺跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告 第3集）北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室 1980
 - ③ 防府国府跡 山口県防府市多々良町二丁目。10号Pit出土鉄滓にマグネタイト晶出。1980年発掘調査分。未発表。
 - ④ 大蔵池南遺跡 岡山県久米郡久米町。製錬炉とセットと考えられる鍛冶炉が検出されたが、これから出土した鉄滓にマグネタイトが認められた。
大澤正己「大蔵池南製鉄遺跡を中心とする鉄滓と鍛冶滓の検討」『稼山遺跡群Ⅳ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1982
 - ⑤ 土師27—1 街区遺跡 大阪府堺市百舌鳥陵南町3丁14番地。1街区1地区P 4暗灰黄色土出土鉄滓にマグネタイトの晶出がみられる。大澤正己「大阪府所在土師遺跡27—1 街区大和川、今池遺跡、高師浜遺跡出土鉄滓の調査」『大和川・今池遺跡』Ⅲ（第6地区・「古道」発掘調査報告書）大和川・今池遺跡調査団 1981
 - ⑥ 空澤遺跡 群馬県渋川市行幸田空澤。第二鍛冶址出土の鍛冶椀形滓でマグネタイト晶出。鉄滓の分析や